
魔法少女リリカルなのはRewrite

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Rewrite

【Zコード】

Z6751Z

【作者名】

由真

【あらすじ】

もはや敵なしと云われるほどの実力者、氷上京谷は高町なのはとある違法研究施設に突撃をかけようとしていた。そこで出会ったのは一人の生きる意味を知らずに人間兵器にされかかった少年。

京谷はその少年を助け、自分の仲間に引き込むことにしたのだった。
・。

それから一年後、時空管理局局長堂本奏のもとナイトオブラウンズ

のメンバーの一人となつた一騎は壮大な戦いに巻き込まれていく…?

その剣は誰を守るために、その意志は何を変えるために。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

お知らせ

この作品はEエプリスタ（現在非公開）で掲載していた私同名小説の前の時間軸になります。また、そのサイトで掲載していた内容も後々掲載するのでご了承ください。

この作品はリリカルなのはシリーズの一次創作です。
また、一部原作とは異なる設定がありますが、あくまでこの話のことであり、原作とは一切関係ありません。

Rewrite0・若き剣士（前書き）

一騎「始まつたな・・・」

京谷「ああ。つか許可とつて10か月くらいほつといて今更再始動つてのもなかなかいい加減だぞ」

作者「面白い・・・。だつて仕事もいそがしいし」

一騎「まあ、いいか。んじや、始まるだ」

Rewrite0・若き剣士

「味方の損害率、70%突破！！」

「第五防衛ライン崩壊します！！」

「第104部隊から援軍要請が・・・・！」

「ぐう、何故だ！なぜ我が国がいつも簡単に圧されてしまつてゐるのだ！？」

総指揮官であるうつ男は非常に焦つた顔をしていた。今この世界では戦争が起きている。この国と近隣の小さな国。

無論圧倒的に、今やられている側の国の方が圧倒的な軍事力を持っている。なのに何故非常に不利な状況にいるのか。

それは・・・小国側に最強の戦士達が味方にいたからだ。

「星屑の咆哮^{スターダスト・フレア}ッ！」

そう叫んだ俺の仲間の一人、星川さららの放った砲撃がフィールドを張つているにも関わらず、再び複数の機械魔神をいとも簡単に撃ち抜く。

当たり前だ、魔法とビームじゃ組成が違う。混乱するのも無理はない。

「隕石の衝撃^{メテオ・インパクト}ッ！」

別の方向ではさららの双子の姉、星川さららが同じく機械魔神をぶつ壊していた。

二人ともまだ10歳なのになかなか出来るやつだ。

さて、俺も動かないと敵にロックされてんな。

前方に六機……いずれも中距離戦闘用か。向こうさんは、俺を見つけるや否やマシンガンを撃ちながら突撃してくる。

が、焦つているのが狙いが甘いし、統率もとれていない。

ならば、隊長機を先に落としておくか。

俺は自分の刀の一本、白龍を抜いて敵の動きを注視する。そして、隊長機が俺の射程に入った。

「デラゴン……スレイヴッ！」

俺は刀に淡い黄色の光を纏わせ、薙ぎ払う。刹那、刀から三日月状の剣撃が放たれ隊長機を引き裂き撃墜する。

隊長機が落とされ、残りの機体の統率がさらに悪くなる。それを読み取った俺は一気に距離を詰め、すり抜け様に一機の腹を引き裂く。そして爆発、さらに誘爆して二機を落とす。

そして残りの一機は苦し紛れにマシンガンを乱射してきた。が、そんな甘い照準で俺が当たるわけはない。

反転した俺はそのまま、コックピットに刀を突き刺す。

誘爆状態に入つてからすぐに抜いて、上空へ避難した。その後、それが爆発した。

俺が一息突いた後、シオンから通信が入る。

「シオンさんか」

『どうやら最終兵器が出たようです。反応の情報を転送します』

そして程無くそのデータが送られてくる。ふむ、オールレンジ攻撃とマルチロッド攻撃が出来る高機動の機体か。成る程、すこしは骨がありそうだ。

「じゃあシオンさん、要塞破壊の攻撃お願いしていいですか」
『わかりました。では、五分で片付けてくださいね』

つたく、シオンもしひとすごい要求をしやがる。何て言つている間に敵は俺目掛けて突っ込み、俺をビームソードで斬りつけようとする。

俺はそれを刀で裁き、難なく切り刻んだ。

すると、遙か後方から高火力のビーム砲が飛んでくる。

虚を突かれたがなんとか回避し、飛んできた方角を見た。

そこには、蒼い翼を讃えた神々しい機械魔神がいた。
それは他とは圧倒的に違う速さで迫つてくる。

「ひつ

俺は、刀を構え直し敵の攻撃に構える。敵は一刀流のビームソードを抜き薙ぎ払うように突撃していく。

その脇をなんとかすり抜けて、反転する。

射撃は得意じやねえが仕方がねえ。

俺は、刀を握つてない手に魔力を込めて無言詠唱する。

そして振り返つた刹那に誘導射撃魔法”アルテミス”を放つた。

魔方陣の周囲に幾多の光の珠が浮かび、すぐに敵目掛けて光が駆ける。

そしてすぐに、突きの構えをして突貫。

アルテミスが直撃した直後に、白龍が敵を捉える。確実に落としたと思ったが違つた。

爆発の煙が晴れたとき、敵はしつかりとシールド防御をしていた。そしてシールドを左に振り払い、レールガンを至近距離で発射する。が、遅い。俺は振り飛ばされる力を利用して後ろに回り込んでいた。そして、左の翼を斬り落とし爆発。敵はバランスを崩した。

あと2分か . . .

残り時間を確認して、敵の正面から斬り結ぶことを選び、旋回しながら迫る。相手も律儀にそれに合わせてきた。

俺はあらかじめ左手に光波シールドを精製しておいた。なぜか？ 直ぐに解るさ。

そして真っ正面から斬り結ぶ。俺の刀は相手のシールドを捉え、相手のビームソードは俺のシールドを捉えた。

さすが最強の機械魔神。出力が違うな。だけど . . . 終わりだ。

俺は左手に一瞬だけ力を込め、ビームソードを押し退ける。そして直ぐ様もうひとつの方、”黒龍”を逆手で抜きそのまま右腕を斬り落とした。

あとは簡単、黒龍を手で回して正しく持ち返し刃で右脚、白龍で左脚、そしてクロスで両腕を斬り落とした。

ついでなので、アルテミスで羽と頭を頂く。

バランスを失った相手は為す術なく地上へ落下していった。

そして、一息ついて辺りを見回すときちらりとさらりがほぼ制圧していた。ある意味なのはたちよりタチが悪いな . . . 。

「シオンさん、終わりました」

『解りました。では、全員を下げてください』

「了解。全員に告ぐ！－直ぐに撤退だ！－」

俺は、前線に向かっている連中に下がるように告げて、自身も安全圏へ下がった。

そして、シオンが自身のインテリジェントデバイス”アイシクルエッジ”を構え、魔法の詠唱を始める。

「極地に集いし白銀の光・・・消せぬ輝きを纏い、闇を払う剣となれ・・・ダイヤモンドブリザードッ!!」

唱えた瞬間、射線軸に七つの魔方陣が浮かぶ。そして翳された手から、青白い砲撃が放たれた。

青白い光が魔方陣を通過する度に速く、強力になる。最後の魔方陣を通過した時、放たれた時の大きさより何倍も大きい光となつて、要塞へ向かつて走つていった。

「フリーダム
”自由”、反応ロスト!!」
「敵、全軍撤退していきます!!」
「なに!? なにをするつもりだ・・・」

総指揮官はまさかの事態に焦りの顔しか浮かべられない。そして、何気なく前線に顔を向けるとこちらへ飛んでくる一條の光を発見した。

「な・・・!!」
「う・・・うわあああ!!」
「に、逃げる!!」

本能的に死を予感した兵士たちは我先にと逃げ出し始める。しかし、その頃には到達し要塞を巨大な氷山へと変貌させていた。

俺とシオン、きらら&ささらがレジスタンスたちのキャンプに降り立つと、戦線に出ていた人達たちが歓喜の声で迎えてくれた。

「ありがとうございますー！」

すけえな兄ちやんら！！！」

助かりました……！」

各々から感謝の言葉を述べられる。中には感極まって泣き出す人もいた。きらり&あららの幼女コンビはおっさんたちに肩車されたり手荒く頭を撫でられたりされ、喜ぶ一方で笑顔を浮かべて

「いえ、俺達は少しだけ力添えただけですよ」

俺はと、レジスタンスの代表に謙遜の言葉を返していった。
そりや当たり前だろ、社交辞令だ。まあ・・・俺がそういう人間
だからだろうからな。

「——始、ナニヤアハテテナリ。」

「ん、セリか・・・。アミミジ、アミミジー・・・。」

- 60 -

卷之二

シオンに催促されて、俺はきらり&さらを呼ぶ。四人が近くに集まつたのを確認してシオンが転送ゲートを開いた。

にまとわりつく。

その異様な光景に、みんなは呆然としていたが、やがて一人が駆け寄りながら叫んだ。

「教えてください！－！あなたたちは何者なんですか！？」

まあ気持ちは分かるよ。だから、教えた。

「俺達は . . . “円卓の騎士”^{ナイトオブラウンズ}さ」

Rewrite0・若き剣士（後書き）

京谷「すぐねえなオイ。やる気あんのか」

一騎「いやプロローグだし」

京谷「書いた当時作品知らなくていきなり原作崩壊してたな」

一騎「それはまあ・・・しかたない。こんなでも読んでくれた人は出演依頼すごかつたしな」

京谷「全員は？」

一騎「さすがに無理らしい」

京谷「一人で20人くらいよこしてたしな。つと、そろそろ」

一騎「こんな小説を読んでくれた方には大感謝を。それだけはまた次回」

そうして俺達は管理局のある世界の自分たちの部隊、ナイツオブラウンズの隊舎に帰還した。

思ったよりも早く済んで助かつたところだ。

「おかえり一騎、シオン、きらり、さらり
「おかえりです」
「はい、ただいま戻りました」
「貴方もだ、京谷さん」
「ただいま、京谷さん、フイオネ」
「ただいまです」

管理局局長直轄特務部隊、”ナイツオブラウンズ”隊長、氷上京谷さんとユーボンデバイスであるフイオネに出迎えられ、四者四様の挨拶を返す。

京谷さんもバリアジャケットモードのままである辺り、また訓練やらなんやらしてたのだろう。フイオネも大きくなつたままだ。
さて、この京谷さん^{ザ・クリエイター}宝具生成、異能再現という反則的レアスキルを所持している。そして己の魔力もEXというとてつもない量を保有しているため管理局で倒せるやつは居ないんじやないかというくらい強い。本気を出せば本人曰く、”星の五つや六つ簡単に消せる”らしい。

誰かこいつを倒せるってやつは前へ出るんだ。

こっちのオレンジ頭の人はフイオネ。京谷さんのユーボンデバイスなんだが、単騎でなのはと張り合っていたことがあった。あのリンクーコアがあつてこの融合騎ありといった感じだな。

「まだみんなは帰つてねえよ。やつてロボーで休んでな。時間まではまだあるからさ」

「「「「さこつ」「」「」「」」

京谷さんの指示を聞いた俺達はとりあえず隊舎のロビーに向かつ。隊舎は京谷さんの趣味なのか、妙にアットホームな感じがする。

「では私は支度してきますね」

と、シオンはそうい残して自室に帰つた。
じゃあ俺はなんか飲むもの飲むかな。

「なんか飲むか、ちりぢきちりぢき」

「あたしジンジャーホールー」

「私は・・・イチゴラテで・・・」

準備の早いやつだ、と俺はちりぢい姉妹を見ながら思つ。とりあれず、頼まれた飲み物を買ってやつた。飲み物を受け取つた二人は嬉しそうに飲んでいた。その辺りは普通の少女だなと俺は思つ。そんなじょそこらの小学校ならモテるのだろうが、まあ・・・戦つてるときの表情は見せたくないな。特にきらり。

「あ、一騎せんなんか失礼なこと考えたでしょ
「気のせいだ」

ちり、ちすがきらり。近接戦闘を生業とするやつは違つな。
まあそんなことはさておき、俺はアーモンドチョコ珈琲を買って一口啜る。つむ、いつもながら上手い。たとやかなチョコの回味がローハーとマッチして最高の味を引き出している。

「一騎さんつてこつもそのコーヒー飲んでもますよね？」

ふと田を俺の手に向けたさらりが質問してくれる。

「ああ、はじめて飲んだときつまくてな」

「そりなんですか・・・」

「なんだかんだで適當なんだね、一騎さん

「うつせ

そんな他愛のない会話をしながら、談笑する。すると、一階から誰かが降りてくるのが捉えられた。

「ありや、一騎くんたち帰つてたんだ」

「ああ、ただいま命」

「おかえり きらりとさりらむね

「ただいまつ

「ただいまです」

降りてきたのは同じくナイツオブランズのメンバー、月城命だ。
槍型の“デバイス”オベリスクを駆る近代ベルカ式で、陸戦A A +
の桜塵おうじんの騎士である。槍を扱わせれば一級品で、”竜騎士”的異名
で呼ばれる事もあった。

「今日はあんまし怪我ないね？一騎くんも成長したか

そう言つてくすくす笑う命。一命の方がひとつ年上だが何故か年上な雰囲気を持ち合わせていない。スタイルは大人なのだが・・・。

「やうじやせ、午後から何があるかは知ってるよね？」

「ああ、アースラに隊長と俺と優希、希来が派遣されるアレだろ？」

いつたいなにが . . .

「そうですよね。アースラにはフォイトさんやなのはさん^{はねだきい}さんが居ますし、なによりクロノさんとかも . . .」

さらりも同じことを考えたようで、はてと首をかしげたがそれは空中で霧散した。気づけば時間だったようで、京谷さんが羽田希来と俺の妹、桜井優希さくらいゆうきを連れてやってきたからだ。

羽田希来は俺の親友で、ナイツオブランズメンバーでもある。自律兵装も組み込まれた機械式の剣”アロンダイド”を駆る近代ベルカ式の陸戦AAの魔導師だ。俺が知ってる近代ベルカ式の魔導師の中ではかなり射撃が上手い。

変わつて優希は俺と同じ数少ない双剣の使い手で、”ルナティック”と”サンライズ”を扱う。ちなみにデバイスなのはルナティックの方だ。近接型にも関わらずミッドチルタ式で、空戦AAAの魔導師だ。なぜミッドチルタ式なのかは、使用する魔法の大半が、射撃や治癒防御魔法で占めているからだ。つまりところ優希は俗に言つ魔法戦士なのだ。まあ . . . 俺が言えた義理じゃないのだが。

「まだ休憩中だったか？」

と、京谷さん。

「いえ、行くならもう飲み干しますよ

そう言って、俺は「一ヒーを飲み干す。きらりときらりますでに飲み干していた。

「ん、準備できたか？」

「はい。きらりときらりはもう少し休憩な。んで終わったらデスクワーク

「「はーっ」「

俺が指示を飛ばすと一人は元気よく駆けていった。10歳らしく元気なものである。

「そいじゃ行くぞ、一騎、優希、希来
「「「はーっ」「」」

先頭を行く京谷さんに付いていく俺達。そして程無く転送ゲートについた。

「田え閑じてうよ」

そういうつて京谷さんは慣れた手つきで詠唱とゲート起動を行い、瞬にして俺たちは異空間へ飛ばされた。
そして気がつくとあら不思議。俺達は管理局巡航艦”アースラ”のブリッジにいた。

「あら、もう来たんだなナイツオブラウンズの諸君

一番最初に声をかけてきたのは、アースラ艦長であるクロノ・ハラオウンだった。隣には言わずと知れたエースオブエース、高町なのはと希代のエースストライカー、フェイト・T・ハラオウンもいた。

「はじめまして、高町なのは二等空尉です」

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウン執務官です・・・

なのはは元気よく、フェイトは真面目に挨拶してきた。もちろんこちらも挨拶をする。

「管理局局長直轄特務部隊ナイツオブラウンズ隊長、氷上京谷二等空佐だ。で、こつちが」

「京谷のユーノンデバイス、フィオネです」

「桜井一騎一等空尉です」

「桜井優希曹長です」

「羽田希来軍曹です」

「ああ、よろしく四人とも」

挨拶にクロノさんが労いの言葉をかけた。そして、京谷さんが口を開く。

「久しぶり。元気そうで何よりだな、クロノ？」

「ああ、闇の書事件以来か。空佐もご健勝で・・・」

「つと待つた。別に階級で呼ばなくていいだろ」

「だけど・・・」

「俺がいいつつうんだからいい。むしろ命令」

「は、はあ・・・」

妙なところでわがままを使う人である。

「じゃあ京谷、再会を喜ぶのはこれほどにして・・・」

「ああ、そうだな。じゃあお前ら、ブリーフィングルームに行くぞ」

「…………はーっ」「…………」

俺達はそつしてブリーフィングルームに向かう。

「ねえ」

なのはが優希に話しかける。

「あ、はい。なんでしょうか . . . ?」

「優希ちゃんは訓練とか好きなの？」

「はあ . . . お兄ちゃんにたくさん鍛えられましたからそれなりには . . . 「.

「じゃあさ、私と模擬戦しないかな？」

「ええ！？」

「いいじゅん、優希ちゃんみたいなタイプは初めてだから

「あう . . . どうしよう、お兄ちゃん . . . 「

なのはの熱意に折れそうな優希が俺に救いの手を求める。が、

「頼んだぞ、なのは」

「やたあ！」「お兄ちゃん！――」

なのはの喜色満面な声と優希の悲観的な声が重なる。残念だが、優希はなのはに教導してもらうとした。そして、俺は誰かの視線に気づく。振り返ると、そこにはフロイトがいた。

俺がペコりと頭を下げるが、フロイトもペコりと頭を下げた。んー、いい子だなフロイト。

「あの . . .

「なに？」

「えと . . . その . . . 一騎さんは、おいくつですか？」

「俺か？俺は13だよ。ちなみに優希が11、希来は12な

「同じ年なんですね」

まあそういうことになるか。

「えと . . . 術式は？」

「近代ベルカだよ。デバイスは . . . アルル！」

俺がその名を呼ぶと、俺の胸の前の空間が湾曲し、そこから俺のコニゾンデバイス、アルテマウェポン＝ドゥーノが現れる。

山吹色の髪で片田を髪で隠している。別に何かあるわけじゃない。

体はけつじうグラマーだ。

一応女の子なためアルテマウェポンと呼ぶのはあまりに可哀想だと思って、愛称を込めてアルルと呼んでいる。

あ？なんで俺もコニゾンデバイスがいるかつて？それはあれだ、そこの京谷さんのおはがきまだけどな。

「どうたの・・・？」

アルルは寝起きだったようで寝巻き姿のままだった。別に俺の中に必要はないが、アルル曰く俺の中は心地よいらしい。

「はやてとおなじなんですね、一騎さんのデバイス」

「ああ、はやてはリインフォースだつたか」

「私はリインちゃんみたいに優秀じゃないんだけどね・・・」

とか言つてゐるが、アルルはリインとは別方向で激しく優秀だ。主に能力強化や防御、回復で進化を發揮する。アルテマウェポンという名前を貰つてゐるせにそれもどうかと思つけど。

「じゃあ武器はどうなんですか？京谷さんと同じ？」

「いやいや・・・んなわけあるかよ・・・。俺のはこれだよ

そう言つて、俺は愛用の一振りの刀を取り出す。

「うわあ・・・」

俺の刀を見て、フロイトは感嘆の声をあげる。俺から白龍を受け取

り、フェイトは一息で抜いた。頭上でぐるぐると回して刃紋を見てからまた閉まつて俺に返す。

「業物なんですね……私、刀の事はよく分からないんですが、すぐ強そうな感じがします」

「いや、今フェイトが抜いたのはさうでもねえよ」

「え？」

まあ驚くわな。そこへアルルが口を挟む。

「一騎の白龍は不殺の刀つていう異名があるんです。その刀は人を傷つけることが出来ないんですね」

「ええ！？」

「正確には、”斬つた斬り傷がすぐに治る”んだ。まあその代わり痛みは普通に斬つたときより遙かに痛いんだけどね」

「へえ……」

フェイトは関心を持つて、アルルの話を聞いていた。そして程なくブリーフィングルームに到着する。

そして戸を開けると、すでに京谷せんとクロノせん、希来、なのは、優希にハ神はやてが座っていた。

「あ、はやて」

「フェイトちやんもきとつたんやな。そつちのかつちょええ子とちつこいのは？」

「桜井一騎だ。こつちはアルル」

「よろしくです、はやてさん」

「私はハ神はやてや。こつちのは……」

「ラインフォース？です アルルちゃんからはなんか似た者同士な

気がするです」

「うん、私もリインと回りゴンジングバイスだよ」

「やうなんですかー」

なんかリインとアルルの間に既に固い友情が結ばれたようだ。

「お、来たか。とりあえず座れ」

京谷さんの指示に従い、俺達は各自座る。俺の右にはフロイト、その隣には希来、左にははやてとこつた具合だ。

「よし、ではブリーフィングを始める。まずはこれを見てくれ」

進行役をするらしくクロノさんは、そのままモニターに廃墟に立つ謎の生物の画像が投影された。

「これは . . .?」

と、なのは。

「これは一週間前に第2武装隊が送ってきた最後の映像だな」

「第2つて謎の反応を調査しに行つたことですよね? もしかして第

2武装隊って . . .」

「全滅した可能性が高いな . . .」

優希の疑問に俺が答える。

「せやけど第2ちつたらなんかに特化した戦闘のプロが所属すると
いやう?そんな所が何でそう簡単に全滅するんやろか」

「考えられるとするなら古代遺産が絡んでる可能性は高くなね」

「こや、もつひとつあるだフュイト」

「え？」

フェイトの分析に京谷さんが横槍を入れた。それに対しクロノさんが確かにといふうに頷いた。

「ああ、京谷が三ヶ月前に倒してきたスタイルヴのパターンもある」

俺はそれを聞いてそういうこともあつたな、と思つた。あの時、京谷さんがふらりと出掛けたときに打ち倒した魔物である。

「つまり、明確な意思を持つた魔物が闊歩している可能性がある。管理局は危険対象として発見しだい駆逐、という方向で決定している」

「じゃあ俺達はその対策どこみ掃除を請け負えばいいのか？クロノ」「そういうことだ。だが、データが少なすぎる。後にも先にも現状はこれだけ。ユーノ使って無限書庫ググらせたり管理世界に片っ端からアクセスさせているんだが……」

喋るクロノさんの表情を見る限りあまり芳しくないようだ。しかし然り気無くネット用語が言葉に混ざっている辺り流行については行つているようだ。

「だから最近ユーノくん見かけなかつたのかあ……」

なのはが寂しそうに呟く。ふたりは親友らしいから、話したり一緒にご飯が食べられなくて寂しそうな思いをしているのだろう。そこに京谷さん宛に通信が入る。

「どうした」

『第47管理世界』ガイアに例の件に関して情報がありました』

「それで？」

『はい、データの魔物がその世界に来ていたようですがなにやら“みおん . . . ”と呟いていたそうです』

「「「「みおん . . . ?」「」「」「」「」

その場に居合わせた全員が首を傾げた。

「それだけか？」

『ええ、申し訳ありません . . . 』

「いや、関与したてはそんなもんだろ」

『そうですね . . . では、失礼します』

そつして局員の通信は途絶えた。

「さて、一応ガイアに向かつた方がいいか？」

「そうしてくれ、実際に向かつて分かることがある」

「うし、じゃあ今回は俺、一騎、なのは、紫苑で出向いわ」

「了解した、出向許可を出す」

どうやら具体的な方向性は決まったようだ。そして京谷さんはすぐさま神月紫苑さんを通信で呼び出した。

『なんじや京谷』

「紫苑、今大丈夫か？」

『うむ、出向も終えてつい先程までオンライン麻雀に興じておつとの』

「せつか、なら今から出撃準備してガイアの管理局基地に向かつてくれ

『了解じゃ。しかし、急に出撃指令などまた穏やかな話ではないの . . . ?』

「まあ穏やかな話じゃないな . . . 」

『ふむ、ならば10分有れば指定ポイントに行つておいで』

「ああ、助かる」

そうして、京谷さんは通信を切つた。

「よし、じゃあバリアジャケットに変えて出撃るぞ」

「「ア解!!」」

「アルル!」「レイジングハート!」「フィオネ!」

「はいっ!」「Y e s , M y m a s t e r」「おつけー!!」

京谷さんと俺、なのはの呼び掛けに応じてフィオネらが応える。そして体は光に包まれ制服がバリアジャケットに変貌していく。俺のバリアジャケットは黒が基調で、制服を黒くしたような感じにも見える。そして、腰には一本の刀が添えられ白のマントが左腕に巻かれている。

京谷さんは俺と似ているが、このまま黒コートである。

「ふええ . . . 二人ともかつこいいね . . . 」

なのはが驚いたような顔で、こちらを見ながら言つた。確かに俺と京谷さんが並べば天使と悪魔に例えられることもしばしばである。

「まあ俺はかつこいいからな」

「自分で言つか、京谷さん . . . 」

京谷さんは分かつていてそつそつ振る舞いをすることがしばしばある。まあ言動に行動がついていくのだから俺は文句言わないけれど。今思えば同じ年なんだよなあ . . . 。

「どうした、一騎

「いえ、なんでもないですよ」

「そうか、んじゃ行くか」

そう言つて俺達は再びブリッジに向かつ。俺と京谷さんがならんで歩いている姿は輝かしく映つたのだろう、すれ違う人ほぼ全員が敬礼で迎えてくれた。京谷さんは管理局では異常なまでの魔力と多彩な戦術に敬意を表して、”神帝”と謳われている。ちなみに俺は武器である一本の龍の名前がついた刀から”双龍”と呼ばれているらしい。

「人気者だね、二人とも」

なのはは笑顔で俺と京谷さんに話しかける。

「まあ・・・なあ・・・」

「人気者は困るぜ」

あはは、京谷くん自分で言つたら意味ないよ？」

「たまにはいいじゃないか、なあ？」

「いやいや、俺に振られても困るから」

「騎は澄ましてやがるな。草食か、んん？」

あ、ちょっと暴走してやがるな。

そんなこんなで、談笑しつつブリッジに着いた。それからは例の視界暗転による転送で第47世界ガイアの管理局基地”ヨーノラス”についた。俺達が基地の広場に降り立つと、一人の士官が出迎えてくれた。

「お疲れさまです。本局管理補佐官、二一チエ・ゲインズです」「アルニカ・フォレスト通信士です！お茶の用意してますから、休

憩室にどつぞ

「構わないよ、アルニカ。俺達が「こんな」といへばると思つか?」

「ま、まあそんなんだけど . . .」

アルニカは困ったような顔で答える。それを不思議に思ったか京谷さんが口を挟む。

「知り合いか?」

「ああ、初めての単独で助けた子だよ」

アルニカは俺が初めて単独で担当した任務の際に助けた子である。震災の処理だったのだが、彼女は身寄りがなかつたために俺は管理局で勤めることを勧めた。まあアルニカ自身に適正があつたのもあるがな。

「お、じゃあななかなにイイ感じな . . .」

「んなわけあるか」

「 . . .」

「ほらあ、一騎くんが否定するからアルニカちゃん沈んでるよ?」

なぜ沈むし。

「()」か?」

「はい、対象は北西の雪が多い大陸の南に渦潮に囲まれた島があるのですが、そこに局員が調査に行つていて折りに発見したそうです

会議室のモニターにガイアの地図を投影しながら、俺達は例の敵の居場所を聞いていた。

「渦潮に囮まれた島があ……不思議な場所だね」

「まあ渦潮に捕まつたら大概は壊れるしな」

「つーことは、水の敵が出てきそうだな……」

「そうなりますね。ここは不思議に包まれた世界ですから。まだ分からないことはたくさんありますよ」

そう言つて、ニーチェは剣をひとつ取り出す。

「つてこれは？」

「この世界のエクスカリバーです」

「これがか!?」

「京谷くんのエクスカリバーとは違つた形だね?」

「そりや、世界毎に同じ名前のはある。違う世界では同じ姿形したやつが俺達とは違う生活を送つてているのだから。ちなみにこの世界には”真のエクスカリバー”があつたろ、古代遺産の『

「はい、ですがどこにあるかは未だにさっぱりですね……って話が逸れています」

「それがうちのクオリティだ。とりあえず向かえばいいのか?」

「はい、お願ひします」

というわけで、早々と準備した俺たちはその場所に向かつて通常飛行で向かっていた。

『皆さんの速度なら10分で着きますね。後は定時連絡と帰還時のコールがあればこちらからは特に指示はしません。氷上空佐の指揮にお任せします』

「了解だ」

アルニカからの通信で任務確認をする。通信が途絶えた後最初に口

を開いたのは紫苑さんだった。

「そう言えば、今日で京谷が隊長になつて三ヶ月じゃの。指揮には慣れたかの？」

「んー……ほちほちだな。それにうちの連中は優秀だから簡単な指示で思つた以上の事をやつてくれる」

「わうじゅの。シオンやアリスに掛かれば分隊指揮はお手のものじやねうから」

「ついでに言えば私と京谷くんが会つてもうすぐ4年なんだよね。一騎くんとは2年かな？」

「そうだな……案外早いもんだ。階級が上がればもつとせいかなるんだろうな」

「だな。俺は16になりや提督試験の権利得られるし、紫苑はもうすぐ一佐の試験がある」

「みんな目標あるもんねえ……」

なのはは遠い目を向けながら呟く。なのははまだ中学生だからそこまでなのだろうが、ガチガチの局員な俺は十分に忙しい。そのうちなのはらがそうした時間を送り出すようになるのは嬉しいのやら悲しきのやら。

ちなみに俺がフェイト・はやてと面識がなかつたのは一人とも俺とは別方面な仕事だからである。なのはからは会つてみるかと何度も言われたがまったく時間調整が出来なかつた。しばらくすると、前方に渦巻き島が見えてきた。

「あ、あれじやない？」
「……なんかいる？」

俺のマントにくるまつていたアルルが呟く。目を凝らしてみると、飛竜っぽいのが何匹もいた。そのうちの一匹がじちぢに気づいたら

しぐ、こちりに向かってきている。

「確實に敵意を剥いておるの」

「だな。戦闘開始するぞ……一騎と紫苑は遊撃……なのはは後方支援だ！」

「了解じや……京谷は指揮を……」

「分かつた！……」

そしてそれぞれ散開する。俺は一旦上空に上がった後、アルルと意思疎通を完了させた。

「いぐぞ」

「ユニゾン・イン！……」

アルルが俺と同調し、ユニゾンインを完成させる。この間俺の髪の色が薄くなり、瞳の色も薄くなる。

そして銀竜の射程圏に入つたらしく、銀竜はブレスを吐いてくる。それにいち早く反応した紫苑さんは、オリジナルのバリア系防御魔法”チーンウォール”で防いだ。それに呼応して、なのはがディバインバスターを撃ち込み、撃墜する。

俺はとくに、銀竜の一匹が殺られたのを見た仲間が怒つてこちらに来たのを迎撃するために突撃していた。

『中継です！銀竜には特殊防御を備えているのを確認しました。気をつけて！……』

と言つ声と俺の”ドラゴンスレイヴ”的攻撃が重なつた。光牙は銀竜に向かつて一直線に向かう。が、銀竜に張られたバリアに入った瞬間、攻撃が屈折した。

「！？」

「攻撃が……曲がった？」

『（ジャマーフィールドに近い反応を検知しました）』

「む……様子見でワンショット」

『（ストライクチョーン）』

紫苑さんが攻撃を仕掛ける。魔力で形成した鎖が銀竜にまとわりつくが、腐りはねじ曲がりやがて砕けた。

「京谷、分かるかの？」

「ありやあ、ディストーションフィールドだな。射撃はまず届かねえ」

「なるほどね。じゃあ、京谷くんも前線に出よつか

「ああ」

そう言つて京谷さんはゲイボルクを呼び出す。それに呼応するように、俺達は近接攻撃のスタンバイに入った。

「ACUDライバー、起動」

「ストックブレイク、スタンバイ」

「スネイクエッジ、スタンバイ」

刹那、全員が目標に向かつて突進した。俺は固まっている箇所に、三人は一体ずつに。

ゼロ距離において、ディストーションフィールドが通用するはずがない。なのはのエクセリオンバスター、俺のストックブレイク、紫苑さんのスネイクエッジ、京谷さんの竜剣でまとめて葬った。

「すごいね……みんな。一瞬で全滅なんて」

「なんだかんだでなのはも落としているじゃないか」

「だけど、一騎くんや紫苑さんは複数倒したし・・・」

なのははそう言って俯く。俺のストックブレイクは範囲攻撃で、攻撃対象と半径数メートル内にいる同じ攻撃対象の敵に物理攻撃ダメージを与えることが出来る優れものの技だ。言うなれば雑魚殲滅用の技である。紫苑さんのスネイクエッジも似たようなものである。京谷さんがちょっと不機嫌なのは撃墜数で負けたからだろうな。そこに再び通信が入る。

『聞こえつか京谷』

「その声、カルトか?」

『ああ、任務中に例のやつとおぼしき奴が攻撃してきた』

「なんだと!?』

『まあ一捻りにしてやつたが・・・これ、簡単に終わるよ!つなじやねえぞ』

命と同じ槍使い、”ロンギヌス”を駆る空戦S+の荒くれ者カルト・ヴェステンバーグさんはそう呟いた。

そう・・・俺達はこれから先に起こる事の重大さに、まだ気づかなかつた。

Rewrite2・同窓会任務に・・・なつたらいいよな。（前書き）

命「投稿早いね！？」

作者「まあ・・・ねえ。とりあえず第一話」

Rewrite2・同窓会任務に・・・なつたらいいよな。

-view cult -

「ちつ・・・派手にやつてくれてるな」

俺は前方に広がる廃墟を見て嘆息した。ここはガイアで”霧の大陸”と呼ばれる大陸の南ゲート一つ空の関所にいた。リンドブルム側に俺達やいるんだが、ゲートが盛大に破壊されいやがる。ここにいた連中はあらかじめ避難していたのがせめてもの救いか。

「・・・酷いですね」

隣にいたスノウ・ルウ・ベルカが呟く。こいつは日本刀を駆るS+のベルカ式の魔術師だ・・・ってなんで俺が説明せにやならんのだ。

「まつたくだね・・・。けどいない分、目撃情報がないのよね」

はあ、とセレナ・チエリカールはため息をつく。まあこいつはミッドだ、うん。俺と同じ槍を使う。

「話を総合すつと、飛空挺を通すためにゲートを開けた瞬間謎の攻撃があつて・・・それでなんかでかい爆発があつたつてこつたな、ガキンチヨ」

『は、はあ・・・そんな感じです。なんか怖いです・・・(ボソッ)

『う、おおい!!怖いってなんだゴルア!?』

『ひ、ひいい!!』

「カルト、新人泣かしはダメですよ」

「これから若い子がついてこないんだよ
やかましあー！」

スノウとセレナに宥められたので仕方なく退いてやった。

- v.i e u k a z u k i -

「ん . . . 」
「ん . . . 」

通信が終わった直後、俺はひらひらと舞う羽根を見つける。それを手にとると非常に艶やかな触り心地がした。

「ん、どうしたの . . . ってこれは？」

「どれどれ . . . む、これは銀竜の羽根じゃの。普段は倒せば碎けて消滅するのじゃが、残るのは稀でな。ぬしは幸運だの」

「そうなんですか？」

「うむ、まあなにかに使えるかもしかんから大事にとつておへとよ
かろつ」

紫苑さんにそう言わされたので、俺は懶に銀竜の羽根を仕舞った。

「うし、じゃあ帰るか」

京谷さんの一言で、俺達は帰還体勢に入る。その帰り道、なのはは京谷さんに質問した。

「ねえ京谷くん、ディストーシヨンフィールドについて詳しく教えてくれないかな？」
「ディストーシヨンフィールドか？それはフィールド防御のひとつ

でな、周囲に鏡みたいなのを展開して攻撃の屈折を行つんだ」

「魔力による攻撃も光が含まれておるから曲がつてしまふんじゃな」

「そうだ。威力が高いものはある程度は押し込めるが、かなり弱められるし敵の魔力が高いと大したダメージにならない。そこが怖いところだわな」

「でも至近距離ならあまり曲がつた感じはしなかつたんだけど . . .」

「まあな。ディストーションフィールドは周囲に展開、さらに表面しか効力がないから範囲の中では効果がない。だから、ゼロ距離の攻撃にはめつぽう弱いんだ」

「なるほど . . .」

なのはは関心深そうに頷いた。そこに俺は紫苑さんに話を振つてみる。

「まあ射撃型には辛いもんがありますよね、紫苑さん」

「そうじやの。特になのはやはやってみた的なガチガチの砲撃型には天敵に近いじやろ」

「そうですよね . . .」

「ま、いい機会だから対策練つたらいいじやろ」

「はいっ」

そんなこんなで時間が過ぎていった。

- view count -

「そついえばカルト、一緒の任務は久しぶりですね？」

「ああ、そうだな。この三人は久しぶりか」

突然のスノウの言葉にせりいえば、といつ風に俺は頷いた。

「ま、隊長が氣を使って一人きりになるよいつ調整してるしね
「．．．後で小突いとくか」

要らん氣を回すやつにお仕置きすることを誓いながら、あたりをまた見回す。南ゲートが大破している以外は、縁が広がるよい所だと俺は思ひ。どうやら、南ゲート平原に美味しい湧き水があるらしいから、帰りに飲むのもいいだろうな。そんなことを考えながら横を見ると、セレナが考え方をしていた。

「どうした、セレナ」
「ふえ！？あ、いや．．．」

突然声を掛けられて、素つ頓狂な声をあげるセレナ。

「それより．．．良いとこだね」
「ああ．．．」

俺が思っていたことなの、おとなしく頷いく。

「せつかくですから、少し歩いて回りますか？」

と、スノウ。

「うし、じゃあ下に降つるぞ」
「「「解つ」」

そう言つて、俺達は飛行魔法を使って、平原の南ゲートに降り立つ

た。

「へえ . . . 緑が凄いね
「気持ち良い場所ですね」

二者一様の感想を耳にしながら、俺は湧水の方を見た。すると、なぜかポットとコーヒーセットが置き去りとなっていた。

「つてなんでこんなもんが落ちてんだよ」

「どうたのー」

俺の突っ込みにセレナが反応する。そして俺の背中からひょっこり顔を出して問題のブツを見て、

「つてなんでこんなもんが落ちてんだのさ」

同じ突っ込みを入れた。ちょっと面白くなつた俺はスノウを手招きして呼ぶ。

「どうしました、カルト？」

スノウが来たので俺は一步引いてスノウにコーヒーセットが見えるようにした。スノウはそれを見て、

「たかがこんな ってなんでこのよつなものが落ちているのでしょうか」

スノウの優しさに全俺が泣いてしまつた。

まあそんな事を言つていてもしょうがないので、一人を適当に休ませつつ俺は「コーヒーを淹れていた。銘柄はモッカ。俺は甘ったるくて嫌いだが、二人が美味しそうに飲んでいるのを見て満更でもないなと思った。

「カルトは飲まないんですか?」

淹れるだけ淹れて飲んでいない俺を見てスノウが心配そうに話しかけてくる。

「甘えのが嫌いなだけだ」

「まあモカだしね。カルト的にはキリマンのーが良かつたんでしょう」

「まあな」

まあせつかくなので一口啜る。確かに甘ったるいが、使った水が良いせいか何故か美味かつた。いい水がいいコーヒー作るって本當なんだな。そんな矢先に基地から通信が入った。

「ああ!?

『中継基地です。南ゲート前の平原にエネミーの反応があります。気を付けてください』

「カルト、あれ」

通信が入つてすぐに、セレナが敵の存在に気づいた。

「能力は

『わかりません、アンノウンです』

「どうか、まあアンノウンなのはいつもの事か。中継基地、カルト・ヴェスデンバーグ、スノウ・ルウベルカ、セレナ・チエリカールで迎撃する。 . . . 出ンぞ」

「わかった」

「わかりました」

「一人にそれを伝えて、飛翔する。指定の座標軸に来ると芋虫っぽいやつが俺たちがいた場所に群れてきているのが見てとれた。

「うわなにアレキモッ！！」

「……なにか吐き気がしますね」

「全くだな」

つい正直な感想を言ひまつた。まあいい。

「燃やし尽くしてやるぜ……ッ！」

俺は炎を纏わせたロンギヌスを抜いた。

I v i e u k a n u k . j -

「カルトらがアンノウンと接触したみたいだな

「ええ！？」

京谷さんが口にした言葉になのはが驚愕の声をあげる。

「ふむ……しかしそれでもす”い勢いでぶつ倒しておるの

紫苑さんが言つたとおり、カルトさん達は激しく暴れまわり、敵を打ち倒していく。だけど不安なことはある。

「後処理どうするんだ . . .

「 . . . それは気にしない約束じゃ」

ガイアの生態系の維持に一抹の不安を覚えながら、コーノラス基地に帰還した。

- view kurono -

どうやら無事に任務に当たっているようだ。優秀な人間が事に当たると非常に助かるな。

だが、これで余計に事が分からなくなる。それは何故か。

「行動が予測出来なさすぎる . . .

「そうだね . . .

僕のぼやきにフェイトが同意する。執務官の職に就いてるだけあって、そのへんはよく分かるらしい。

「作戦指揮官の辛いとこだね」

フェイトが同情の言葉を上げる。指揮官はあらゆる方面から物事を見なければならない。それに対応できる部隊がいるのか、どれくらい手配できるか、など事務処理がいつも付きまとつ。特に、各部隊には保持制限があるからおいそれと出撃手配ができないのも歯痒い。まあ . . . ナイツオブラウンズは局長特轄だから例外で破格の

戦闘能力を持つたやつが集まっているが。

「とにかく、手当たり次第に探すしかないのが現状だな」

「そうだね・・・。そろそろみんなが帰ってくる頃じゃないかな」「ん、そうだな。全員基地に着いて転送処理に入つたところか」

僕はモニターを見て呟く。どうやら遭遇した敵と派手にドンパチやつていたらしくカルトは不満そうに、一騎はやれやれといった感じな顔を浮かべていた。すると、無限書庫から通信が入つた。ユーノか。僕は直ぐ様繋ぐ。

「ユーノか」

『うん。検索した結果、”みおん”に該当するデータは30件ほど』

「内容は」

『内容ねえ・・・全然大したことないよ。なんせ40年も前に管理局に居た魔導師、下坂魅音じもさかみおんつて人の一部戦闘ビデオと彼女の書見とか程度』

「下坂魅音・・・？」

僕はその言葉に覚えはなかつた。40年前となれば”三提督”より前の時代だ、俺の知り合いでは誰一人知らないかもしれない。

『まあ誰も知らないよねえ、知つてるならあの人と同じ時代の人くらいだと思うよ』

「どういう意味だ」

『今の管理局の人間のほとんどの人間は知る由がない。要するに・・・彼女の事はタブーでもあるんだ』

「はあ？」

『何故かと言うと・・・書見で見たんだけど、下坂魅音が管理局に居た期間はたつたの一年弱。居なくなつたのは、新暦0029年の

12 / 4になつてゐる

「それは、”エクスワールド事件”じゃないか？」

『やうだね。それを境に彼女のデータはまったくないよ』

ユーノがそう言つて、僕は考え込んだ。余計に接点がつかなくなつてきた。みおん=下坂魅音としても、今回の事件に何ら結び付きがない。やはりボツなのか？

僕は頭をフル回転させようとしたところでは、それは霧散した。みんなが帰つてきたからだ。

- view kazuki -

「 「 「 ただいま戻りました」 」 」

全員が声を揃えて、帰還を伝える。そこにはクロノセシとフュイト、そしてモニターにはユーノがいた。

『あ、なのはお疲れさま』

「ユーノくんもお疲れさま～」

なのははマイペースにユーノと会話する。クロノさんがバツを悪そ
うにしている辺り、なにか取り込み中だったのかもしれない。

『それじゃあ引き続き検索や情報収集に専念するよ』

「わかった、任せたぞ」

ユーノが通信を切る。そして振り向いたクロノさんは労いの言葉をかけた。

「お疲れさま、みんな」

「ああ、ただいま」

「うーつす」

「クロノ提督もお疲れさま」

など、各自が返事を返す。そのまま京谷さんは続けた。

「そつちはどうだ」

「それはこれから話す。だから紫苑も残つていってくれ。他のみんなは母さんらが会食の準備をしていくからそつちに向かつていってくれ『やたあ！』

「（）飯一つ」

飯と聞いて、セレナと残つていた優希が喜色の声をあげる。同じく残つていたはやはふむと考え込む仕草をする。

「せやから、シグナムらが今朝から屈らへんかつたんやなあ……」「あー……じゃあうちの連中もか」「京谷くんとこも？」

「なにせよこの人数だしな……人手が要るんだろうな」「せやなあ……うちらが見てるメンバー殆ど大飯食らいやから……」

「」

二人してふう、とため息をついていた。なんなんだ？

「まあいい……みんな一騎と行つてこい」

「 「 「 はあーー 」 」

「 つて待てや 」

「 なんだよー 騎 」

「 なんで俺がお守りなんだ、カルトが居るだろ 」

「 僕アガキのお守りなんざ出来ないんでな 」

「 . . . だとよ 」

出来ないじゃなくて、ただダルいだけなんじゃないだろつか。

「 そんなこと言つてたらスノウとの子供が出来たらどうするのよ
「 う、おおいテメエ喧嘩売つてんのか『ロルアー』? 」

セレナが止めを刺した。スノウはと黙つた。

「 わ . . . 私がカルトの . . . / / / 」

乙女モードが発動していた。なのはらはあはは、と愛想笑いを浮かべるだけだ。

まあ、こういうのは取り分けラウンズ内では日常だつたりする。俺としては迷惑省みないので、今では満更でもない。そういうしていふうちに終息したので、食堂に向かつた。

やれやれ、ようやくみんな行きやがったか。しかし、あのカルトを宥めるとは優希も凄いな。

- view kyo ya -

「……で、どうして俺と紫苑を残したんだ？」

「それは一人が一番冷静な判断が出来ると思ったからな」

「儂はともかく、京谷がそんな器の広い男には見えぬのじゃが……」

「

じゃあ一代理隊長にするなよ。

「まあそりなんだが……」

そこに認めるな、悲しくなる。

「別に一騎も残してもよかつたんだが……実践経験、まだあいつは一年とないだろ」

「そうじゃな……まだ短期カリキュラムを終えて一年とおらんから、いくら落ち着いた童（わらし・子供の意）でもさすがに不安じやうひつて」

紫苑はふむ、と首肯した。そう……まだ一騎は実践経験が拙い。というか、あいつが魔法に触れてまだ2年しかないのだ。俺が一騎と出会ったのは、なのはと保護任務をしていたときだ。たしか、魔物に囮まっていたのを助けたのが最初だったな。その後、不意を取られたのをあいつが俺がしていた『約束された勝利の剣^{エクスカリバー}』を奪つて防いだ。

あれは嫉妬したなー、その後その敵を一撃で潰したんだしな。それから一騎は唯一の肉親である妹を連れて管理局入りを決めたのだ。そして卒業後の進路にナイツオブラウンズを選び、今に至る……と。

「おい京谷、なにを呆けておる。行くぞ」

「ああ……すまない」

紫苑に呼ばれ、俺は一人に付いていった。

そして向かったのは何やら薄暗い記録室。

「EJ」は？

「見ての通り、記録室だ。これを見てくれ」

そう言つて、クロノはパネルを操作してひとつずつ映像を投影した。そこには、フェイトに似たバリアジャケットを着たなのは似の少女が、恐ろしい反応速度で演習用CPUを叩き潰している映像が写し出された。

「……京谷が女だつたらこう感じだつたのじゃろうつな」

紫苑がポツリと呟く。

「彼女は、下坂魅音。管理局で一年間働いていた空戦EXの魔導師だ」

「EX？」

てつくり俺だけだと思っていたけどな。だけどリンクティさんだけは俺の魔力量見てそこまで驚いてなかつたしいてもおかしくないなとは思つていた。

「ああ、当時の管理局の魔力ランクじゃ彼女の魔力量を定義できなかつたんだ。それくらい、異常な量の魔力を持つていたらしい」

「まさに京谷じやな」

「だけど、そんぐらこすりこやつならもつと資料残つっていてもいい

んじゃないか？」

俺は核心を突いた質問をする。しかしクロノは横に首を振った。

「残念だが、欠片も残つていない。よくよく調べたらこの資料も近いうちに廃棄指定になつていたしな」

「それはよく意味が分からんの。それほどの魔導師なら、後世に末長く名を残すべきじやろ」

「それはそうなんだが……どんなデータベース探しても、ほとんど残つていないんだ。理由がわかれば苦労しないな」

クロノは嘆息するように言つた。俺もしばらく考え込む。なぜ、そのような魔導師がいて、ここまで記録が少ないのか。あたかも彼女がいたことを隠そうとしているようにしか見えない。

「まあ……現状では判断材料に乏しすぎるじやろ。今はこの件は保留じやな」

「ああ……では、一人も食堂へ向かってくれ」

「ああ、クロノは」

「僕はもう少し書見していくよ」

「りょーかい」

そして、俺と紫苑は食堂へ向かった。

ところ変わつて食堂。俺達が食堂に着くと、そこではシャーリーさんやリンクティさんに加え、アリストやシオン、フイオネらもいた。

「おかえりー」
「お疲れさま」
「あれ、京谷は？」
「まだ記録室じゃないかな」
「そつか・・・」
「つひなんやねんこの料理の多さ」

はやてが料理の多さに突っ込みをいれる。それにシオンと星川姉妹がフォローを入れた。

「私たちが買い出しに行つっていたのですよ」「だよー」「ですよね」

あー、だから用事が・・・とか言つていたのか。多分きらいといらもシオンの手伝いで来たのだろうな。

「あ、この辺は京谷くんが」

「京谷さんも？」

「せつかくみんな集まるなら、つて急遽手配したみたいよ」

妙なところで気が回るやつだな、とか思いながら食卓を見回す。本当に彩りみどりで美味しそうだ。

「さ、みんな。たんと召し上がる
「「「いっただつきまーす」」「」

リンティさんの声で、それぞれが食べたいもののところに行き、皿に取つて食べる。俺は無邪氣組のみんなの動向を見ながら一息ついた。そこになのはらエース三人娘が近寄つてくる。

「はい、一騎くん」

「ああ、ありがとう」

なのはから、ジュースが入つたグラスを受け取り4人で乾杯。ちょっとだけ嬉しかつた。

「なに食べよつか、リイン?」

「私はあれがいいですー」

「いきなり七面鳥!?」

「はやく食べないとアルフに食べられるです . . .

「あはは . . .」

「一騎くんはなに食べんねや?ついでくるで?」

「ん、そうだな . . .」

せつかくなので、立つたままで食べられるものをお願いしたら、さすが関西娘。焼き鳥と串カツオンリーだった。

「主はやで、こちらでしたか」

「あ、シグナム。それに他のみんなも」

「ん、新入りか?はやで」

「あ、こっちのイケメン」「イケメン言つな」は一騎くんや

スルーしやがつた . . . !

「ふむ、ではあちらの子供たちは?」

「あつちのむつこじのがきらりとわらわら。赤い髪止めのがきらりな。

で、その後ろにいるのが俺の妹で優希。そこでカルトをやんらといふのが希来

「ほう・・・ラウンズもいつの間にか若年戦力を入れていたのか。しかし、京谷もだがこの年齢で特務隊とは恐ろしい子供だな?」
「・・・まあ」

シグナムのペースに簡単に呑まれそうになる俺。さすが、管理局の姉御と呼ばれることがある。

「して・・・剣が得物か」
「あ、はい」
「よし、後で模擬戦だ」
「またシグナムやってらあ」
「む、なんだヴィータ。別に構わんだろう、猛者と戦いたいと思うのは戦士としての本能だぞ?」
「あはは・・・シグナムは戦うの好きだしね」

フェイトはシグナムの強引ぶりにあははと笑う。人の事言えないだろ、とヴィータが視線を送っていた。それに気づいたフェイトは反論する。

「な、なによヴィータ、その”お前も人のこと言えないだろ”のバトルマニアが”みたいな視線は”
「当たり前だろ、いつもうちのシグナムと模擬戦してるくせに」
「あう・・・」
「あはは、フェイトちゃんも好きだもんね」
「なのはまで〜・・・」

フェイトはしゅん、と頃垂れる。俺はその様子を微笑ましく眺めていると、制服の袖を引っ張る者がいた。優希である。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした」

「せつかくだし、アレ見せない?」

「ああ・・・アレか」

そう言つて、俺は情報端末を操作する。すると、俺の情報端末に3人の少女が写し出される。

「あれ、この子らは」

「『アーク、エリカ、ステラ 13歳誕生日』祝い」

「ああ、マテリアル三人娘だよ」

「たしか京谷らが保護したんだつけ」

そう・・・彼女らはなのはらが9歳の時に対峙した闇統べる王、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者だ。一年前たまたま鉢合わせになつたところを俺達が保護し、現在に至る。

「まあ闇の書プログラムゆうても、素性は女の子やしな。しかしうちらによう似とるなあ」

はやてはまじまじと、三人の写真を見比べる。シグナムはふう、と息を吐いて

「まあみんな正反対だがな、特にテスタロッサ」

「ええ・・・つ！」

「あー・・・それは分かるかも」

「なのはも!?」

「アホの子だもんね・・・」

「あはは・・・」

「あれ、一騎引つ張りだこだねこれ

そう言つて、優希は俺の端末を操作して俺がエリカらといる写真を表示した。

「まつたくだな . . . 」の色男め

「ちげえよつ／＼

「あはは、一騎くん顔赤いねんどう？」

「くづ . . . つてフエイトはなんで難しそうな顔してるんだ？」

「ふえ！？な、なんでもないよつ／＼／＼

首をブンブン振つて否定するフエイト。なんなんだ？

「フエイトちやん照れちゃつて可愛い」

「違いますよシャマルつ／＼／＼

とまあフエイトが弄られてる間に、俺は串カツと焼き鳥を平らげたので、おかわりをしに食台に向かつ。おかわりを適当に注いでいると、隣にはシオンさんがいた。

「どうしたんですか、シオンさん？」

「いえ . . .

シオンさんはふるふると首を振つた。それに併せて、黒リボンで縛つた長い尾の髪が揺れる。

シオンさんは年が五つも違つたためか、お姉さんのような風がある。もちろんシグナムのような姉御気質ではなく、優しく物静かなタイプだ。昔から身寄りのなかつた俺としては、少し憧れもある。

「歯さんとは割りと馴染めますね」

「まあ、あれくらいこじこじい来られる方が嬉しいしな」

「わづですか . . .」

そつ言つて、わずかに微笑むシオンさん。いつ見ても落ち着く笑顔だな、と思つ。

「あ、いただきますね？」

と言つて、シオンさんは俺の串カツを取つた。代わりに俺はシオンさんがついでいたおにぎりを貰つて食べた。
そんなこんなで時間が過ぎ、あらかた平らげたところではやでが再び声をかけてきた。

「せや、一騎君は三日後からの盆休みは暇してるん？」

「ん？ああ、暇だが

「せやつたら、つひりと旅行行かへん？」

「旅行？」

「せや、地球の日本、大分に旅行や」

なんでそこなんだよ。俺たちならヨーロッパでも十分行けるだろ?」

「誰が行くんだ？」

「せやな、今のところはセレナちゃん、なのまちゃん、フュイトちゃん、命ちゃん、優希ちゃんやね」

「女の子ばつかじやないか

「せやから、一騎くんと希来くんに来てほしいなと」

「京谷さんやカルトさんでもいいだろ」

「カルトさんはなんか怖いし、京谷くんに相談したら”一騎連れて

いきなよ、いやむしる命令で行かせる”ゆうて

「前者は納得できるが後者はふざけんなカスがつて感じだな」

「う、おおおー、じうこつ意味じや『ゴラアー！？』

「ひやあー？」

カルトさんの怒声に方をすぐませ、背中に隠れるはやで。何故かは解らないが、恐怖対象のようだ。

「まあまあカルトさん」

「つててめえも納得してんじゃねえ！…」

「事実ですし…」

「認めんなー！」

「まあまあ、そのへんこじとけよカルト」

そこに京谷さんが割って入る。カルトはバツが悪そつに舌打ちをして、そこを離れる。

「で、誰がふざけんなカスがつて？（二口）」

「お前以外に誰が居んねん、なにが悲しくて子供たちのお守りを『やらなかつたら管理局全体にお前のロリコン癖を流すからな』分かつた任せてくれ」

「うむ、天涯孤独より四日間みんなの面倒見る方が何倍も楽だしな。いくら俺でも物事の善し悪しは分かるつもりだ。」

「それにみんなの面倒見てる方が、お前は顔が活き活きしてるしな

「そりかあ？」

京谷さんの言葉に俺は面を食らつたような返事をした。まあ、自分が知らない部分を人が知っている時もあるが。

「やつですわね。一騎は面倒見がよいですから適任かと」「やうじやの。京谷でも構わんじやうつが行動の自由とこいつでは一緒に軍配があるじやうつて」

紫苑さんとスノウも京谷さんの決定に同意する。それを聞いて、京谷さんは俺の方に手を置き、満面の笑顔で

「ま、ハーレムを楽しんで」（ニヤリ）

カルトさんがたまに京谷殺すとかほゞく理由が何となくわかる気がした。俺は頭を搔きながら了承し、シグナムに田配せする。それを感じ取ったシグナムはうつむ、と頷いて近づいてくる。

「では京谷、一騎と模擬戦するから借りていへん」

「ああ、ボツコボコにしてやつてくれ」

「ふむ、やれたら尽力しみつ」

「あ、優希ちやん私とやらんんだよね！？」

「ふえ！？」

「任務前に言つてたでしょ？ や、行こ！」

「うえ、あ、ちよ、ふこもああああ！？」

模擬戦の約束を思い出したのはは優希を引きずつて、訓練室に向かつた。

「じゃあ、行きますか」

「うむ」

そして、なのはく優希、シグナムく俺の模擬戦が行われることとなつた。

Rewritten:魔王VS妹 僕VS烈火の騎士(前書き)

京谷「マジで閲覧とかあるのか?」

一騎「やあ?」

命「作者は趣味で書いてるしこんなじやない? もせつかくなら読
んでほしいよね」

京谷「まあな

一騎「では始まるが」

Rewrite3：魔王VS妹 僕VS烈火の騎士

「じゃあルールを説明するね」

審判役としてついてきたファイオネが今回の模擬戦のルールを説明する。今回は公式のダメージカウンターを携行しての模擬戦で武器は非殺傷設定、貫通その他付加効果は非発動、ダメージカウンターは3000で行われることとなつた。

ダメージカウンターは受けた衝撃の程度で数値が減つていき、0になればブザーがなる優れものである。また、こちらの防御や切り扱いも検知してダメージ調整が行われるので安心して受け止めることができる。

「じゃあ私と優希ちゃんからだね」

「うう・・・」

初めて対戦するタイプに楽しそうなのはに対し、いらんとぱつちりを食らつて鬱気味の優希。テンションの差は歴然である。

「ずいぶんテンションが低いな、お前の妹は」「なんか恐怖対象みたいだ」

なのはと優希の模擬戦が終わるまで、外で見守ることを決め込んだ俺とシグナムは一人してコーヒーを啜つていた。

「一騎があいつらならざり戰つ?」

「え?」

「一騎が優希、なのはの立場に立つて戦つならどんな対策を取るか、だ」

俺がなのはなら、優希をどう攻めるか。優希はデバイスこそ剣だが、どちらかといえば魔法でお膳立てして、斬りつけるタイプだ。ならば。

「そりだな、まずはフェイスのチャージタイムを取らせないようにする」「フュイス？」

「優希のデバイス単体の攻撃力を強化する魔法でオリジナルなんだ。あれを使われたら、いくら魔法を防いでも間合いを詰められて、十八番の”フリンジングラッシュ”かまされて撃墜おちおちとされるな」

フリンジングラッシュは優希が現時点で使える最強の技だ。四撃一体で、右薙ぎ、左薙ぎまでは同じでそこからは自転して足撃ちや踏み込み撃ち等二撃目はバリエーションに富む。四撃目は上からの切り下りしか回転して突撃、または2本の剣で振り抜く形となる。形はどうあれ、3と4の破壊力は本当に優希かというくらい凄い。試し撃ちの時受けたが、図らずも吹っ飛ばされた記憶がある。

「ふむ、では彼女は数で攻めるタイプなのだな」

「ああ、しかもタチの悪いことにひとつふたつ潰しても、すぐに修整してくる。なのはが勝つにはいつ優希の計略に気づくか、だな」「じゃあ優希の立場なら？」

「優希なら、でかいのを撃たせないことだな。なのははショーターがあるから、それをいかに搔い潜つて間合いを詰めるか。そしてバスターとブレイカーを撃たせなければ負けはないと思う」

「だが、曲がりなりにもなのはは戦技教導隊の人間だ。ただ対策を打つだけでは優希は勝てんだろうな」

「ああ、勝負の分かれ目はどちらの数撃ちが先に鈍くなるか、だな」

「お互い頭は良いから、単純な魔力比べには……お、始まるぞ」

シグナムがフィオネの、ゴーサインに気付き、俺は訓練場に目を向けてた。

I view nano nana

うわあ、初めて対戦するタイプだからじきじきだなあ。

優希ちゃんのデバイスはある2本の剣みたい。だけど、私と回じミッドチルタ式なんだよね。ということは魔法は使えるけど、じきじきといえば詰めるタイプなんだね。

「じゃあ、いきますよ?スタンバイレディー···」

フィオネちゃんの掛け声を聞いて、私はレイジングハートを構える。

「ゴーッ!」

ゴーサインの刹那、優希ちゃんは直ぐに詠唱を始めた。私はアクセルシューターを開いて全弾叩き込む。だけど、さすが優希ちゃん。詠唱破棄して切り落つた。

「やああああ···」

優希ちゃんはその反動を利用して斬りかかってくる。私はそれをレジングハートで受けた。

ギインツ

そのまま、鎧迫り合いの状態に入る。力任せに押し合つ時間が少し続く。

「「ツ……」」

これまた同時に振り払い、距離を取る。そこから私はディバインバスターの発射体勢に入った。見れば、優希ちゃんもなにか唱えている。

「ディバイン・バスター!!」

「クロス・・・スレイヴツ!!」

お互いの砲撃と斬撃は中間距離で交錯し相殺、大きな爆発が起つた。だけど、その上から大きく優希ちゃんが飛び上がってきた。

「ACSドライバー、ドライブ!!」

それを見た私は、私の近接攻撃モードであるACSドライバーを起動させて迎撃した。その後、優希ちゃんの一刀と私のバスターがぶつかる。

「・・・ツ」

優希ちゃんは苦虫を潰したような顔をする。どうやら、これは完璧に不意を取ったと思ったみたい。だけど甘いね。

「私は・・・簡単には落ちないよ?」

私はつい、そう微笑みかけた。

I view yuki

強い。

私が一番最初に思った感想。フィオネさんの始めの合図の瞬間に、あれだけの破壊力を持つた攻撃を素早く撃ち込まれたときは瞬殺されるかと思つたくらいだ。それをなんとか切り払つて防いだ後も、ほとんどの行動で私は遅れをとつていた。

そして今も、不意を取つたと思った一撃を難なく止められている。

「私は・・・簡単には落ちないよ?」

そう言われたとき、私は言つだけの力はあると思った。それに、ランクも年も上だしね。

「・・・でも、負けられない!――」

私は距離を大きく取る。そして私のサンライズヒルナティックの柄を合わせ、キーワードを唱えた。

「クロスジャベリンモード、ドライブ!――」

クロスジャベリンモードは、私の2本一対であるこのデバイスを1

つにして扱いやすく、かつ攻撃力の増加を図るモードだ。さすがになのはさんはビックリしたんだろう、少し驚愕の表情を浮かべた。

やるなら、今だ。

それを悟った私は一気に間合いを詰め、ルナティック側で突きを繰り出す。それをなのはさんは紙一重でかわし、むらにそのままアクセルシユーターを私田掛けて撃つてきた。さつきはかなりヤバかったけど、今は大丈夫。そのまま反転して、剣をバトンのように回して防いだ。

「！？」

「まだまだあ！」

その隙を見逃さない。刹那にクロスジャベリンモードを解き、横薙ぎに一閃。切っ先はなのはさんのバリアジャケットをわずかに裂いた。やられ、

「アクアジエット！…」

ルナティックを自分の足元に撃ちつけ、水撃を発生させた。しかも、これは私の技の中で一番弾速が速い技だ。

『protectionEX』

「つ！」

やつぱり簡単にはいかないか……。プロテクションEXで防がれてしまつた。

「優希ちゃん……凄いね。私、もっと全力で行けるよ……！」

「……お好きに！」

と思った矢先、なのはさんのただならぬ魔力の上昇が始まる。そしてなのはさんが手を翳すと、アクセルシユーターよりも威力の高そうな魔力弾が形成された。

(クラスターーーー！)

本能的に身の危険を感じた私は防御魔法“ウイングブレイカー”を展開し、空域を素早く離れた。数瞬遅れで、私が居た辺りで爆発が起ころ。

(……防ぎきれないの！？)

なのはさんはさうにフライヤーフィンを全開にしたままアクセルシユーターを撃つてくる。ここまでされると私は防ぎきれない。瞬く間に蜂の巣にされ、私はバランスを崩した。だが、もつとえげつないことをしてくる。あらうことか、そのまま“ディバインバスター”を向けてきた。

(嘘！？)

直ぐに体勢を建て直して、なのはさんにディバインバスターを撃たせまいと迫る。

「ディバイン……バスターーーー！」

遅かった。射線軸にいた訳じゃないが空戦Sの砲撃だ、かすつだけでも私は大きなダメージを受けた。カウンターを確認すると、既に500になつていてる。どうやら次の攻撃で雌雄を決しそうだ。

「最後は、お互いの全力全開で決めましょ」

なのはさんは、そう私に言つてきた。．．．挑むといひよ、いひら
も自身の必殺技を繰り出そう。私は剣を構え直した。

- view nanoha -

うん、反応速度もなかなかだし私の攻撃も読めてる。けど体が頭についていってない感じ．．．かな。時々反応が鈍い。そしてさつきの攻撃でカウンターも大分減つただろうと思う。お互いの全力全開で決めましょうって言つたけど、ぶっちゃけあの子の最高の攻撃が見たいだけなんだけね。

『stallight breaker』

そして全力全開の必殺砲撃、スターライトブレイカーのスタンバイに入る。念のために発射直前に効果が切れるようにプロテクションを張つておいた。

『10 . . . 9 . . . 8』

カウントダウンに入る。しかし、優希ちゃんは動く気配がない。何か策があるのかな。

『7 . . . 6 . . . 5』

が、まだ動かない。

『4 . . . 3 . . .』

その時だ。突然、優希ちゃんの姿形がぶれる。そして、気がつけば田の前に迫っていた。

(チャージ!-!)

優希ちゃんの右薙ぎの一撃が真っ正面からぶつかる。もちろん、プロテクションを張っているため届くことはない。が、優希ちゃんは構わず左薙ぎの一撃を叩き込んできた。

(さりに連撃 . . . !)

じゃああれはチャージタイムだったのかー!やられた . . . だけど . . . やらせない!-!

-view yukis-

(防がれた!-?だけごめげるもんか!-!)

私は構わず三撃目に入った。私の攻撃力が極端に大きくなるその一閃は、なのはさんのバリアを完全に打ち碎いた。

「な・・・・・！」

なのはさんが驚愕の表情を浮かべる。しかしそれも一瞬だった。目の端でそれを捉えたとき、ブレイカーの発射を予感させた。

「スター ライトオ・・・ブレイカーッ！・・・・

「ぶつ・・・とベエツ！・・・・」

私のファイニッショとブレイカーが真っ正面からぶつかった。暫しの均衡状態が続く。しかし、それも程なく終わつた。私の攻撃の効力がなくなつたのだ。スター ライトブレイカーをモロに受けた私に為す術はなく、結局試合はなのはさんの圧勝で幕を閉じた。

- view kazuki -

「あうー・・・お兄ちゃん負けたあ・・・・
「あはは・・・よしよし」

いくら実力が掛け離れていても悔しかつたのだろう、シウンとなつた優希の頭を俺は撫でる。

「で・・・どうだ？うちの妹は」

「うん、初めて戦うタイプだつたとは言え攻撃やトラップ、誘導が素直だから看破しやすかつた。けど、A A ランクらしかぬ突破力と瞬発力は光るものがあるね。私なら・・・そうだなあ、もう少し射

撃能力とスタミナ、そして瞬発力のさらなる強化に重点置いて……それに加えて最後の技に近く、かつ使い勝手がいい技の会得を任せることかな

さすが戦技教導官。分析や傾向だけでなく、これから成長指針まで打ち出した。ふむ、じゃあ優希の指導をなのはにさせてみようかな。優希はあまり人と仲良くしようとしないやつだからいい機会だ。

「なあ、優希の指導を任せていいか?」

「優希ちゃんの?」

「ああ、優希は今でこそアレだがあまり人と仲良くしようとしないやつだから……教導もかねて仲良くしてほしくてな

「……なあに言つてるのよー騎くん?私は元よりそのつもりなんだからね

「そつか……じゃあよろしくな

「うん よろしくね、優希ちゃん

「……はいっ

良かつた、なんとか打ち解けられそうだ。そう思つていたとき、肩に手を置くものがいた。シグナムである。

「では、殺し合い(試合)を始めようか

「ああ、なんか当て字が違う気がしたが突つ込まないでおこう

「が、頑張つてねつ(ガクガクブルブル

いやいや、なんで微妙に震えてるんですか。まあこの直後、俺はその当て字があながち間違いじゃないことを身を持って知るのだった。

「」

「どうしたんだ、はやて。そんな」機嫌に鼻唄唄つて

俺達はあの後食事の跡形付けがてら、アースラの食堂でのんびりしていった。

俺はといつと、はやて、アリスと食器洗いをしている。なにが悲しくて男が食器洗いなんだか。紫苑曰く”意外性を突いた起用”らしい。

「そりゃあみんなで旅行は楽しいやんか？」

いや絶対嘘だ。一騎と話すのを心待ちにした田だ。思えば興味を引いたものにはとことん詰め寄るからなあ、こいつは。でなきやある日に俺に興味を抱くことはなかつただろうじ、ある意味こいつが興味を持ったから今の俺がいる。だから一番感謝しなきやならないのはこいつかも知れない。

「楽しそうだね、はやて」

「せやまあ同年代のみんなで行ければ一番ええんやうひつけど、こればっかりはなあ . . .」

「大丈夫だよ、はやて。はやてが帰ってきたら今度は残ったメンバーが休みだからその時は盛大に自慢しながら行くって」

「なんや今日は意地悪やな？」

それはお前が一騎にホの字な感じに見えるからだろ。アリスはツンデレでヤキモチ焼きだからな。

「 . . . なんか失礼な」と考へた? 京谷

「 気のせいだる」

つてなんでこうも勘がいいやつばかりなんだ . . . つたく。とにかく手早く洗い物を片付けていく。

「 」

「 つて今度はなんだよ」

「いや . . . 京谷くんほんまなんでも出来るなあつて . . . 」

「 まつたく男のクセに腹立つよね。一騎も料理作るのバカみたいに上手いし。こないだだつてフランス料理フルコース作つたんだよ?」

「マジで! ? 僕それ初耳だぞ! ?」

「うん、京谷とカルト、セレナが任務で出てたときに一騎が”あいつがいない内に美味しいもん食わせてやる”って

ぐ . . . あいつ俺がいない間に . . . なんか最近俺に対する態度に疑問を感じないわけではない。

「まあまあ、喧嘩するだけ仲ええゆうじ . . . 」

「 こいつもなにかしらぶつかつてるような氣もするけどね。まあ一騎は作るだけ作つてまた厨房に籠つてたけど」

「 つてどんだけバカにする気なんだ俺を」

「 後で聞いたら”フランス料理大嫌いだからな”って言つてた

食べもしないのに料理法身に付けるなよ。

「 でも食わんのに作れるんやね。なんでやろ? 」

「 それは気になるな」

アリスが出しきみする前に俺も知りたいと告げておく。アリスは

ソンテレ属性があるだけあつて気まぐれだから、みんな知りたいと言つ雰囲気を作つておかないと絶対に聞き出せない。

「つて京谷がなんで気になるのよ」

「そりゃあ気になるだろ！？」

「いやいや・・・一番近くにいたアンタが気づかないってどうな

よ

ますます意味が分からぬ。俺が一番知つている？

「ほら、一騎の研修期間。みんなになかなか馴染めなくて書庫読み荒らしてたでしょ」

「ああー・・・あつたなあそんな時期」

一騎と優希がラウンズに入つてからの研修期間、ずっと二人はみんなに馴染めなかつた。研修期間の終わりかけによく馴染め出したのだが、それは割愛する。ともあれ、待機時間の間は2人して書庫に籠つていたのだ。たまに俺が様子見に行つて話しかけたりもしたが全部無視された。腹立たしくなつて、セレナ、紫苑と一緒に一騎が読んでる後ろに机を積んで派手にひっくり返すイタズラを敢行したが、やはり無視だつた。今思えばその集中力が一騎の強さを物語つているなど今更ながら実感している。事実、俺が研修期間中に仕込んだ”斬魔術”を完璧にマスターし、更に自分のオリジナル剣術まで編み出した。特にあいつの”龍の咆哮”に似た技・・・あれの破壊力は最早・・・

「つてボヤッとしないでよ京谷！」

アリスに蹴りを入れられ我に返る。いかんいかん、つい考え込んじました。まあなんだかんだで皿洗いは終わつてゐる。

つて終わつたなら蹴るなよ。

俺は手を拭きながらHプロンを外す。その後をはやてがにせにせしながら付いてきた。

「どうしたんだよ、はやく」

「わいせき騎馬くみのいろと都えてたやん」

一 考えてねえ

私は分かるで？——騎ぐんの事語してみると、か嬉しそうやも

「御書院」

俺は手早く片付けると自分の執務室に向かうこととした。どちらか仕事が溜まっていることには変わりない。つと・・・

「心うこやはやて、一騎に荷造りの事言つたのか?」

「うん、言ってないよ。今から言ひに行くと」

「そういう模擬戦してるんだよな。ちょっと様子見るか？」

一
せ
せ
ね

近くの休憩室に入り、端末を操作して一騎らがいる訓練室のモニタ
ーを開いた。そこに映し出されたのは、とても子供には見せられな
いものだつた。

「 . . . ! ! ! 」

「 くつ . . . ! . 」

これで何度も鎧迫り合いだらうか。というかどれだけの時間が経つたのかすら分からない。分かるのはお互いが非常に消耗していることだ。

「はあ . . . はあ . . . なかなかやるな . . . 一騎 . . .
「シグナムこそ . . . 「 .

そして再び烈火を纏わせたレヴァンティンで斬りかかる。すでに俺は握っていた刀を黒龍に切り替えていた。それを受け、そのまま切り抜ける。

「甘い！..」

すかさず返し刃。すぐさま体を反転させて刀を縦にして受けた。

「さすがだな、一騎。だがそこまで無茶な行動は無駄に体力を使うだけだぞ」

「分かつてる . . . さーーー！」

刹那の隙を突いて一気に離れる。そして刀に魔力を込めた。

「閃魔 . . . 飛光撃ッ！！」

稻妻に似た、魔力の光刃がシグナムに直撃し爆発した。しかしその煙の中からシグナムが現れ、剣を向けた。

「吼える蛇 丸！！」

「絶対ネタだよな！？」

ここにはショーランゲモード・・・レヴァンティンが分離し、そのまま降り下ろしてきた。

「くつ」

さすがに初めて戦うタイプだ、軌道を読めなければ意味がない。

「そおら餌だ！！」

「だからネタだよな！？」

そのまま右薙きに振り払ってくる。攻撃する度に某パイナップル頭の赤髪死神の真似してるのは気のせいじゃないだろう。

「逃げていろだけでは勝てんぞ！！」

そこで一旦戻し、再びレヴァンティンを伸ばしてくる。俺は右に体を反らしてかわし、そのまま突貫する。

「ひづ」

シグナムはすぐさまレヴァンティンを戻し、袈裟懸けの一撃を受け流し、さらにその力を利用して反撃に転じた。さすがに俺は避けられず、右脚を斬られる。もちろん非殺傷設定なので体に傷はつかない。

俺はそのまま後ろに下がり、間合いをとる。シグナムも少し間合いを取った。

「ふむ、そろそろ魔力の限界だな . . .」

シグナムが呟く。たしかにこちらもかなり少ないし、おそらく次がラストショットになるだろう。

「では、己が叩き込める最高の一撃を斬り結ばせよ! ではないか」「 . . . ああ」

俺はそう言って刀を構え、魔力を斬る力に変換し、そして収束させた。シグナムもカートリッジをひとつ炸裂させ、レヴァンティンに焰を纏わせる。

「破魔 . . .」

「紫電 . . .」

「竜王刃ツ！…」「一閃ツ！…」

2つの巨大な魔力が凝縮されたお互いの一閃が真っ正面から衝突する。

「ぐつ . . . !！」

「はあああああ！…」

俺は渾身の力でシグナムを払い飛ばそうとする。だが、シグナムは口の端をつり上げた。

「まだ青いな」

そう言うと竜王刃を同じ力で流し、そのまま俺は返し刃で弾き飛ばされてしまった。

「ぐあつ！？」

訓練室の壁に思いきり叩きつけられる。すぐにリカバリーしようと竜王刃の一射目に入ろうとしたが、魔力が収束が出来なくなつていった。

「魔力エンプレティだな。」
「すぎだ」

強引な切り返しや瞬間的な高速機動の使い

シグナムはそう言いながら、レヴァンティンの切つ先を俺に向けた。もちろん為す術がないので降参である。

「はは・・・まだ俺も甘いな」

「いやいや、最後の一矢は良かつたぞ？まあ甘いところだらけだが」

愛想笑いを浮かべながら、訓練室を出て優希となのはの元に向かう。

「戻つたぞー、つてなんでふたりしてがたがた震えてるのさ」

「
な
ん

シグナムが成程といったように声をあげる。どうやらあの戦闘が恐怖対象に映つたらしい。

「いやいや、優希たちもそれなりな戦闘をしていたぞ？」
「だからって普通に吹っ飛ぶ戦闘ってどうなのよ！？」

優希が涙田になつて反論する。

「あつはつはつ、可愛いな優希は（なでなで
「シグナムさん撫でて誤魔化さないでください」

なのははあはは・・・と愛想笑いを浮かべながら、シグナムと優希のやりとづを見ていた。

「あ、ちょうど終わったみたいなんやね
「あ、はやはやてちやん。どうかしたの？」

「一騎くんに用が・・・つて怪我凄いな！？シグナムも！？」
「すみません、つい模擬戦に熱が入つて

「そつかあ。なのはちやんや優希ちやん、一騎くんもお疲れさまやはやてはあつはつはつと笑いながら俺たちの健闘を称える。やはり社交的なんだなと俺は思った。

「それで主はやて。一騎に用事とは？」

「ああ、せやつたな」

そういうつてポケットのなかをじんじんと漁るはやて。そしてひときれの紙を俺に手渡してきた。見ると、洗面器具や下着三日分などと書かれている。

「これは？」

「今回の盆休み旅行に必要なブツやな
「なるほど、これを俺と優希の用意すればいいのか？
「自分のだけええよ。すすがに女の子の荷造りするの野の子がするのはどうやろか」

「確かになあ・・・」

「ねえ、はやてさん」「

「ん? なんや優希ちゃん」

優希がはやてに質問を投げ掛ける。なんだろ??

「持参物にW.i.pがあるけど」

「それは旅館でスマブラのガチバトルするためや

いやいやいや、なに著作権に関わるもの引っ張り出しちゃう。

「ちなみに負けたやつ罰ゲームな

「やつぱりやるのかよ」

「はやてちやんらしいねえ . . .

しかし罰ゲームか . . 。ちょっと期待するな、うん。

「まあどんな罰ゲームにするかはまだ秘密な

「だね、お楽しみは最後にだよ」

「そうか . . .

「さ、体も汚れていますし早めに帰つましう

「せやな

「だね」

シグナムの一言でみんながいる食堂に歩を向けた。その後は幾分か雑談した後、各々の隊舎へ転送帰還しオフシフトとなつた。

日が進み、ここは俺と希来の部屋。一人して明日から行く九州旅行

に持つて行く荷物の確認をしていた。

「いやあ、明日から旅行だね。楽しみだなあ . . .

「そりやあなたにも考えなくて良いならな」

「あはは . . . 一騎は皆のまとめ役やらなきやならないもんね」

「 . . . つたく京谷さんのもつ . . .

ぶつくさ言いながらも、荷物を纏めていく。

「セーいや、魔力エンブティ大丈夫なの？」

寝る前なので、大人モードになつてているアルルが問い合わせる。大小変化自在ならそのまま居てくれたらいいのにとか思わないでもない。

「ああ . . . 明日要らん」としなきや大丈夫だわ」

「だよねえ。ま、んなこと言つてたら面倒事に巻き込まれるんだけど」

「止めてくれ、ゾッとしない」

「あはは . . .

そう、こいつが嫌な予見をする度にバツチリ当してきてる。正直なところなにか大きいイベントがある前の日はとつと眠らせた方が良いのだけれど。

「でも、楽しみだよね」

「 . . . ああ、そりやあ年が近いやつら . . . それも女の子と一緒に旅行だ。楽しみじゃないはずない」

そりやあ曲がりなりに男の子なんだから、そつちの事も少しくらい

は期待してしまつ。まあ、正直なところ期待するだけ無駄だと思つてゐるため、今回の旅行はうんと羽を伸ばすために使おう。

「……よし、これで準備完了だな」

「お疲れさま」

「じゃあ寝る？」「一人とも」

「うん」

「ああ、万が一があるから早めに寝よう

荷造りも終えたため、手早く寝る支度を整えて床についた。アルルは俺の隣で大人モードで寝ている。

だからやめなさいと。

ま・・・明日からの四日間が有意義になればいいなと思いながら、意識を闇に沈めた。

Rewrite3・魔王VS妹 僕VS烈火の騎士（後書き）

一騎「なかなかいい感じだな」

作者「ここから急転直下話が進みだすんだけど」

シオン「作者さん・・・ねたばれダメ」

作者「おっと、すまん。というか・・・頭悪いな私」

京谷「いまさらか」

作者「あとで覚えてるよ・・・さて、読んでくれた方には無上の感謝を」

一騎「ここまで読んでくれた人は次も読んでくだされば幸いだ」

作者オリジナルキャラ設定

京谷「いきなりかよ。まあいいけど」

作者「や、紹介はしないことだよね?」

一騎「だいたいインスピレーションでわかるだろ。いかにも話すこともないと思うがな?」

命「えー・・・」

作者「まあ。今のところ京谷の能力の異常さが際立ってますけど、そのところ主人公の一騎さんはどうよ?」

一騎「これはキャラへのインタビューなのか?」

作者「ただの文字稼ぎ」

一騎「死ね」

命「わたしあれは気にしないかな。だって敵に勝てばいい話だし」

シオン「そんな簡単で・・・ええんかい? (びじつ)」

作者「まあいいや。じゃあ一騎の設定からチエケラー。」

名前・桜井 一騎

身長・164

体重・58

魔力ランク・古代ベルカ式空戦S

デバイス・アルテマウェポン＝？（ドゥーハ）+？？？
武器は黒身の刀『黒龍』&白身の刀『白龍』

性格：冷静なように見えてけつこう熱血型。カッとなつてもそれなりには理性的。

見た目・ガンダムWのヒィロの田をそいそい穏和にした感じ。趣味は自爆なんてことはない。

一騎「？？？ってなんだよ。つかいきなりS+ってのもたいがいチートじゃないか」

作者「シグナムに負けたくせに。といつかテメーが一番ビジュアル決まらなかつたんだよ。ざけんなよ畜生が」

京谷「つか一人で2個のデバイス持てたか？・・・まあはやてがそうだが」

作者「ネタバレになるので言いません！！次ツ」

名前：月城 命

身長：155

体重：45

魔力ランク：近代ベルカ式陸戦AA+

デバイス：槍型アームドデバイス オベリスク

性格：明るくはつらつ。図太い性格。

見た目：はやての髪型に長いテールを付け加えたような感じ。シン
グルテール。横髪ははやてより長い。

京谷「けつ」うまんまだな

作者「ちなみに原案時にはおとなしい女の子の設定だつたんだけど
ね・・。いつたい何があったのか。次！」

名前：星川きらら

身長：130

体重：25

魔力ランク：古代ベルカ式陸戦A+

デバイス：グローブ型アームードデバイス テュナミスケイル？

性格：男勝りでモノをはつきりと語る。実は纖細？

見た目：魔法少女きらりと光るのきららをもつ少し幼くした感じ。

名前：星川さらり

身長：130

体重：26

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦A+

デバイス：U型インテリジェントデバイス テーレウェイン&ゴン？

性格：物静かでおとなしい女の子。しかし切れると怖い。

見た目：魔法少女きらりと光るのきららを少し幼くした感じ。

作者「現時点では数少ない幼女姉妹。これからいろいろ楽しみですな」

京谷「ロリコンか！！」

一騎「変態だな・・・」

シオン「そついえばなれ初めとかどうなんでしょう?」

作者「本編が方着いたらやりますよ。次」

名前・シオン・E・グラキエース

身長・168

体重・53

魔力ランク・ミッドチルタ式空戦S+

デバイス・杖型インテリジェントデバイス アイシクルエッジ

性格・物静かな大人の女性。メンバー中一番精神年齢が高い。

見た目・ボカロの弱音ハク。

シオン「・・・なぜかしら。ものすげバカにされた気分・・・」

京谷「うおっ！？なんかこのあたり寒くなつてないか！？」

一騎「オーバードライブ暴走が始まつてんぞ！？」

作者「落ち着けシオン！―とりあえず連続で次！！」

名前・羽田 希来

身長・159

体重・53

魔力ランク・近代ベルカ式空戦AA+

デバイス・剣型アームドデバイス アロンダイド

性格・心優しい性格。戦いや日常でもそれは変わらず。でも芯はしつかりしている。

見た目・ガンダムSEEDのキラ。

名前・桜井 優希

身長：147

体重：40

魔力ランク：ベルカ寄りハイブリッド式空戦AAA

デバイス：双剣型アームドデバイス ルナティック&サンライズ

性格：すこしあまえたがりな性格。明るいほうだが弱気なところも。

見た目：そらのおとしもののイカロスの髪の色を明るい茶髪にして
瞳はたれ目ではなくふつう。

京谷「こんなものか」

一騎「京谷以下お借りしたキャラについては割愛させていただきま
す。」「了承を」

優希「でもこれってそこそこばぶいでいるよね？」

作者「よく気づいたね。だけど、ネタばれになるから私は絶対言わ
ないから！」

一騎「まあ当たり前だな」

シオン「・・・共演依頼とか来たら面白そう・・・」

作者「気がはやいな！？」

希来「あはは・・・じゃあ今日はこの辺で。更新、楽しみにしてく
ださいね」

Rewrite 4：最強の魔導師（前書き）

命「おお？なんか意味深なタイトルだね？」

作者「ここからが本番だよ」

一騎「今までのはつかみ・・・と」

作者「やめ」と ではお楽しみあれ！」

Rewrite 4：最強の魔導師

そして朝。ミッドチルタの国際空港に俺と優希、希来、セレナ、そして命は来ていた。

「おっせえな」

「一騎が早すぎるんだよ」

命が目を擦りながら答える。確かに2時間前に来たから早いのだ。
なんでこんなに早く来たかといつと。

「「んーまーいーつーー..」「

国際空港限定パンを食いたくて仕方がない優希とセレナのためにわざわざ早く来たのだ。まあ美味しいのに食べててくれるので、ちょっと嬉しい部分がある。

「一騎ってなんだかんだで可憐い女の子に甘いよね

「そうかあ？」

「うん、ぶつきらぼうだけど思いやり持つて行動できてると思つむ
「おかしいなあ！？私可愛いのに優しされた覚えないなあ！？」

「なんでお前に優しせないかんのだ」

「ひどー！？」

「あはは . . .」

命の雄叫びを軽くスルーして携帯で時間を確認する。ふむ、後20分くらいか？ そう思った頃、向こうから見覚えのあるシルエットが近づいてきた。Hース三人娘とリインフォース？ である。

「あ、みんなおるやん。おつかま～」

「おはよっです」

「おはよ～」

「お・・・おはよ～、一騎にみんな・・・」

朝から元気がいいものである。一騎からも各自に挨拶を返した。

「いやあはやいなあ」

「まあ、あそここの天然娘がここの”スペシャルセレクト改”を食べたい言うから仕方なくな」

「なんか凄そうな名前つけとつたら売れるだろ的な意図が丸見えやね」

「実際美味いみたいだぞ」

「一騎くんり食うとらへんやん」

「俺らは白飯派だからな」

「えー」

とまあ、そんな他愛のない会話をしながら待機時間を廻¹す。さて、そろそろ時間だな。

「んじや、機内行^{なか}くべ」

「「「はあーい」「」」

俺を先頭に入場ゲートへ向かう。ミッドルタ国際空港は無駄に広いため、いちいち気をかけながら歩かねばすぐに迷子になりかねない。なので、俺は皆の歩調に出来るだけ合わせて歩くことを心がけた。

「ほえー・・・」

「ん?どうかしたの、優希ちゃん

辺りを見回しながら歩く優希にセレナが話しかける。

「いえ……」んな大きな空港、私初めて来たんです。ですから色々初体験で

「初体験……H口に響きやなあ……」

「はわつ……？」

「ちょっとH口に向持つてかなこじでよはやて！」

「そ、そだよつ！そ……そつこのは……は……ねつ、夜に……」

「は？なにゆうてんねん？」

「ええ！？そつちじやなかつたの！？」

「そつちもなに勘違い……はつはーん……フエイトちゃんH口
いなあ～、一騎くんとくんずほぐれつな」と考えてんねや～。

「だから違つよお……／＼」

「あつはつはつ、分かつてるでえ耳年増ひやん」

「（ポヒュー／＼）」

「ん、じゅ搭乗券出せよ……つてフエイトお前無茶苦茶顔が赤い
ぞ！？」

フエイトの顔が耳まで朱色に染まっていた。俺が先導している間何があつたというんだ！？

「あ……赤くないもん……／＼」

「そつか、なら俺が手鏡見せてやるから」

俺がどこからともなく出した手鏡を覗き込むフエイト。

「林檎……みたい……／＼」

「ん、分かったならとつあえずゲート潜るべ、はやても
う、うん」

「つょーかーいー」

そうして異物チェックのゲートを潜って改札。次元航行機の機内に入ると既にセレナが席に座っていた。

「おっそいよ三人とも . . .」

「悪いな、はやてがフェイトを弄りた」「一騎くんとフェイトがいちやいちゃしてたからなあ（ニヤニヤ）つて被せんな！－！」

「嘘 . . . 私がいながら浮気だなんて . . .」

「俺と命はいつデキたんだ！？」

「うわあー一騎くんフェイトちやんじや飽き足りず命ひゃんも美味しくいただいてんねんなあ（ニヤニヤ）」「

「え . . . 私、一騎に . . . / / /」

「いただいてねえよ！あとフェイトも悪乗りするな！－！」

「あつはつはつ、なんや一騎くんツツ ノミ凄いエエなあ

「だよね、はやてちゃん」

「ああ！？一騎飛び降りようとしたらダメだよ！－？」

離してくれ希来！－俺はこいつらの面倒を四日間見れる気がしないんだ！－

「お兄ちゃんはクールな時とそうでないときの差が凄いんだよ」

「あー、だよねえ。特に京谷とアリス相手の時はキャラ壊れやすいかも」

席では優希とセレナが冷静に分析を行っていた。それはそれで妙に腹立つ。

「一騎に . . . / / /」

まだ引っ張るかフロイト。

正直な話、こんな連中だけでよかつたと思つ。理由？そりや・・・めんどくさいやつが円卓の騎士にはいっぱいいるからな。

まあてんやわんやあつたが空港を出ると、みんなして爆睡しだした。俺を除いてみんな寝てしまつたので全くすることがない。しょうがないので今回向かう場所について説明しておこう。

これから5時間の旅を経て向かうのは、なのはの生地である管理外世界地球の日本。その中の九州地方と呼ばれる島国の大分という場所に最初向かう。

初日の日程は空港に降りてからまずはバスで旅館へ。それから地獄巡りをして旅館に戻つて終了、といった感じだ。まあありきたりな観光名所巡りだが、こういう旅行も悪くはない。まあ今までの旅が京谷さんの気まぐれでとんでもない世界に行つたり、あてのない放浪だつたりしたのもあるのだが。

『これより、本機は安定航行に入ります。シートベルトは・・・』

・・・と、どうやら安定航行に入ったようだ。みんな寝てしまつたので、しょうがなくベルトを外して売店へ向かう。飛行機と違つて本当に揺れがないため、わざわざ売り子が歩いてくることがないのだ。

「こいつしゃいませ、『』注文は？」

「鮭おにぎり3つと伊右衛門で」

「かしこまりました、小計600円になります」

代金を支払い、焼津鮭のおにぎり3つと某飲料会社の伊右衛門を持
つて自席に戻る。うん、やはりおにぎりは鮭に限るな。

席に座り、包みを外して一口頬張る。パリッとした焼きのりとふつくら焼きの白飯。そして、脂の乗った鮭切り身のコラボレーションは絶妙な味を醸し出す。程なく食べ終えたところで、俺は誰かの視線に気づく。ちょうど寝起きのセレナである。

二〇一

どちらかというと、俺ではなくて俺の手中にある鮭おにぎりを注視しているようだ。思えばこいつは大飯食らいだつたな。

「お腹空いたなあ」

と、猫撫で声でおねだりするセレナ。こいつは間違いなく俺のおにぎりが欲しいがための行動だ。

「自分で買つてこいよ」

「アーティストの歴史」

「だから買つてこいつで。たかが150円くらいうちよのちよ
いだろ」「

「ぐれなきヤフニイトを美咲しぐいたたいたて嘆流すから」

くつそなんでたかがおにぎりくらいで人生左右されなきやならないんだ！？新入りだからラウンズ内からの弄られ率がハンパない気がする。

ג' ינואר

俺からおにぎりを奪つた本人は美味しそうにそれを食していた。満面の笑顔で幸せそうに食べるもんだから、怒る氣にもなれなくなる。

「しかし、朝スペシャルセレクト改を食つときながらまだ食つが」「一騎も私が朝バリバリ食べるのは知つてゐるでしょ？私、召喚士とは言え、前衛向きの能力だから」

俺はああー、という風に頷いた。そう、忘れがちだがこいつは氷の三龍帝とかいう龍召喚を使いこなすくせに、短槍を扱う変則の魔導師だ。本来なら後衛型のはずなんだが、後衛型の重要なスキルの射撃は威力はあるが誘導が下手で、攻撃補助・防御に至つてはそこら辺の後衛型魔導師と大差ない。しかし近接戦闘ともなればきららを圧倒し、命と張り合える実力がある。このアンバランスな能力を持つたのがこのセレナ・チエリカールと言つ魔導師なのだ。

「やつこやせ」

セレナが思い出したように口を開く。

「一騎のデバイスってなんなの？私、全然見た記憶がないんだけど」「俺の？アルルだよ」「ユニゾンデバイスじゃなくて、普通の。アームドかインテリジェントとか」「ああー……ねえよ」「え？」
「俺の黒龍と白龍は、一応魔力媒体の適正があるからな」

俺の刀は特定の工程を経た、非常に特殊な造りの刀である。本来なら全身黒、全身白なんていう都合のいい刀は質量兵器としてのそれを作れるはずはないので、必然的に古代遺産扱いされる。しかし、

「つして自分の武器として保有できてるのは京谷さんのお陰なので、そのあたりは感謝している。

「ふうん……純白と純黒の刀があ。黒龍だけ持つてたら一騎は黒ずくめの男と大差ないわよね」

「……言ひな」

「ふふ……でもありがとね、おにぎり。美味しかったよ」

そいつて、にこりと笑うセレナ。天真爛漫組ならではの無邪気な笑顔である。俺はそれをぼんやり眺めながら、ボトルのキャップを開ける。

「あいや、お茶も買ってたんだ? 私持つてきてたのに」

そいつてセレナはバッグから生茶を出す。確かに俺が好きな類いの茶だ。

「なら言えよ……まあ、寝てたから言えないだろ? けど」

伊右衛門を口に含みながら言つ。すると、セレナはまたくすくす笑い出した。

「なんかおかしいか?」

「別に、後先考えないのは一騎らしいなって」

「はあ?」

そつ言つてまたくすくす笑い出す。まったく意味がわからないな。

「旅行、全力で楽しもつね」

「……ああ」

それから一人していくすくす笑い出してしまった。
だが、これからの旅行で惨劇が起る」とはまだ俺達は欠片ほども理解していなかつた。

「んーつ、はあつ」

空港エントランスから出た瞬間、命はんーつと背伸びをした。
ちなみに今の時間は、俺がセレナからおにぎりをぶんどられて三時間ほどが経過したあたりである。五時間といつ長旅のためか、みんなして屈伸や伸びを延々繰り返していた。

「やつぱり長旅は体に堪えるねえ . . .

肩のストレッチをしながら、まじつたといつ風に希来が言つ。

「まつたくだ . . . なつ」

俺も前屈をしながら答える。正直、エントランス前でひたすらストレッチしてる集団は傍目から見たらただの変質者だろひ。

一足早く終えたはやてらがちよつと困った顔をしながら呟く。

「そひそろ移動せえへん？」

「ん、そうだな . . .」

「あつちにバス停あるよ」

優希が指示する先にはバスがあった。 . . . つて！！

「急げお前らーー！あれ別府行きのやつだーー！」

「ふ、ふええーー？」

「みんな行くよーー！」

「え、あ、ちよーー？」

俺の掛け声で、全員で荷物を抱えて全力で走り出す。さ、キツイ···

···！

「まもなく発車しまーす」

つて出る寸前かよーー？万事休すかーー？

「任せて」

俺の横で命が呟く。それを聞いて俺が命の声がした方を見たときには、命の姿はすでにバス停にあった。

『ちょっとだけ待つてもらえますかーー？』

『ちょーー？あなたいつの間に』

『きこしちゃメッ』

『いやでも唐突に』『メッーー！』は、はいーー···』

命のお陰でバスは待ってくれるようだ。俺は無言で命に近づく。

「えへへー、待ってくれるつて痛つたああああああああーーー？」
「てめえ魔法とかが認知されてない世界で普通に”響転”使ってん
じやねえよーー！」

「まあまあ、一騎くんもそんなに怒らなくていいじゃん。結果的に
は命ひちやんのおかげで間に合ったんだから

「

「なのは・・・お前事の重大さがわかつてねえな」

天才と呼ばれる連中にまともな奴はいないのかと思つと、ゾッとする。

「以後慎めよ・・・つたぐ。ただでさえお前は色々じつちやな奴なんだから」

「そりゃおま、召喚士の母と吸血鬼の父を持つたらこんなアンボンが生まれるでしょうに」

命はなにを今更、といつた風に反論する。

命は吸血鬼の父、召喚士の母を親に持つ稀なハーフの少女だ。しかし、命父は吸血鬼の亞種であるため、あまり糧として血液を必要としない。それでも一応必要なため、たまに俺に血をせがんでくるのでたまに吸わせているが。

ともあれ命は人より身体能力が高いため、その利を生かし竜騎士として技を磨き続けている。召喚士としての適正もあるらしいが、本人曰く「対話と同調がだるいから多分使わない」とのこと。

「つたくなんでもありだな、お前は」

「チートが前提の主人公キャラには言われたくないよ（笑）

バスに乗り込みながら、他愛のない口論を命とする。こんなのもよく飽きもせず毎日続けられるなと我ながら思つ。そしてセレナが突然爆弾を投下する。

「といつかさ、命つて器用貧乏つて言葉が似合つよね

「うひ・・・」

命がそれを言つた、といった恨めしそうな顔でセレナをみやる。希

来がそこに口を挟む。

「 そうだよねえ、料理や裁縫、なんでも出来るけど特別これは . . . つてのはないよね」

「 希来までーー？」

「 そうだよ、料理ならシオン。裁縫ならアリス。掃除洗濯はアリスに軍配が上がるよ」

「 さしづめジムカスマチツトニヤナ

「 」

はやての一言が完全にとじめを刺した。命はずーん、とうつむいてしまう。それを必死になのはがフォローする。

「 で、でもさ！なんでも出来るってのはーーことだよーー？ほら、巨人のキムタクみたいなさーー！」

「 野球選手と比べられても . . . 」

だが誤爆。なのはの慰めは余計に命をしゅんとさせた。俺としてはそんな野球選手を知っていたなのはに尊敬の拍手を送りたい。

「 それでさーーーれはどう向かってるの？」

気を取り直した命が聞いてくる。俺は他の一般人に見えないよう情報端末を開いた。慣れた手つきでそれを操作し、これからの中日程表のフォルダを開く。

「 まずは旅館の悠水亭に行つて荷物下ろし。んで、近場のレンタルサイクルで自転車を借りる。んなら地獄巡りして今日のアレは終わ

りだな。まあ……時間的な余裕はないから二回はならぬ！」
「あ、あの青い湯が沸いてるところは行くんだよね！？」

優希が食いついてくる。じつをさう普段見慣れないものには興味津々
らしく。

「ああ、んで間欠泉のやつと湯気が凄いことないね
「えへへ、楽しみだなあ」

目を輝かせる優希。キラキラーティングが背景に見えるのは気のせいでも
ありたい。

「で？レンタルサイクルまでは？
「一時間ちょっとか
「じやあさ、私と一騎とはやつとフロイトヒ希来で古今東西しない
？」

「謎ゲームは？」

ちょっとと乗つり氣で聞いてくる希来。

セレナが暇潰しにそれを提案する。古今東西はお題に沿った名詞を
言つていぐゲームだ。雑学や記憶力を試す遊びだな。

「負けたら猫口調ね。男はメイドで。それじゃあ行くよ
までまでまでつて始まりやがったー！」

「セレナから始まるわ」セレナのホール
「「「イヒーッ」」（俺以外の会話の中）

「古今東西」

「「「イヒーッ！」」」

「【は】から始まる言葉」

”は”からか。わい・・・

パンパン（手拍子） セレナの番

「ハンドガン」

パンパン（手拍子） 希来の番

「えと・・・ハリウッドー」

パンパン（手拍子） 倭の番

「hands on it」

「一騎の負けー」

「なんでだよー!？」

一応”は”から始まつてるじゃないかーー某天使ちゃんの武器だぞ
!?

「著作権に関わるのはチョメで」

「この小説の根底を覆さなきやいけない発言だぞオイ」

セレナから世界の前提を壊しかねない発言が飛び出す。少し自重すべきところである。

「まあ約束だからメイドね」

「くっ、わか・・・分かりました、お嬢様」

く・・・、屈辱だ・・・！」

「じゃあネクスト。負けたやつは語尾にやんよね。それじゃあ行くよ」

また著作権に引っ掛かりそうな罰ゲームである。それはネタじゃないかとか思つてしまふ。

「セレナから始まる」

「――イエー・ツ！」「」

「古今東西つ！」

「――イエー・ツ！」「」

「AKB48の歌つ」

「・・・は？」

パンパン セレナの番

「RIVER！」

パンパン はやての番

「ベーローテーション」

パンパン フロイトの番

「私の負け・・・」

「ひとつも思い付かへんの！？」

「国民的アイドルグループだよ！？」

全く思い浮かばなかつたらしいフェイト。仲間がいてよかつた……マジで。メイドで某戦線の野球少年口調は鬼畜だ。

「で、でも他の人も思い付かないよね……？」

フェイトは周りの皆に同意を求める。

「僕はわからないかな……」

「興味がありませんから」（俺

「お兄ちゃんが聴いてないから私も聴いてない」

「私は家族が聴いてるみたいだから聴いてるよ」

「よかったです……聴いてない人いたよ」

胸を撫で下ろすフェイト。が、安息は束の間だった。

「じゃあ語尾にやんよね」

「は、はいやんよ……／＼」

正直に言おう、似合わない。

「ついで、セレナがやつたら難しいのばつかしか出てこないやんよ……？」

フェイトがセレナに反論する。が、セレナはしぬっと言ふ負かしてきた。

「単なる勉強不足でしょ？」

「けれど地球の文化なんてなのはや一騎ぐらこしかわからなじよ……？」

「いや、出身の私もなかなか厳しいんだけど
「俺は興味がない」

といふか、娯楽がなかつたしな。”プラント”は。そんなこんなで古今東西は続き、結局セレナが圧勝で終わった。フェイトに至つては語尾にやんよ、甘えんば口調、猫耳カチューシャ、仕舞いにはセレナが何故か用意していたパールルージュを塗らされた。

「 . . . 」

「どうしたの、フェイト？」

「ふえ！？な、なんでもないよ！」

パールルージュはフェイト的に受けがよかつたようだ。

で、レンタサイクルを経由して現在は海地獄に向かっているところだ。海地獄は、1200年前の鶴見岳の爆発によつて出来たとされている。湯が青いが、摂氏98もあるのでもちろん入ろうものなら大火傷だが。入つた瞬間、田の前の青い色をした湯を見て、優希は感嘆の声をあげる。

「ふわあ . . . す”く青い . . . 」

「凄いね . . . 本当に海みたいだよ」

セレナやはやてらもこれにはびっくりなよつでまじまじと「ゴバルトブルー」のそれを眺め続ける。

「ちなみにそれほど沸騰した湯と同じ温度だからな

「うそ！？」

「だからさわんなつて書いてるんだろ」

そう言つて俺は海地獄について記された看板を指し示した。それを一別してなのはは脳く。

「 . . . なんで青いんだろう . . .

「 ああ . . .

さすがにそこまでは俺は預かり知らない。そしてふと、俺は竿に吊るされたソレを見つける。

「なんだ . . . ?」

「ん? どれや」

はやてが俺の隣に来て、同じく田を凝らす。そして程なく氣づいたよひで、首をかしげた。

「ざるのなかに . . . 卵が入つとるみたいやね」

「蒸し焼きの類いか?」

「かもなあ . . . 湯気と水温が凄いさかい、それ使つとるんやうね

俺はああなるほど、と思つた。有効活用とかお土産物確保的なアレなのだらう。

「せつかぐだし食うか?」

「え、ええの?」

「たまには」うこうのもありだろ。おーい、お前ら卵いるかー?」

今だ興味津々で海地獄眺め続ける優希たちに声をかける。

「うんー、いるーー！」

「りょーかーい。んじゃ、買つてくるな」

「わかつたやよ」

俺はそう告げてお土産屋に足を運び、人数分の卵を確保した。そしてみんなで美味しく戴いていた頃、管理局で警戒すべき事態が起きたことは未だ知るよしがなかつた。

- view kyo ya -

「飛天御剣流 . . . 九頭龍閃ツ」

ここは俺やらウンズが短期的に能力強化をするためにある、『修練の門』。無論俺が作つた場所だ。

内部で”王の財宝”ゲートオブバビロンを使い、氷輪丸を出していた俺は見よう見まねでる剣の九頭龍閃を放つ。使う度に思うが理屈さえ分かつていれば一応撃てるようになるようだ。この能力をくれた死神には感謝しなきやな。

「きょーやー、書類整理終わつたよー」

フィオネの呼び掛けに気づいて、俺は声がした方を向く。

「ああ、わかつた」

「つてまた訓練？ただでさえ強いのにまだ強くなるんだ？」

「そりゃあ準備として損はないだろ」

修練の門を出て、汗を拭きながらシャワー室に向かう。あそこで訓練すると、ガンガン強くなるのが解る。あの場所は、時間の流れが1日が二三日ちの世界において一年に相当する。つまり一時間では半月分の鍛練を積んだことになるのだ。まあ隠りすきはちよつとましいがな。

「ヴォオオイ！…京谷あ…！」

突然の怒鳴り声に俺はつい肩をすくませる。まあこんな怒鳴り方をするのは一人しかいない。

「どうしたんだよ、カルト」

「出向中の紫苑とシオンから緊急通信だ」

「紫苑とシオンが？」

ちなみに読みは同じ”しおん”だから、二人が固まって居るときに呼び掛けると両方反応する。かと言つて階級つけたら紫苑がえー、といった顔をするから余計困る。

「分かった、すぐ行く」

俺は手早く制服を羽織つて、端末で紫苑らと通信を繋ぐ。すると、少し焦りの顔を浮かべたシオンが応答した。

『京谷ですか？』

「ああ、どうした通信なんぞ」

『ええ、紫苑が巨大な魔力反応を感じて向かつたのですが…』

「やられたのか！？」

悪い未来を想像し、語気が荒くなる俺。しかしシオンは首を振る。

『いえ、戻ってきたには戻ってきたのですが・・・紫苑が手紙を預かっていたみたいで』

そつ言つて、懐から一枚の紙切れを取り出す。確かに俺の一いつ名『神帝』宛になつている。

「内容は」

『今夜、この世界の西の森で貴方を待つ』・・・だそうです』

「果たし状か。京谷に挑むなんざあ、頭イカれてやがるな」カルトは鼻で笑う。だが、俺は少し引っ掛かるものを感じる。なぜわざわざいじりして経由させて伝えなきやならなかつたのか。

「なあ、紫苑から受け取つたときなんかおかしいところなかつたか？」

『おかしいところ・・・ですか?』

「ああ、些細なことでいいんだ。何かないか」

シオンは暫し考える。やはり思い当たる節があつたようであ、そうだという風に手をぽん、と呟わせた。

『何か操られていた感がありましたね。手紙も受け取つたはずなのにいつの間にか持つていた的な』

俺の予感が的中する。何者かに紫苑は手紙を渡すように仕向かれた。ラウンズで四番目に強い彼女が操られるとなると、非常に高ワングな魔力を有していることになる。

が、やはりもうひとつ気がかりなことがあった。

「……どうして無傷で返されたんだ？」

俺はある意味管理局でやりたい放題なため、上層部からひね恐怖の対象となつていてる。

脅しやらなんやらなり、もう少し卑劣な手を使つてもいいはず。もしくは俺自身だけに牙を剥いていきになるのか？

「……とにかく、俺は向かう。フィオネ、準備だ」
〔ホールライト〕
「了解」

フィオネはすぐに俺がいつも携行するものを転送して準備した。

「勝てんのか、京谷」

「はっ、ここの程度勝てなきや”神帝”を召乗る義理はねぇよ」

そう言つて自分自身で転送魔法を使い、紫苑らがいる管理世界に飛んだ。

俺が飛んだ先には紫苑、シオン一人ともがいた。俺を用意するや否や、紫苑は近づいてきた。

「京谷か」
「ああ、まさか操られていたなんてな」
「つむ……儂としたことが手玉に取られての。ああ、変な」とはされておらずから大丈夫じゃ」

紫苑はしてやられた、といった表情で自分の失態を悔やんでいた。

「そりいや、反応時の推定魔力はいくらだつたんだ？」

「……聞いて驚くでないぞ」

紫苑はそう前置きし、一拍置いて告げた。

「……EXじゃ」

「……！」

魔力ランクEX。際限がない量の魔力を保持し、またそれを意のままに操る戦闘技術を有する魔導師が名乗ることを許される最強の証。それを持つものが、今この世界に存在している。

「実力は少なくとも京谷と同等と見てよいじゃらう。儂が接触した限りでは無法者ではないように思つが、油断は決してするな」

俺の胸中に一抹の不安がよぎる。しかし、直ぐにそれは搔き消された。
真剣な表情で、真っ直ぐ俺を見て忠告する。

『緊急事態、緊急事態！－西部の森に魔力反応あり！－推定ランク、EX！－繰り返します』
「……来やがったか！－行つてくる－！」
「あ、京谷！－」

「待つのじゃ……」

フィオネと紫苑の制止を振り切り、端末で反応地点を検索しながら基地を飛び出す。

反応は西部の森から動く気配がない。恐らく待っているのだ。俺は全速力でその場所に向かった。

俺が降りれる場所を見つけ、降り立つとそこには榆の木の森が広がっていた。元々やたらでかい木な上、すでに夜なので無駄に迫力がある。

いつ襲われてもいいように、左手には王の財宝で呼び出した“千本桜”が握られていた。

「……君が、氷上京谷くん？」

俺はハツとして、声がした方を向く。そこには、ボロボロだが大きなマントに身を包んだ女がいた。無論、声だけでの判断だ。

「……だとしたら？」

「力を試させてもらいうわ」

そう言い終わる前に、女は俺の眼前に迫っていた。

「つー？」

繰り出された手刀を仰け反りながらかわし、そのまま蹴りを加える。

が、片手で止められあまつたえそのまま投げ飛ばされる。

「ぐつ・・・散れ、千本桜ッ」

そして千本桜の解放を使用し、女に向かわせる。

「止まって見えるよ、加減してるのでかな」

女はそうこうと、手刀で千本桜の刃を振り払った。

「こんなもんじゃないでしょ？」

そう言って再び間合いを詰めてくる。

俺はならば、と刀を手放す。正確には、”千本桜の卍解”だ。

「散れ・・・千本桜景巖！！」

千本桜の始解では到底かなわない、数億の桜の刃が形成される。

「へえ、やるじゅん」

俺は女に桜の刃を向かわせた。俺の魔力でさらに強化されたこれは、オリジナルよりも遙かに攻撃力がある。

さすがにヤバイと感じたか、女はすぐさま距離を取った。

無論、逃がす気はない。俺は手掌で千本桜の波を操り、女の気配がする方へ向かわせた。

しかし、それでもギリギリで捉えきれない。

「・・・さすがにマズイか。スプリガン」

『ai11ri ght』

女は千本桜の攻撃範囲外に逃げると、『デバイスらしきものを手に取りながらに切つ先を向けた。

「がつかりさせないでね……」メトアッシュヤー

刹那、膨大な魔力の収束を感じ取つた俺は千本桜をかき集め、盾にさせた。同時に、女の砲撃魔法がぶつかる。

(. . . つ ! 重い)

俺ですら、重いと感じる強烈な闇色の砲撃。

それをなんとか受け止めた俺は千本桜を仕舞い、オーディーンが使つたとされる刃”斬鉄剣”を取り出した。

「凄いね、いろんな武器が使えるんだ」

「これが俺の能力なんでね」

俺は隙を伺いながら、女の問い合わせに答える。女は地上に降り立ちながらこう言つた。

「 . . . ジや、君の得意なレンジで戦つてあげるよ」

「ツ、なめんなあ！！」

簡単な挑発に乗つてしまつた俺は、女の元に突撃する。女は動じず、斬鉄剣をデバイスで受け止めた。

「なつ . . . 」

「驚いている暇はないんじゃない？」

そう言って、剣撃を振り払う。

「スプリガン……ザンバー モード」

デバイスをザンバー モードなるものに変えた女は俺に迫り、袈裟懸けに振り降ろしてくる。

それをバックステップでかわした俺は、カウンターに入ろうとした。しかし、体が動かなかつた。

「……バインド……！」

尋常じやない硬さのバインドが俺を絡め取っていた。そして、女は俺の腹に手を当てる。

「……何の真似だ
「すぐにわかるよ」

女が言つた瞬間、腹に形容しがたい衝撃が走り、俺は絶息した。

「私があまり周りを壊したくないときには使う魔法、”ショック”。これを言えば、自分の最大戦力の攻撃と同等の攻撃力を必要な相手だけにぶつけられる。まあ君にかけたのは手加減してあるけどね」俺は薄れた意識の中、先程の技の説明を受けた。バインドを破ろうにも時間がかかりすぎる。ましてや、大ダメージを受けた後だ。かなり難しい。

「……紫苑を操ったのは、テメエか」

「そうだよ、あなたに連絡をするように仕向けてたのは私。まあ一触

即発な感じだつたから本気で縛つて、刷り込みしたんだけどね。心配しなくても体には負担かからないわよ」

「俺が聞きたい」とに対し、言つまでもなく答える女。しかし、やはり解せないことがある。

「まあ訳あつて管理局の輩共には顔を見せるわけにはいかなくてね。私みたいな魔力の持ち主なら、すぐに反応するでしょうからこの形を取つたのだけどね」

「……じゃあどうして俺に接触したんだ」

「……力を試すためだよ。奏つちゃんの味方がどれくらいやり手なのかを図るためにね。これから起こる惨劇に対応する力があるのかを見たかった。君は、13歳にしては称賛に値する判断力と戦闘能力を持つてる。これなら君の下にいる子達も信用できるわね。それじゃ」

訳が分からぬことばかりを抜かして、立ち去りつゝする女。

「待て……」

「大丈夫よ、私がこの世界から消えたらバインドも消えるから」

俺に背を向け歩きながら、そつぜんと。「俺が聞きたいのはそれじゃない。

「お前の名は!？」

「もしさまた会えたなら教えてあげる」

それだけ告げて世界から脱出しようとす。が、そうだと風に振り替えつて口を開いた。

「力の使い方、間違えないでね」

そう言って、女は消えた。そしてバインドも音もなく崩れ去つてゆく。

『京谷……京谷……』

通信で、フィオネの呼ぶ声がした。すぐさま回線を開いて対応する。

『良かつた……何故か通信が繋がらなかつたから心配したのよー…?』

フィオネは目に涙を溜めながら言つ。氣づかなかつたがどうやら、俺が戦つてる間にこには外界からシャットアウトされていたらしい。

「ああ、なんとか」

『派手にやられてんじゃ ねえか京谷あー…』

後ろからカルトの怒鳴り声が聞こえる。なんだかんだで心配だったんだろうな。

「大丈夫だよ、なんとかな」

俺は体を動かしながら答える。

『まあお前が死ぬような奴だとは思わねえがな。……で、どれくらい強い』

急に真剣な眼差しになるカルト。フィオネや紫苑、シオンも真剣な目で俺を見ている。

「尋常じゃなく強い。お互い力をセーブしていたが、本気で戦つていたらどうだろうな」

それを聞いた途端フィオネ達の顔に影が走る。

『何か言つてた?』

「俺を呼んだのは、力を試したかつたらしい。これから起ころる惨劇に対応する力がなんとか・・・つてよ」

『・・・何か起こるのかな』

『一種の犯罪予告か?』

「・・・それなら、俺だけに告げる理由はない。それに、俺達と敵対してる訳じやなさそうだ。かと言つて・・・」

そじではたと、何か引っ掛かるものを感じた。

『どうしたの、京谷?』

「いや・・・大したことじやないんだが・・・あいつの口から『長の名前を聞いた』

『奏さんの?』

「ああ・・・一応、後で話聞いた方がいいかもな

『そうだね。じゃあ早く戻つてきなよ』

そうして、フィオネは通信を切つた。

「・・・惨劇、か」

この時の俺はまだ気づいていなかつた。その凶刃が今旅行している一騎らに向けられていることを。

Rewrite4：最強の魔導師（後書き）

京谷「・・・」

命「機嫌悪そうだね？」

作者「俺が最強だぐへへへへつてやつにはいいお仕置きだよ」

京谷「『天地乖離す開闢の星!!』」
エヌマ・エリシュ

駄馬司 あーあ、作者が死んだ。さて、代わりにこの小説を読んでくれださつた人には無上の感謝を。それでは！！

- view kazuki -

「 . . .

翌朝。俺は重い頭を必死に動かしながら昨日の回想をしていた。

「えーと . . . なにがあつたつけ . . .

昨日の記憶をがさがさと漁る。んー . . . 思い出せない。

『ドカンと一発！（だだだん）いつてみよーおーおーーー！』
「つおおつー？」

突然鳴り出したアラームに焦る俺。周りを見渡して音源を探すと、じつやら音源ははやての携帯だった。

「なんでこんなわけのわからん着信を . . . つて

そこで俺は異変に気づいた。まさかまさかと思いながら周りを見渡すと、絵面にはなかなか出来ないはやてらの姿があった。

「 . . . あ、思い出した。ここから甘酒で酔つたんだ」

ここで、事の顛末を思い出した。旅館に着いて、あらかたやること済ませてから予定通りスマブラ大会をしたんだ。で、負けたはやてが今晚のつまみの買い出しに出掛けた甘酒を買った。それを飲んだ俺とセレナ、希来を除く全員が酔い潰れて大変なことになった。

ついぞ野球拳（家禄のある野球拳）をし出して俺は見なかつたことにして先に寝たんだ。

「……顔洗うか」

そう思つた俺は、洗面所に向かい顔を洗う。水が冷たいので、すぐに眠気は覚めた。そして程なく通信が入る。これは……京谷さんだ。なんだろう？

『一騎か。旅行は楽しんでるか？』
「……むちゃくちゃ疲れるんだが」「ははっ、まあ頑張りな』
「……それだけじゃないだろ」「ああ、そうそう……忘れていた』

本気で忘れていたらしい。

『昨日、紫苑らの出向先で魔力EXのやつが現れた』
「本當か？」
『ああ、ついでに言えば俺は戦つて負けた』
「……！」

京谷さんを倒す程の実力者。今回の事件は京谷さんを持つてしても厳しいのだろうか。

『まあ敵対する訳じやないだろ。力を試したかつただけらしいし』
「……」
『で、こつからが本題』

そして真面目な顔で京谷さんは話し出す。

『そいつの話によるとだな、これから少ししたら惨劇が起きるひつじ。だから、全員に気を引き締めとけって言つといってくれ。俺達もいつでも向かえるよつて準備しておくれ』

「了解した。そつと言えば京谷さん」

『ん?』

「・・・浦原貴輔の店つて湯布院にあるんだよな」

『? それがどうした』

京谷さんは首をかしげながら言つ。浦原貴輔は、ラウンズ御用達の店で管理局やあらゆる世界事情に無駄に詳しい。行き詰まつた時にたまに訪れる場所である。

「・・・少し寄つていく

『ん、そうか。俺から話は通しておくれよ

「ん、了解。他に用件は?」

『んー、今のところはないな。んじゃ旅行楽しんできな

そう言つて、京谷さんは通信を切つた。俺は端末を切つてから部屋に戻り、周りを見渡す。

いまだにはやてたちは起きる気配がない。妙に浴衣がはだけたりしているため、やり場に困る。

(わへ・・・ビビッしたものか・・・)

俺は起こすより先に、自分の身支度を整えるよつじた。手早く衣服を取り出し、サッと着替える。

軽く体を動かしていると、もぞもぞ動き出したやつがいた。フェイトである。

「ん・・・おはよ、一騎」

「おはよっさん、酔っ払いそのー」

「こきなりそれはやめてよ・・・」

苦笑いしながら答えるフロイト。はやりら程じゃないが酔っていたことには変わりない。

「みんなまだ寝てるね」

「ああ・・・まあ旅行は行き当たりばったりだから別に昼間で寝てくれて構わないけどな」

同じく苦笑いしながら答える俺。せっかくの休みなんだから、こういったハメ外しも悪くない。が、それはあくまでただの休み旅行だけの話であって先程京谷さんから話を聞いたとおり、少し危険な旅行になりつつあることは必ず伝えねばなるまい。
それをいかに伝えるかを模索していたところ、フロイトの他にももぞもぞと起き出す。

「あ・・・おはよっやよ・・・」

「おはよ、お兄ちゃん・・・」

「・・・(むくづ)・・・(すぴー)

「こりうりうりー」「ナセレナ」

俺は適当に引っ付かんだペットボトルで突っ込みをいれた。

「・・・(すぴー)

・・・しばらく放置しそう。そう心に決めてから、部屋のカーテンを開け放った。

外は曇りひとつない快晴。紫外線や脱水症状に気を使わねばならない天氣だ。みんな一本ずつアクエリを買ってあげなきゃな。

「うーーー頭痛いーーー」

「そりゃ甘酒やつてもあんだけ飲みやあなあーーー」

なのはは完全にやられてしまつてこる。命はまだ寝ているが、気分悪そうな顔をしていろ辺つこつも「口酔いの類いだらう。

(大丈夫かよーーーちょっと大変な事態なのにーーー)

様子を見てため息を突きたくなる。京谷さんがいればなんとかの杖で一発で万事解決なんだらうけど、生憎そんな便利能力には恵まれていない。

結局、全員の体調が万全になる昼まで旅館から出られなかつた。

「よし、んじゃ手短に京谷さんから連絡された」とを言つゞ

よつやくベストコンディションになつたみんなを集め、京谷さんから連絡されたことを伝える。今までのおちやらけが嘘のよつこ、各自真剣な眼差しを向けていた。

「まず一つは京谷さんの方で戦闘があつたこと。魔力ランクはEX

」「「「」」」

全員が息を飲んだ。驚くのも無理はない。

「じ、じゃあ京谷くんは！？」

「軽傷だ。相手は本気で戦り合つたりはなくて力を試したかったらしい」

「……なんのために？」

なのはが問う。こちらも戦技教導官としての顔だ。俺はひとつ間を置いてから答える。

「これは一いつ耳に言いたいことと被るんだが、これから遠くない未来に惨劇が起らるらしい。それに対応するだけの技量があるかどうか、だと思う」

「けどそれやつたらうちにも刺客は送られるべきやん？」

「どちらみち京谷さんから指示が飛ぶんだから大したことはない。でも、京谷さんからの指示はとにかく気を引き締めると言つことだ」

「……了解っ！」

全員が一つ返事で返した。それから、はやてを手で誘き寄せた。

「ん、なんや？」「

「もし戦闘が一いつ耳で起きたら、隊長から指示が来るまでは俺とはやてで仕切るからな」

「うえ、さすがにラウンズメンバーは恐れ多いで……」

「はやは指揮官候補だ、資格取りや年上のしたつぱ持つことだつてあるんだぞ。まあ……極力俺が面倒見るよつとするナビよ」

ああ、なんで妥協してしまつんだ俺。それを聞いたはやははこうり微笑んで、

「ありがとな

と言った。やれやれ、俺も甘いな。

「とつあえず、この話はおしまいにして・・・今日はどういったところへ？」

話は終わつたと判断したのか、フェイトが今日行く場所を聞いてきた。

「ああ、行きたいところがある

そして、ところ変わつて湯布院。大分の觀光名所のひとつだ。

俺たちが居るのは由布院駅の前に広がる觀光通り。いろいろなお土産屋や有名な食事処やB級グルメが売つてあり、シーズン中は觀光客で賑わう。

また、この通りの公園には日本を代表する蒸氣機関車D51^{キタコレ}が完品で置かれてあり鉄道マニアにはk t k rな場所でもある。

ちなみに、贅沢にも俺達は直通特急”ゆふいんの森”で来たのはこだけの秘密だ。

「へえ・・・風光明媚な場所だね」

一番最初に降り立つたなのが感嘆の声をあげた。ついで、降りて

あた連中もおお、といった表情を浮かべる。

「おみやげいっぽい買わなあかんね」

「隊長やみんなにもだね」

始々がやりたい事をやあやあ言つてこるのを尻目に、俺はセレナの
ところに向かつ。

「ん、どうしたのかずっと…」

振り向いたセレナを強引に手を寄せ、耳許で囁いた。

「ここに…」

「浦原のところ行く

「…了解。みんなを見てたらいいんだね?」

セレナが最後の台詞を言つ終わる前に俺は離れ、右手を挙げてから
立ち去つた。

『あれ、一騎くんは?』

『ちょっと下したみたい』

『さよかあ…一緒に回りたかったなあ…』

『あはは…』

よし、なんとか「まかしてくれたみたいだな。

「だらりしゃあーー！」

「．．．掃除しようよ．．．」

サボつてほづきを振り回す少年を看める少女。

「うっせえー！鉄斎が怖くて掃除なんか出来るかーー！」

「いや．．．怖いから掃除するんじゃ、「俺様に口答えすんなーー！」（

ぐりぐり」痛い痛い痛いよ！？」

「こりこり、なにしてんだガキンチヨ。店長は居るか？」

店で働く子供一人が喧嘩しているところに乱入し、仲介する。

「．．．まいど」

さて、ここは浦原雑貨店。表向きはあらゆる雑貨やお土産を取り扱う謎の店だ。値段も良心的で破格の安さを誇る。

といつのは表向きの姿で、ご覧の通り俺達ラウンズや異界を旅して回るものには重要な拠点であり、魔法や魔法具、あらゆる世界事情にも精通する。

「む、まだ掃除中．．．」

「しかたねーだろ、こいつが開けろつつうんだから」

少年は筋骨隆々の男、葛飾鉄斎に言い返す。ちなみに、パツと見でラウンズの者だと分かるように制服に着替えた。

それを見てラウンズの者だと分かつた鉄斎は、抱えていた荷物を下ろして応対してくれた。

「ラウンズの者でしたか。今店長を起こして参ります故」

「ザーンネン、今日はまつ起きでますよン」

と、突然奥から間の抜けた声が聞こえてくる。そこから無精髭を生やすゲタ帽子・・・浦原貴輔はあぐびをひとつしながら出てきた。

「おはよ鉄斎、タツキ、雨音。そんでいらっしゃいませ一騎サン」「ああ、アルテマウエポン?の調整以来か」「そつすねえー、あれから使つたんすか?」「いや、まだ扱えるレベルじゃない」「へえ・・・でも、調整はするんスね」

貴輔に言ひぐるめられ、俺は言葉につまる。

「まあ、そのあたりはキミの扱い次第。で、今日はなにを御求めて?
「ああ・・・ちよつと今俺たちが抱えてる問題に関してだな」

「へえ・・・そんな」とになつてゐるっスか

俺は今までの顛末を手短に話した。貴輔は黙つて最後まで聞き、やがて口を開いた。

「魅音……か。懐かしい響きつ入ねえ……」

「……懐かしい……?」

その言葉に違和感を覚える。すると、後から入ってきた鉄斎も戸をピシャリと閉めながら呟く。

「まったくですな。私などはかれこれ40年はその名を聞いていません」

「40年……?どうこいつだとだ?」

貴輔は少し間を置いてから、少しづつ話し出した。

「恐らく京谷サンから聞いてると思うんスけど、魅音サンが魔力E Xの魔導師ってことは聞いていますね?」

「ああ」

「……では、稀少技能”闇”の事も?」

「な……!」

稀少技能、闇変換。それはあらゆる自然属性変換よりも稀少とされている技能で、魔力を闇の力に変換して攻撃するといつものだ。が、管理局の歴史では管理局勤務の魔導師に持つている者はいないとされている。

「……聞いていないみたいっスね。むしろ京谷サンも知らなかつたか」

「……管理局ではそれを持っている者はいないとされた」

「そつス。ですが、あくまでそれは表向きの話。今から42年前に

現れてしまつたんス。それが下坂魅音つス

俺は言葉が浮かばない。しかし、貴輔の説明は続く。

「今の魔導師で言えば、高町サンが魅音サンに近いっスかねえ。魅音サンも高町サンと同じように、現地協力者として管理局入りしました。そして余りある魔力の才能を存分に發揮し、程なくEXランクを受けました。しかし、それのある魔物の組織が田をつけたんス。無論、それは管理局も知つていた。けど、上層部は黙殺する方向に決定した」

「…どうして？」

「魅音サンは管理局の歴史で初めて、上層部の闇に気づいたんス。管理局の最強の魔導師として名を上げる一方、暇があれば管理局のデータベースを探り、闇を突き詰めていった。それ故に…魅音サンはその名を闇に葬ることになつたんス」

-view hayate -

さて、買い物はこんなものかな。しかし私もよう買つたなあ。トロトロやらジブリやら可愛いものや掘り出し物があるから、ついつい買ひ込んでしまつた。

一騎くんがあつたら、荷物持たせれるんやけど

「まだ帰つてきいへんねえ…」

「そうだね…」

なのはちゃんと一人してため息をつく。一体どこをまつつき歩いているんだか。

その中、なのはぢやんがふと空を見上げる。

「 . . .

「 どないしたん?」

「 つづん、なんでもないよ」

なんやなのはぢやん。呆けるなんて珍しいなあ。

一騎君の言つていたこと、正直に言えば実感がなかつた。そう、至近距離に”ソレ”が現れるなんて。

ズガアアアンッ

「 「 「 ! ! ? 」 」

突如北西で爆発が起つる。突然の事態で私たちも反応が遅れた。そして程なく一回目の爆発が起きた。

「 はやてぢやん! ! 」

「 わかつどる! ! 」

私たちはすぐに荷物を捨て、レイジングハートと剣十字のネックレスを取り出す。

「 リイン! ! 」

「 レイジングハート! ! 」

「「セツトアップーー！」」

その言葉を唱え私達はデバイスフォームになり、爆発のあつた方へ向かおうとする。

「ツーはやでちゃんーー！」

「ー？」

なのはちやんの声で反射的に振り返る。

「へへツ死にな」

異形の魔物がそこにいた。

- v i e w k i r a -

「ツーアロンダイトーー！」

魔力弾を10形成して魔物に撃ちつける。着弾と同時に突撃チャージを仕掛け、頭を割った。

「大丈夫、希来ツ」

「．．．なんとかーー！」

一回目の爆発の近くにいた僕と命は、複数の虫型の魔物と対峙していた。恐らくレディバクというやつだろう。その幾つかが、魔法を放とうと魔力の収束を開始する。

「 . . . 」 ラスオブツヴァイ！ ！

ラスオブツヴァイは命の十八番のひとつで、チャージによる乱れ突きだ。さらに命の風変換と吸血鬼ならではの瞬発力でバカにならない破壊力を秘める。

もちろん、今詠唱に入っていたレディバックは全滅させた。

「そいつ

僕は聞合いで詰めて、一息に三度斬る。一騎や隊長みたいに神速の斬撃は繰り出せないが、連撃には自信がある。

「一騎 . . . どこにいったの！？」

命は怒鳴りながら、次々現れる魔物を蹴散らしていく。しかし、その一匹を撃ち漏らしそいつは一般人の元へ向かっていく。

「しまつ

「ラウンドシールド」

が、間一髪誰かのシールドによつて防がれた。

「行くよ、ジーク

『了解ッ』

彼女は短槍ジークフリードを自在に操り、次々現れる魔物を蹴散らしていった。

あらかた倒したところでようやく彼女 . . . セレナは口を開く。

「ここにいる . . . 何者なの？」

「分からぬ……けど、明確な敵意を持つてるね」「！あそこー！」

命が指差した先で、空が異常に沈んでいる。いや、歪んでいるといった表現が正しいのかもしれない。そして、その近くに優希とフェイトがいた。

- view fate -

二回目の爆発が起きた時、私と優希は近くにいた。が、そこにいたやつは私たちに目もくれず、一田散に何処かへ行つた。呆然としていたところに、優希が空の歪みに気づきそこへデバイスフォームで近づいた。

「なんなの……」れ

近づいた気がしない。しかし、確実にそこはなにか歪んでいる。僅かの気の緩みもなくし、そこを注視する。すると、突然何かが現れた。

「サンダースマッシュヤーーー！」

予め詠唱していたサンダースマッシュヤーをソレにぶつけ、優希を引き連れてその場を離れる。すると、そこから一匹の巨大な魔物が現れた。

「……」

私の背筋に悪寒が走る。あいつは危険だ、逃げると頭の中だけでたましく警鐘が鳴り響く。

「優希！…」

が、優希はそんな私を尻目にチャージを仕掛けた。

「つ」

怒鳴るよりも先に支援攻撃。私はプラズマランサーを出せるだけ出して、優希の共に向かわせた。

「クロススレイヴ！…」

三田円の波光撃を撃ち出し、さうにすり抜け様にスピンクロスをかけて追撃。さら^ヒプラズマランサーが全弾突き刺さり爆発を起こす。

「やったの！？」

「…いや」

私は苦虫を潰した顔をしてしまった。そいつには痛手ひとつ負わせられてなかつた。

「…こんなものか」

「つー？」

(喋つた！?)

「ヒヒッ 青いの… 小娘！…」

魔物は一気に間合いを詰め、私に左腕を伸ばした。咄嗟に私はバルディッシュで切り払い、ザンバーフォームに切り換える。

相手の速度に合わせて切り返すが、僅かに追い付かない。

「ヒヒッ！—」

そして触手を伸ばし、私を絡め取るつと迫つて来る。そのひとつ足を取られ、私はバランスを崩す。

「アクアジョット！—」

しかし、間一髪優希の攻撃で触手は切り払われる。そして、優希は私の近くで構え直した。

「あなた．．．何が目的？」

「目的？ヒヒッそんなものの決まつてある！—下坂魅音に用があるのじよ！—」

「—？」

「どうやら知つておるみたいじゃ。隠し事はいかん、やつせと吐け

「．．．嫌だと言つたら？」

「いひしてくれるー！」

そう言つて魔物は距離を詰めてくる。優希はクロスジャベリンモードにして迎撃しようとする。

「なつ！？」

が、見事にかわされながらスピードを上げる。匕ひやり狙つて私のようだ。

「プラズマサンバー！—」

カートリッジを一つ撃ち込み、雷の一閃を叩き込む。

「バカツー！」

優希が私に怒鳴る。その意味は数瞬遅れて理解した。

そして、後ろを振り返ると魔物が今までに攻撃しようとしていた。

- view hayate -

「な・・・」

私には何が起きたか理解できなかつた。
気がつけばすでに弾き飛ばされていた後だつた。

「はやてちゃん！」

なのはちゃんは叫びながら、アクセルシューターを叩き込んでから私のところまで飛んでくる。

「大丈夫、はやてちゃん！？」

「あー・・・なんとか」

当たりで二ひんがよく、幸い軽い脳震盪で済んだ。すぐにシユベルトクロイツを構え直し、相手の出方を伺う。

(近距離型か・・・つちらじゅかなり不利やな)

けど、そんな事は考えたらあかん。確実に潰さなきゃ民間に被害が
出る。

「一気に力タつけよっか

「了解！？」

私は詠唱を、なのはちゃんはチャージをかけながら魔力弾をぱらま
いていった。

-view kazuki -

「なんだ！？」

一度の爆発が聞こえ、俺はすぐに店を飛び出す。すると、上空では
フェイトらがそれぞれ魔物と対峙していた。

「 . . . 来たみたいっスね」

「まさか . . . これが惨劇！？」

「その可能性は高いっス。京谷サンには既に連絡がいってる筈っス。
アタシらも直ぐに対応する準備をしましょう」

「わかった、俺も出る。 . . . アルル

「うん」

「「ゴニゾン・インー！」」

息ぴったりに、それを唱える。ただでさえ大きな魔力の奔流はさら
に大きくなり、俺の髪は山吹色に変わっていく。

「一番向かうべきは高町サンたちのところス。あそこは一番不利つス」

それを聞き終わる前に、俺はなのは達の元へ全速力で向かった。

「間に合え . . . !！」

- view hayate -

「白銀の風、天より注ぐ矢羽となれ . . . フレズヴェルグ！」

私の渾身の一撃、フレズヴェルグが全弾直撃する。

「はやてちゃん後ろ！..！」

「ツ！..！」

しかしここでノーダメージ。敵の右薙ぎの一撃をショベルトクロイツで弾く。

「ディバイン . . . バスター！..！」

なのはちゃんの援護射撃もまるで読まれたかのようにかわされる。

「ハツ . . . 溫いな。魅音に似てるからもしゃと思ったが外れのようだ。. . . 死にな」

魔力を込めた手刀が眼前に迫る。さすがに避けきれ . . . !！」

「他の援護に回ってくれ

敵と対峙したまま、一騎君は私達を呼んだ。さらに攻撃に備えて、刀に魔力を収束している。

念話で誰かに話しかけられる。誰かと思えばアルルだ。
「はやて、なのは

『これが私と一騎のユニークンよ』

一騎くんが居た。しかし、普段と様子が違う。

「悪い、遅れたな . . .

突然、攻撃を止め飛び退く敵。そして眼前にいたのは、左腕に千切れた陣羽織を巻く片翼の騎士。

「つーー！」

「破魔、竜王陣！！」

「だけど一騎くん……」

「いいからいいから。つか……俺の攻撃に巻き込まない保証はない」

一騎くんの言葉には、本気で心配しているよつた、そんな思いが込められていた。

「……やれんねや?」

「多分な」

「多分ってそれじゃダメでしょ……?」

「あーもー……」

なのはちゃん心配している気持ちはよく解る。私のフレズヴェルグを振り払う相手だ、いくら一騎くんでも倒せるか不安なんだと思う。けど、私の目には絶対やつてくれそうな感じが伝わってくる。なんだかんだ言つても、ラウンズ05の肩書きを背負っているんは伊達やないんやな……。

「いくよ、なのはちゃん」

「でも……」

「一騎くんが大丈夫言つてくんねや。ここの任せよ

「……つと」

なんとかなのはちゃんを宥めてその場を離れる。

「死なんといへな、一騎くん。」

ようやく行つたか。

はやてらの動向を見てから、もつ一度魔物を見やる。異形な仮面に必要以上に長い首。筋骨隆々の体に長い尾。そこからへんの魔物とは格が違うのが伝わつてくる。

「ふん . . . なぜ逃がしたんだ?」

魔物はバカじやないの、といつた表情をしながら問う。まあ別に残していても良かつたんだが . . . 。

「なあに、はやてらを傷物にしたくないだけさ。 . . . お前が試し斬りに十分な奴だといいんだがな」

「自惚れが過ぎるぞ、小僧」

その言葉を言い終わらない内に、魔物が眼前に迫る。それを仰け反つて回避し、そのまま黒龍で横薙ぎに払つ。

(浅いッ)

しかし、思つたような傷は入らない。魔物が捕らえよつと腕を伸ばしたのをかわしながら、微妙な距離を取る。

そしてまたチャージ。右左と順番で単純なパンチだが非常に高い破壊力を有している。

5撃目を受けたところで、視界の右端になにかがぶれるのを感じた。が、反応が遅れた。

尻尾をもろに受けた俺は、勢いよく飛ばされる。しかし魔力壁で足場を作り、受け身を取り再び構え直した。

「ほう . . . 魔力壁を足場にしたか。若造の癖になかなか . . . 」

「残念だが違うな」

背後に回り込み、予め刃に溜めていた魔力を解放する。

「破魔・・・竜王刃！！」

破壊力を極めた斬撃を魔物の背中に叩きつける。至近距離の攻撃だが、痛手を負わせて・・・

「残念だな、小僧」

思つた程の傷は入つていなかつた。

すぐに体勢を建て直し、魔物は尻尾を振り回してくる。

俺はバックステップでかわし、再び竜王刃を撃つ。しかし、今度は着弾する前に払われた。

「ふん・・・ナイツオブラウンズの者と聞いていたが、この程度か。この仮面魔獣デスカー・ディウスが本気を出すまでもなかつたな」

仮面魔獣デスカー・ディウス。ミッドではSSクラスの討伐対象で追加給金が付く程の強者だ。ランクで言えば俺より0・5上だが、たぶんそれ以上の差があるだろう。だが、俺は動じていなかつた。

「はつ、この程度ならなんとかなりそうな気がするな

「ふん・・・大局を見誤ったか」

そう言つて手を伸ばしていく。それをラウンドシールドで受けた。

「どうした、いくらお前が格上でもこいつはなかなか割れねえよ」
しかし『スカーディウス』はニヤリと……まあ仮面だから表情分からぬけど……笑つた。

「だから温いのだ、小僧。」カーズ

刹那、シールドが割れて俺の体に氣味の悪い何かがまとわりついてくる。

「ツー！だアツー！」

強引に振り払い、空域から脱出する。そして飛光撃を……

撃てなかつた。正確には”撃つた瞬間に霧散した”のだ。さらに……

(毒か！？さらに視界に靄が……！)

色々な異変が体に起きていた。必死に動かそうとするが動きがままならない。

「こいつはワシの体液から作った、究極の毒だ。即効性ではないし、致死させるには時間がかかるが戦闘に多大な影響が出る」

そして、俺に近づきながら説明を続ける。

「通常毒もあるがまずは視界の限定させる毒。そして行動を緩慢にさせる毒。そして極めつけは魔力の収束を阻害する毒だ」

そつ言つて俺に尻尾を叩きつける。

「がはつ・・・！」

「今の魔導師には魔力収束が出来ないのは致命傷だ。貴様も例外ではなかつたようだな」

「ぐ・・・」

体が思うように動かない。アルルも治癒魔法を使おうとするが、カーブによる影響でままならない。万事休すと言つやつだ。

「では名残惜しいが、時間だ」

そう言つて、デスカーディウスはカーブの2射目を撃とうとしている。無論、かわす力はない。

(ちつ・・・)

その時赤い三日月が、デスカーディウスの収束した魔力塊をとらえた。爆発が起き、デスカーディウスは飛び退いて周りを見渡す。

「いやあー、まさか一騎サンがここまでやられるのは計算外でしたね」

「．．．誰だ貴様」

剣撃を放った主．．．貴輔は帽子を直しながら答える。

「なあに、しがない商店の店主つスよ」

「それは答えてないと言つんだがな」

そつ言いながら、貴輔に向かうデスカーディウス。

「分からぬ人だな」

パンチを放つ前に背後に回り込み剣撃を加える。モロに受けながらも、デスカーディウスは左腕で攻撃を仕掛けた。だが、貴輔が元いた場所に拳が届く頃には、貴輔は脇腹を斬り裂き、再び後ろを取つた。

「こちらに来る間にアナタの行動パターンは解析済みです。無論アナタの必殺でもあるカーズもね」

デスカーディウスはたじろぐ。貴輔の声はあくまで冷静だ。そして普通とは微妙に形が違う刀を掲げ、こつ言つた。

「次は．．．攻撃する前に腕を斬りますよ」

- view fate -

「 . . . あれ！？ 私なんで . . . 」

「 起きましたか、テスター・ロッサ執務官」

私が目を覚ますと、目の前にはスノウがいた。スノウはため息をつきながら愚痴を吐く。

「 まつたく . . . つぐづく甘いですわね、貴女は。私が居なければ胸に風穴が空いていたところです」

「 . . . ていうかスノウ私に対して冷たいよね」

「 あなたが甘すぎるのです」

ちょっと凹む。私たちがいたのは駅前だ。先程の戦闘で大破したとはいえ、休む場所くらいはあった。

「 ねえ、さつきの魔物は？」

「 . . . 私が遅れを取るとでも？」

すでに倒していたようだ。たぶん私は何らかの形で気を失ったのか
. . 。

「 他のみんなは？」

「 優希は他の場所の応援に向かいましたわ。一騎は重傷を負ったようですが、誰かが他にいます」

「 そつか . . . 」

良かった。みんな一応無事みたいだ。私はほっと胸を撫で下ろす。でも . . . なんだろう、この胸騒ぎは。何かまた大きな何かが近づ

いているよひな . . .

「貴女でもさすがに氣づきますか」

「まあ . . . ね」

今までの比にならない何かが近づいてくるのが、なんとなく分かった。

それは段々と大きくなつてくる。

「 . . . 来ますわーー!」

スノウの合図で飛び上がり、周囲に警戒をする。そして辺りを見回していると。

「ッあれ!!」

私が指差した先には、もう比べるのが馬鹿馬鹿しいほどの巨大生物がいた。私らが何人でかかつてもちよつと危ないかもしれない。

「あれだけでかいと、逆に笑えてきますわね . . .」

「そうだね . . .」

「後少しで京谷達も来ます。持ちこたえますわよ」

「了解ッ」

そつ言つて、私達はデバイスを構えるのだった。

京谷「そういえばお気に入り登録があつたな」

作者「え、まじで？登録してくれた方、本当にありがとうございます。つたない文章ですが、末永く閲覧お願いたします」

命「おおっ、作者がすげー低頭だー！？」

京谷「んで、なんか後半戦に持ち込むみたいだな」

一騎「あのト駄帽子なかなかできぬぞ・・・」

命「みなさん後半戦に期待していくだといね。それでは、ドライブ・イグニッショングー！」

なのは「わ、わたしのセリフ~~~~！」

さうり 「 さつし えばや 」

さうり 「 なに？ お姉ちゃん 」

さうり 「 なんで湯布院なの？ 」

さうり 「 それはね、作者さんが旅行の件を書こうとしたときに一番
行つたことある観光地が大分だつたからだよ～ 」

さうり 「 だからつてこんなファンタジーに現実感のあるネタを入れ
られても・・・ 」

さうり 「 あはは・・・では、後半戦、始まります 」

-view kazuki -

「 . . . はあ . . . はあ . . . 」

くそっ、さすがに挑発して乱すほど雑魚じゃなかつたか . . . 。未だに視界が霞むし、体も思つたように動かせない。上体を起こすのがやつとだ。

『ごめん、一騎 . . . 私だけの魔力じゃ全快は難しいよ . . . それに私も魔力収束阻害されちゃうし』

アルルは申し訳なさそうに咳く。アルルはユニゾン状態だったから影響はないと思っていたが、どうやら体内にもきつちりダメージを与えるようだ。

俺は空を見上げる。そこでは、貴輔がテスカーディウスに対して多彩な攻撃で対応し、圧倒していた。

「 . . . アルル」

『何?』

「とりあえずアレのスピードについていけるくらいまで回復をせるのに何秒かかる?」

『一騎の魔力使つていいなら30秒』

「ああ、なら任せた」

『オッケー』

そういうてアルルは治療に専念し出した。さて . . . 動けるよつになつたらどうするか。

「灼火、一閃！！」

巨大生物に一撃を叩き込む。しかし、まるで効いた気がしない。

「トライデントスマッシュヤーッ！！」

フェイトも負けじと砲撃魔法を叩き込むも、やはり大したダメージにはならない。

「くつ・・・」

「化け物ですわね・・・」

しかし、痛みに鈍い分動きは非常に鈍重。ゆっくりと進行している割には攻撃しようという気概がない。・・・あくまで行動での話で、奴が歩く度に周りの建物などは気持ちいいくらい綺麗に壊れしていくのだけれど。

「・・・どうする？」

「どうすると言われましても・・・」

残念ながら策を打つまでもなく的がでかい。とりあえず魔力が尽きるまで攻撃してもいいけれど、それでは余りに分が悪い。しかも相手の出方が分からぬのだ。というか周りのみんなもそろそろ気が付いてもいい気がする。

「……突撃しかありませんわね」

「嘘！？スノウからそんなセリフが出るなんて思わなかつたんだけ
ど！？」

「仕方ないではありますんか！－アレだけでかいのにわざわざ頭な
んて使う必要ありませんわ！－」

「でかいから！」そどうしたら有効的な一打「えられるか考えようよ
！？」

「では貴女には対策ありますの！？」

「うえ！？そ、そりゃあ……………

…………京谷が来るまで死なないとか

「……結局策なしですのね」

「こんな」とならとつと突撃するべきだつたと本氣で思つた。ふと
振り返ると、巨大生物は動きを止めてなにやら探し物をしているよ
うなそぶりを見せた。が、それも一瞬で次の瞬間巨大生物の魔力が
収束を開始した。

「－－離れますわよ－－！」

「つ、うん－－！」

私はフェイトを呼び、直ぐ様上空へと退避する。そして巨大生物は
あくまで緩慢に、そのまま向いている方向へ巨大なビームを放つた。

「－－－－？」

おそれらく今回旅行に出払つた全ての者が驚愕したはずだ。その一閃
はそのまま別府湾まで一直線に焼き払つた。

「嘘……」

目の前の光景にフェイトは目を見開いたままだ。私もじばらく呆然としていたが、すぐに我に返つて全員の安否を確認する。

「みんなは！？」

「大丈夫、みんな巻き込まれていませんわ！！」

フェイトはそれを聞いて安堵の息を吐く。しかし状況が良くなつた訳ではない。

「これ程となると・・・」

「ヤバイね・・・」

私は平静を装いながら、隊長の到着を待つ。

・・・まだ来ないのですか、京谷・・・！」

- view kazuki -

「・・・！」

貴輔は動きを止めた。恐らくさつきの魔力収束に関係しているのだろう。驚愕の表情を浮かべていた。その隙を突き、デスカーディウスは貴輔に一撃を叩き込む。

「ガツ・・・！」

「ハツよそ見なんぞやつてくれるなッ」

デスカーディウスのラッシュが始まる。今まで攻戦一方だった貴輔が嘘のように防戦一方となる。

「つまるじーー！」

気合の一発がモロに入り、貴輔がバランスを崩す。

「まだだあーー！」

さらに尻尾を叩きつけ、貴輔を撃ち落とす。

『準備完了だよ、一騎』

同時に俺の回復も終了する。突き刺さったままの黒龍を抜き、デスカーディウスの元へ飛翔する準備を始める。

『あれーー！』

アルルが叫ぶ。その先では、デスカーディウスが貴輔に向かって力一ズを放とうとしていたところだ。

「ツくそーー！」

俺は全速力で射線軸に割り込もうとする。しかしギリギリで間に合はない。

「死にな」

「．．．こここまでつスか」

叩き落とされ、身動きができない貴輔は半ば諦めた表情で目を閉じる。しかし、俺が間に合わないと判断した保険のために用意したシールドが間に張られた。

「また貴様か。その盾では防ぎきれん！！」

デスカー・ディウスが力を込めるごと、シールドにひびが入り始める。

「いっけええええええ！！」

シールドの後に回り込んだ俺は、あらうことかそのシールドを叩き斬つた。

「バカが！！わざわざやられ・・・・て・・・」

デスカー・ディウスの言葉が尻すぼみになっていく。なぜなら、自らが放ったカーズが”すべて消失していた”からだ。

「一騎サン・・・」

貴輔ですら、驚愕の表情で俺を見ている。

マギナ・ブレイク。

それが今さつき俺が使った術式だ。

敵と自分の間に張られた、特殊な魔力シールドに何らかの攻撃が接触しているときに自らの手でシールドを碎くことでシールドに加えられた攻撃の”全て”を無に返す究極の防御術。さらに応用すれば、相手の防御フィールドなども無に返す事も可能だ。

しかし実践に使うには非常に使用タイミングが辛いし、わざわざ危険を犯さなくともかわせば済む問題なため、既に廃れてしまっている。こんな術式を使うのは俺くらいだろう。

「何故 . . . マギナ・ブレイクを . . . 」

貴輔は本気で驚いた表情で俺を見ながら聞いた。

「魔法剣に関する書見がラウンズの書庫に眠っていたんだ。たまたま俺が研修期間に読んだものにそれがあつてな . . . ちょっと難しい術式だが京谷さんにヒントもらつて覚えたんだよ」

「敵と対峙している間に、ずいぶんと悠長だなあ！？」

デスカー・ディウスは再びカーズをぶつける。しかし、もうあのよくな厳しい真似はしない。次はしつかりシールドで止め、刹那にマギナブレイクで破壊する。

「なつ . . . 」

「さつきのでコツは掴んだ。 . . . もう当たらねえよ」

俺は刀にありつたけの魔力をしつかり練り込んで込める。そして刀からは凝縮され、留めきれない分の魔力が噴き出し、ぼんやりとだがくつきりとした龍を作り纏わせる。

「な . . . 」

貴輔はその光景に絶句する。俺は、そのまま切つ先をデスカー・ディウスへ向けた。

「悪い . . . 手加減できそうもない」

俺は剣先をデスカー・ディウスへ向けたまま、先程とは比べ物にならない速度で突撃する。剣先から俺の右肩にまで纏わされた”龍”は咆哮を上げながら眼前の魔物を喰らおうと口を大きくあげた。

「 . . . ! !

さすがにマズイと思ったのか、背を向けて逃走を図ろうとする。だが、それすらも許さない。

「逃がすかよ。龍牙、天斬ツ！！」

そして眼前に迫った俺は、テイクバックの後右腕を思いきり突き出す。纏わされた”龍”は天へ昇るかのような勢いでデスカーディウスを喰らい、打ち出された。

その”龍”は魔物を喰らった後も刀を突きだした方向にそのまま一直線に突き進んでいたが、やがて魔力の霧散が始まり消失した。

「 . . . 」

俺はそれを無言で見つめた後、貴輔の許に降り立つた。

「一騎サン . . . 」

「大丈夫か、浦原 . . . 」

俺は手痛い一撃を受けた貴輔を見ながら聞いた。

「アタシなら大丈夫です。しかし、アナタはカーズをモロに受けてますよ」

「俺も大丈夫だよ。動けるようになるまではちよつと無茶をしたがな」

正直なところ無我夢中だった俺は自嘲気味に笑う。

未だ自分の意思で撃てない龍牙天斬。

それはこれから俺がナイトオブランズに所属している間ずっとお世話になる必殺の剣だった。

「そりいえば、どうして動きを止めたんだ？」

「上空で見ればわかるつス」

そう言つたので、貴輔に治癒魔法をかけてからふたりして飛翔する。ある程度飛び上がったところで辺りを見回すと、凄まじいでかさの魔物が存在していた。

「な . . . ! ! !

「あいつはパトワーリアつスね。ヴォヌスの亞種つス」

「ヴォヌス . . . ?」

聞きなれない単語につい聞き返す。貴輔はゆっくり頷きながら話し出した。

「はい。さつきの魅音サンの話にも被りますが、ヴォヌスは魅音サンの魔力に目をつけた組織の一種の兵器つス。見た目は突然変異した亀つぽいんスけど、中身は凶悪な武器を内蔵してるつス」

「凶悪な武器？」

「はい。ひとつ目はわざと放たれたディスマスターつていうゲーム。アレを本気で撃てば地球なんて一瞬で塵つスね」

「一瞬 . . . 」

ぞつとした。あの巨大生物はいとも簡単に星屑に出来る力があるのか。

「やつかいなのは二つ目つスね。やつは滅多に使いませんが . . . 」

俺は、その後恐ろしい魔法の存在を聞くことになったのだった。

- view mikoto -

「だつしゃあつ！…」

「53！」

いやあ、私の撃墜記録を軽く更新してね。
さすがに数が多いから魔力はほとんど防御と治癒に回して、自分の
身体能力を存分に振るって魔物を斬る。無論吸血鬼の力を持つから
1Jや出来る所業であつて、他のみんなはとこつと。

「…」「…」

「はあ…はあ…」

「さすがに、キツいねんな…」

「ど」から沸いてくるのよ…

べばつてましたー。情けなつ。

とこつかなんでなのさちやんとはやひちやんがでも仲良くなつてゐるや。

「やつやあ命けやんみたいに近距離戦えないしれ…」

なんだかんだでアクセルシユーターで蹴散らしながらのはは答える。

「なのはさん運動ダメですもんね」

「あつ・・・

優希にまで言われ出したら、不屈のヒースもお仕舞いだね。まあ二人は放つておいて。

「希来、優希。魔力と残弾は？」

「僕はまだ大丈夫だよ」

「私も、極力使うの控えましたから」

よしよし、ラウンズ勢は大丈夫みたいだ。

「私も余裕だよ」

「どこかに行つっていたのか、突如上から降つてきたセレナもそう答える。

「つてどこ行つてたの？」

「偵察。あまりに無限に出てくるから裏があると思つて」

そう言いながら、ザコ魔物を片っ端から蹴散らしていくセレナ。魔力弾一発で墜ちてくれるからありがたい。

「それで？」

「色々飛び回つた結果、どうやらさつき現れた巨大生物から現れている事が分かつたわ」

「巨大生物・・・？ああ・・・

緊張感ないのが、ラウンズ若年クオリティ。優希はバトントワリングのように敵を切り裂きながら相づちを打った。

「うん。定期的に出しているよ。まあフロイトとスノウが気付いてるかは知らないけど」

「え、スノウ来てんの？」

はやてちやんが驚きながら聞いた。今さらだけど私達暢気に話ながら戦つてるよね。

「うん、袴のバリアジャケット着るようなやつなんてスノウ以外知らないし」

「あ、納得」

「で……どうするの？」

至極真っ当なのはちやんの疑問。セレナはそうねえ、と言ひながら首を捻る。

「私の二龍帝使つてもいいけど、それでもいけるかと言われたら……」

「といつかこの世界のマスク!!」嚙き付けられるわけにはいかないしね

「いや手遅れやつて」

はやてちやんはなにこうしたの、といった顔をする。ヒ、その時。

『おい、聞こえるかみんなー!?』

「京谷ー?」

「隊長ー?」

我らが救世主、京谷君から通信が入った。

『良かつた……生きていたのか』

「 もひるんですよ」

「 京谷くんこりなんんで「ひらりがくばると野」つへ。」

「 「 やつ きまでへばつてたでしょ」」

「 あ・・・命ちゅんにセレナちゃん、それは言わんとこでえな

はやてちゅんは困った表情をしながら両手を合わせてせがむ。
私はそんな優しくないですよーだ。

「 それで隊長は今どうじゅう?」

『 ああ・・・でかいやつの田の前だ』

えー。

I view kyo yao

へ・・・これだけでかいと笑えてくるな。

「 今私があいつに思つたこと思いましたわね」

「 ベ、別にいいだろ! ? 一応初対面なんだから」

「 笑いとしては失格です」

「 おまつ、笑いはどうねえよー?」

「 あなたが反則的な強さですからハンデとしてボケるべきですわ
「 お前どっちの味方だ! ? つかフロイト俺見てドンマイみたいな顔

するな! ! 悲しくなるから! !」

「 来ますわよ」

「 「 うわああー! ?」

んな言い合いでしてゐ内に、的の魔力弾が異常な量で迫つてくる。

「チツ」

俺は防御フィールド”^{イージス}絶対防御圏”を展開する。こいつなら殆どの攻撃は . . .

カシャン . . .

「な！？」

”絶対防御圏”が割れた。さすがに油断していたので、急遽かわす。

「なら . . . 破道の六十三、雷吼砲！！」

放射状に拡がる砲撃、雷吼砲で魔力弾を片つ端から . . .

「なんで撃ち落とせないんだ！？」
「知りませんわよ！！」

三人してふわりふわりと回避し続ける。これでは全く埒が明かない。そしてそこへ通信に入る。

『京谷ツッ！！』

『一騎か！？浦原さんも！！』
『いいか . . . よく聞いてくれ。そいつの魔力弾は . . .』

俺や同じく通信を聞いている一人も生睡を飲む。そして一騎は口を開く。

『全ての魔力を打ち消す、あるいは相殺する』

「 「 「 「 ! ! ? 」 」

魔力を打ち消す。つまり、魔力によって生成されたものは全てあの魔力弾には無効と言つことだ。

「つて勝てねえじゃねえか口リコン一騎！」

『俺にキレんなハーレム隊長！』

「ああ！？まだハーレム作つてねえよ！？」

『まだなのかよ！？作る気満々じやねえか！？』

『いいじやないか、男の夢だろ！？』

『だから後で苦労するんだよテメエは！？』

『つかさつきからタメ口だな！？』

『良いだらうが、同い年なんだからよ！？』

『知るか！？敬え！？』

『なんだと！？ラ！？』

『『 』』 メンチの切り合ひ

『口喧嘩はその辺にして . . . 直接叩けば問題ないっス』

それを早く言えよ。なぜかすぐ疲れた気分だ。

『いや、笑いは必要だと思つんでww』

『てめえ . . . 』

『それより、あれだけでかいっスから硬さも相当っス。あれを叩き斬れるほどの破壊力を秘めた武器が . . . 』

『ある』

俺は断言した。俺が知り得る中では世界最強である、一本の剣を。

『 . . . エアカ』

『ああ』

これは一ヶ月前に俺が本物にした、乖離剣工ア。こいつなら斬れるはずだ。

俺は直ぐ様トレースし、右手に握った。

『へえ・・・世界最強であるだけ、禍々しい魔力放つてゐるスネ

貴輔は誰に言つてもなく咳く。

「で・・・一刀両断か?」

『まあ・・・ですかね』

「了解。スノウ、フェイト!..!』

俺は同じく魔力弾の嵐から逃げ回るスノウとフェイトを呼び出す。

『な、なんですか!? (ハアハア)

『きょーやあー、私もう・・・(ハアハア)

やばい、かなり無理させていたみたいだ。可哀想なので、手短に用件を伝えることにした。

「いいか、おれがいつせーの一、つたら一騎当のところ逃げる

『はあ!?』

『『え、ちょ、きょう・・・!..』

『せえー・・・のう!..!』

『『『京谷のバカあ!..!』』』

三人の罵倒が見事に重なり、同時に俺はデカブツの元へ向かい、ス

ノウらは一騎らの元へ飛んでいった。

・・・といふかなんでバカとか言わぬきやならないんだよ。

まあそんなこんなで、デカブツの目の前に来た。デカブツは俺を緩慢な動きでだが、しつかりと俺を見据えてくる。

「へつ・・・もう！」までくりやあ下等神並だな

存在するだけで押し潰されそな程のオーラが俺を襲う。並の魔導師なら当てられただけで気絶モノだろう。

俺はエアに魔力を込めて、敵の出方を伺う。

『ツー！京谷、下がりなさい！』

スノウが警告を発してくる。恐らく、この魔力の奔流と関係があるのでだろう。

だが、こんなもので動じるはずがない。

魔力の装填を終えた俺は大きく飛び上がり、デカブツの上空に迫る。

「天地乖離す・・・開闢の星ツー！」

そして、頭のてっぺんから思いきり両断しようとそのまま斬り下がる。世界最強であるこの剣の一閃は瞬く間に敵の体を裂いていく。そして。

ズウウウウン・・・

一刀が地面まで降り下ろされたとき、敵は真つ二つになり左右に倒れる。そして俺はすぐにその場から離れ、エアを担いだ。

『や・・・やりやがつた・・・』

『うわあ・・・』

『唖然とするしかありませんわね・・・』

俺の荒業にあんぐり口を開けたままの一騎たち。しかしあつた俺も驚きの破壊力だな。

『たいちょー、雑魚片し終わつたよー』

「お、命たちもお疲れ」

『うう・・・京谷くん疲れたあ・・・』

「後で休めばいいだろ」

「あはは・・・」

命たちも周りの雑魚敵を片し終えたようである。しかし、倒して油断していた俺に凶刃が向けられる。

『京谷サン下ーー』

「なー?」

突如伸びてきた触手を切り払いながら、俺は距離を取る。下をみやると、先程倒した魔物がただの黒い塊に変わっていた。そしてそれはみるみる内に変形し、人形で人と同じくらいの大きさ、両腕は鎌鼬の「ごとく刃となつていた。

「形態を変えたのかよ・・・いいぜ、来な

『待ちなさい』

「「「ーー」」

突然頭に響く声に全員が驚く。全員に聞こえたと言つことは全員に

向けられたのだろう。

そしてその声はやがて、直接聞こえてきた。

「お疲れさま、奏つちゃんの騎士たち。」
「こいつは私に任せな

俺の肩に手を置きながら言つたのは昨日俺を押し込んだ女だった。

「あ、あんたは . . .」

「昨日ぶり . . . 時間にして20時間50分27秒ぶりだね、少年」

「無駄に詳しいな」

「あつはつはつ」

女はにっこりと笑いながら言つた。前会つたときと違い、フードを脱いでいた。

整つた顔立ちで栗色の髪、そしてフェイントと同じツインテール。勝ち気なツリ目に、檸檬色の瞳。

そんな美少女を思わせる女は向かつてくる敵を軽く一蹴して大きく吹つ飛ばす。

「さて、約束だから私の名前を教えてあげる。私は、下坂魅音。よろしく、京谷くん」

「魅音 . . . ジヤああんたが . . .」

「そ。私がかつて魔力EXを初めて取つたエースなのだよ」

「だけど若いな。なんでだ?」

「それは秘密。さ、分かったならさつと安全圏へ行く!」

「な!? 何いってんだよ! ! そいつは . . .」

魅音はやれやれと首を振りながら、嘆息する。

「分かつてないなあ。残念ながら、今はまだ”私の方”がボウヤより

強いから

ぼ、ボウヤ・・・。そこまで言われなきやならないのかよ。

「・・・分かった」

そう言って、俺は安全圏まで下がった。

-view mission -

あちゃー、ちょっとプライド傷つけちゃったかな。私もそこ今まで言わなくても良かつたね、うん反省反省。

さて、京谷くんを離れさせたはいいけど、いつがどんな動きをするかで私の戦闘スタイルは変わる。とりあえず先制しとくか。

「行くよ・・・ガンスレイヴ！！」

私の呼び掛けに応じて、周辺に私の魔力で造り出した自律兵装が12基現れる。細かい魔力弾の他に単独で突っ込まれられるスパイク付だから困ったときに便利だ。

「さあ、行きなッ！！」

そして手掌で操り、敵へ向かわせ集中砲火を浴びせる。そして私はさらに魔法詠唱に入った。

「穿て稻妻・・・”ライジングショット”！」

私が一番最初に編み出した直射魔法を左手つ腹に撃ち込む。そしてさらに接近して。

「パルマ・・・フィオキーナツ！！」

これまた私が編み出したゼロ距離魔法。これは集束砲撃に使用する魔力を極限かつ短射程にのみ効力を發揮するように圧縮した正直ミッド式には無駄な魔法だ。ただし、非殺傷を解けば効力範囲の関係で確実に撃墜出来るため、狭い空間での戦闘では私的に重宝する。しかし。

「やっぱ簡単にはいかないかあ・・・」

結構な痛手を与えたが、さすが”私の魔力から産み出された”魔物だ。無駄に強い。

「・・・けど、勝てるなんて思つなよ」

私は右手にスプリガノを握った。同時に鎌鼬を振るい、私に攻撃してきたので”フリット”で間合いを取る。

そしてスプリガノをザンバーモードに切り替え、近接戦闘に対応できるようにする。

「・・・」

そして敵は二タニタ笑いながら迫つてくる。次いで振り下ろされた左腕を紙一重でかわし、骨盤の上を両断してまた離れる。

無論超速再生で無に返されたが、確実にダメージは蓄積している。

「さ・・・来なよ。まだ本気出してないから」

そう言つて、私はザンバースプリガンに魔力を溜める。

私の戦闘スタイルは基本的に何でも御座れだが、一番得意なのはガンスレイヴで攪乱してからザンバーで片つ端から斬り伏せる戦法だ。私程になれば、一瞬で行路をトレースできるから意外と効率はよい。刹那、魔物が消え私の背後に周り首に鎌を宛がつ。くつ、無駄に速いじゃないの。

しかし、さりに私はそのコンマニ柄の間に背後に回り込み首を切り落とす。．．．無論回復されるのだが。

「ヒーヒだよ！..」

私は上空へ飛ぶ。もちろん、追いかけてくる。そこで私は急にバッシュステップをかけて、背後を取つた。が、反応がいい。直ぐ様敵は振り返つて右腕を後ろに払つてきた。

それを私はザンバーで受ける。計算通り！！

私はザンバーを形成する魔力波を自身の技能の闇変換でスカーレットに染め、そのまま振り下ろす。

「クレッセント．．．クラッシュシャアアアア！」

クレッセントクラッシュシャーは私の”近接攻撃”最強の技だ。

そこから放たれる、ザンバーと同じ色をした三日月状の斬撃は敵の右半身をバツサリ切り裂いた。

あ、もちろん超速再生で元通りになる。その超速再生による戻りが若干遅くなつたのを私は見逃さなかつた。

「バインドッ！..」

あらかじめ詠唱しておいたバインドで魔物の体を絡め取る。尋常でない固さのこれを疲弊した状態ではまず破壊できない。バインドを壊そうともがく敵に私はゆっくりと近づき、下側へ回って通常形態に戻したスプリガンをあてがつた。

「よく頑張ったよ。けど……”冥界の女王”の敵じゃなかつたね」ハテス・クイーン

スプリガンの先端に魔力を込める。

魔物はこいつはヤバイと本能的に悟つたのか激しくもがき出す。もちろん、逃がす気はない。

やがて、魔力は集束を終えた。私は軽く魔物の体にスプリガンをめり込ませ、解号を唱えた。

「ライオットバスター、シユート」

刹那、先程この魔物が湯布院を割つたビームを越える破壊力を持った集束砲が魔物を塵に返すのだった。

-view_kyo_ya -

「え……えげつねえ……」

俺は先程の時間にして一分前後の戦闘を目の当たりにして、啞然としていた。

正確かつ隙を与えないコンボに多彩な攻撃。

さらに僅かな攻め時のサインを見逃さず、確実に撃墜する決定打の保持。

「化け物じゃないか……！」

そんな俺の戦慄を余所に、魅音はすつきりとした顔で俺に近づいてきた。

「ふふん、どうよ」

「……凄いな」

「でしょ？」

魅音は勝ち誇った顔で笑う。確かにそうするだけの実力はあった。しかし、少し解せないことがある。

「どうして……40年前のエースがこんなに若々しく……『魅音サン……?』

しかし、貴輔の乱入に俺の言葉は遮られる。

魅音は貴輔を懐かしむかのような顔をしていた。

「久しぶり、貴輔」

『……脱出来たんスね。どうですか？久々の人間界は』
「んー、悪くないよ」
『そうですか……』

貴輔はそれきり、物憂げな表情をする。

「ガーネットやロックは元気？」

『大丈夫っスよ。元気にしてます』

「そつか……良かつた。……つと、そろそろ行かなきや

魅音はそつ言うと、自身に転送魔法をかけた。魅音の体が光に包まれ、呑み込まれていく。

「待て！…アンタはなにを言いたいんだ！？」

「私からは時間の都合上言えないわ。詳しくは…・・・奏つちゃんど、貴輔に聞いて」

魅音の声が遠くなり、やがて消失した。

『浦原・・・』

「浦原・・・、後で聞かせてくれないか？局長と一緒に『

『・・・もちろんっスよ。奏サンもこの世界に呼びます』

時間にして一時間弱。湯布院を襲つた惨劇は大きな爪痕を残して幕を引いたのだった。

さらり「おお～・・・。謎が謎を呼びますね」

作者「んだねえ。でも・・・これを読んでくれてる人は興味持つて
読んでくれてるのかなとす」く不安ね」

さらり「じゃあ読者さん聞いてみます?」

作者「いやいや、それはさすがに・・・でもレジューはす」く励み
になります。なんか適当など」は・・・見逃してください」

さらり「それでは、読んでくれた人にはいっぱい感謝! 次回も見て
くださいね。明日の未来も、撃ち抜いて見せるッ!!」

作者「・・・何のネタ?」

Rewrite7・奏の記憶 前編（前書き）

作者「さて、今回も前編後編構成になります」

一騎「いちいちタイトル考えるのかつたるいからとか言つたら殴るぞ」

作者「いやいや、わざわざ凝つたタイトルにすることはないでしょ？わかりやすさが大事なの。では第七話、お楽しみください」

- view kazuki -

さて、ここは悠水亭。

あんだけの騒ぎがあつたにも関わらず、俺達を泊めてくれる宿主の肝つ玉振りには感服である。

「 . . . 来ましたわ」

スノウが転送魔法を感じする。すると空間が縦に裂け、中から俺たちの部隊の真の指揮者、堂本奏が現れた。

「ふう . . . 何度やつても疲れる . . . 皆、お久しぶり」

奏は優雅に一礼して、用意された座布団に座る。そして辺りを見回し、貴輔の所在を確認するとようやく口を開いた。

「貴輔 . . . 五年ぶりね。元気にしてた?
「もちろんっスよ、奏サン。アナタこそいつもお疲れさまっス
「ありがとう、貴輔」

奏は優しく微笑む。どうやら彼らは並々ならぬ関係のようだ。

「局長、そろそろ . . .

京谷が急かして、奏は我に返る。そして話始めた。
皆は真剣に耳を傾けよつとする。

「まずは、私達の事を言わないとな。私と貴輔……ここにはいな
いけれど、ガーネットとロック、そして魅音は管理局では無敵の五
人とされた」

「ガーネット……ガーネット・ティル?」

セレナが食いつく。

「うん……管理局では歴代最強の召喚士で、魅音の後を追つて
EXランクを勝ち得た天才……」

「やっぱりかあ……私の目標なんだよね」

セレナはふふふ、と笑いながら言つ。

ガーネットは記録では龍神バハムート零式、機械神アークを操る”
女帝”と呼ばれた天才だ。

そしてロック・パスカルは世界を股にかける伝説の盗賊で、近接戦
闘において無類の強さを發揮したそうだ。

いつの間にか管理局に協力するようになつたとされている。
そして奏や貴輔も凄腕の魔導師だった人達だ。この五人は40年前
の管理局の切り札だったのだろうなと言つことを改めて知つた。

「私達、実は魅音と同一年の52歳……」

「「「嘘!?」」

「嘘じやないつスよ」

貴輔は奏除ぐ全員の言葉を否定する。

「私たちにも、呪いが掛けられていたから……」

「呪い……?」

「うん……皆には、この事を話さなきやいけないね……」

奏はそつまつと、慈しむかのよつに過去の話を始めた。

- E P I S O D E : m i o n - s h i s t o r y (v i e w k
a n a d e) -

新暦0029年11月末。

私達は12歳。

この時から既に私、魅音、貴輔、ガーネット、ロックは周りを超越する戦闘能力を有していた。

高速機動による遊撃の私、近距離戦闘のプロフェッショナルのロック、あらゆる研究から導きだした有効的な戦い方をする貴輔、遠中近どのレンジでも無敵を誇る魅音、一騎の究極召喚を使用するガーネット。

この時既に私達は仲良く魔力ランクSSSを獲得しており、管理局最強の名前を欲しいままにした。

「こら貴輔ッ！…また部屋散らかして……またワケわからないもの作ってるの！？」

「べ、別にいいじゃないっスか…」

「まあまあ、魅音も許してやりなよ。浦原は研究好きなんだから…」

「…」

「そうだよ、魅音。一応役に立つんだしや」

「そ、それはそうだけど…」

魅音はやれやれといった感じで首を振った。
それを横目で見ていた私はくすくす笑う。

「…なによ」

「ううん、なんでもない」

「なんでもないのに笑わないでしょお・・・？」

「」「怖いよ魅音・・・」

私達は皆似たような境遇・・・つまり、両親がいないというこの年齢にはなかなか過酷な状況に置かれていた。

それ故にひかれあつた私達は、いつの間にか五人で一部屋を共同で使い、いつも一緒に訓練や仕事に励んでいた。

「ねえねえ、夕方に訓練し終わつたら三連休だよね?」

ウキウキしながら魅音は言つ。

「やうだね。私達にしては久々の連休だものね」

ガーネットはようやくか、と言つた表情を浮かべる。12歳ではあるのだが、実力ゆえにたくさん仕事が舞い込んでくるため中々休みがない。もちろんこんなことでへばる私達ではないが、やっぱり休みは欲しいところである。

「アタシはまた研究したいっスよ・・・」

「つか暇さえあればいつも研究してるよな、貴輔」

「アタシの趣味ですから」

貴輔は一〇一〇しながら答えた。私はと言えばいつも一歩後ろから微笑ましく眺めていたものだ。

「ひらひら奏、あんたもいつも後ろから付いてくるだけじゃダメなのよ?」

「つづ・・・解つてるけど・・・」

「解つてるなら割り込む!-!」

「ひやあー?」

魅音に引っ張られ、私は皆の輪の中に放り込まれる。

「はは、奏いつてもいいって引っ張られてるな」

ロックは可笑しそうに笑いながら言ひ。

図星なので私は全く言い返せない。

「うう・・・」

「”非情の天使”も、”冥界の女王”^{ハテス・クイーン}には形なしよね

「あんたらも勝手に私の二つ名つけないの」

「いいじゃないスかー、魅音サンは闇魔法使うんスからお似合い
つスよ?」

「まあ確かに私は闇使えるけどさあ・・・」

魅音は気恥ずかしそうに頬をポリポリ搔きながら言つた。

まあ女王というよりかは鬼だよね、魅音の場合は。

「まあいいや。明日からどうするの?」

「折角だから体動かしにいかないか?バッティングセンターとボーリング」

「ロックは体動かす事しか能がないのね・・・」

「ううせ」

なんやかんや話している間に、私達の部屋に着いた。

「あー疲れた。先シャワー浴びるわー」

入るや否や豪快に制服を脱ぎ捨てながら魅音はシャワー室に入つていく。

「 . . . 「 . . .

「 魅音サンには恥じらいがないんスかね . . . 」

「 別にまだ気にするような年でもないだろ、まだ貪乳だし

「 だつ誰が貪乳よ！？」

「 いや . . . この年齢なら妥当 . . . 」

シャワー室から魅音の怒鳴り声が聞こえる。思えば魅音は地獄耳だつたつけ。

「 飯食うとやることないよな . . . 」

誰に言つてもなくロックは呴ぐ。確かに管理局の設備じゃ子供達は娛樂に困る。なので私達の遊びは必然的に体を動かす遊びになつてくるのだ。

「 . . . ツイスターゲーム？」

「 いつの時代の人間なんスかガーネットサン

「 ジゃあアレか？みおから始まるリズムに合わせてーつてやつ」

「 だからいつの時代の人間なんスかロックサン」

「 ジャー、ふーえーるーアハツハハツてやつ」

「 私らは トビメンバーじゃない . . . 」

なんでこつもはね ビから離れないのだろうか。と言つた時間軸的には私たちが開発した的な感じのノリだ。

「 ジゃあアタシの取つて置きを使うしかないじゃないっスか」

と言つて貴輔が取り出したのは。

「はっ、奏また借金かよ！」

「うう . . なんで仕返しするの . . .」

「ガーネットは手堅いっスから . . .」

人生ゲームだつた。無論、貴輔が造り出したバーチャル筐体である。

雀荘の雀卓より一回りほど大きい程度のため、五人部屋である私達の部屋では特に場所は取らない。

ちなみに中のハードウェア（カートリッジ式）を入れ換えれば麻雀や桃電なども出来る超万能な機械だ。その時は各自用の操作盤を取り付けなければならぬが。

「あ、私上がり」

しばらくして、魅音が一番乗りを宣言する。見れば、調度決算から一発でゴールしていた。

「 . . 何やつても無敵だね」

私はなんだか切ない気分となる。

「い、いやこれは勝負の世界だし . . .」

「そ、そだつて！－たまたまだよたまたまつ」

「いいもんいいもん . . . 私は貧弱でべつたんこで役立たずだもん . . .」

「あーあ、魅音サンのせいつスね」

「私！？」

ま、なんだかんだで遊び倒して皆は爆睡し始めた。みんなのよつこ
騒がない私は、まだ眠くならない。

「 . . . 23 : 11 か」

私は机に掛けていた陣羽織 . . . 別に戦いに着けないが . . . を羽
織つて部屋を出た。

目指す場所は訓練用湾岸都市があるエリアだ。あそこは意外と静か
な場所なので、私のお気に入りの場所もある。

「そろそろオリオンが見えてくる季節かあ . . . 冬の星は綺麗」

誰に言うでもなく、私は呟く。自然を慈しむのは、私が管理局に入
つてから覚えたことだ。というか、血生臭い戦場を翔ける私にと
っては非常に大切なことである。

私が、護るべきモノを忘れてしまわないように。そして、また立ち
上がれるように。

「おーおー、また一人で抜け出して！…」
「ひややああ！…」

突然背中に現れた魅音の声に私は情けない声をあげてしまった。

「な、なんで後ろにいるのよ…？」「に、スニーク…？私拐われる！…？」
「落ち着け落ち着け」
「いー やー 拐われるー！…？」
「ああもう可愛いなかなでん！…」

閑話休題。

「で？…どうしてついてきたの…？」
「なんでつてそりや眠くないからどうしようかと悩んでたらかなでんがどこか行こうとしてたから、面白がつて…」

えー。

「ま、いいじゃない。あ…なんか飲む？買つてくれるよ」
「じゃあ…ミルクセーキ」
「オッケー。じゃあ買つてくれるよ」

そう言つて、魅音はここから五分歩いたところにある自販機へ向かつた。…もちろん瞬動連発によつて一分とかからなかつたが。そして、程なく魅音は飲み物を買つてきた。

「はい、かなでんの好きなキャラメル味」
「ありがとう . . .」

魅音からミルクセーキを受けとり、プルタブをあける。
魅音はなにを買ったのだろう . . . ちらりと見てみる。

リリカルスウェット

えーっと . . .

「ん? なに?」

「な、なんでもないよつ」

一度ベンチに缶を置き、目を擦る。そしてもう一度魅音の飲む缶の
銘柄を見る。

リリカルスウェット

「ネタだ . . . 絶対ネタだ . . . ! !

「どしたん? その”リリカルスウェット”ってなに! ? 作者のネタ?」

”みたいな顔は”

「え・・・えつと、魅音の突っ込みはよく分からぬけど、そう言う世界の理に触れることはよした方がいいと思つ・・・」

魅音の台詞はいつも危険だ。

「ま、いいじゃん。味はポリだよ」

「そんなことだと思つたよ」

所詮作者の知識や捻りはその程度だ。

とりあえず置いていたミルクセーキを口に含む。甘つたるい味は本当は苦手だけれど、私はなぜかこのミルクセーキだけは好きだった。

「ふう・・・そう言えばもう2年なんだね・・・」

魅音はふう、と息をつきながら呟く。少し肌寒い風が魅音の一いつに結われた栗毛をそつと撫で、そよそよとなびく。その後ろ姿は、普段無敵の彼女が、本當は儚く壊れてしまいかねない存在なのかもしれないことを指しているようだった。

「そうだね。短期プログラムからの付き合いだつけ」

「そうそう、最初の任務のときにロックを保護していつの間にか管理局にいたしね」

「なんか凄く昔のように思えるな・・・」

私は空を見上げながら苦笑いする。魅音の破天荒に皆がついてゆき、そして苦楽を共にしてきた日々。それらは私の一番大切な思い出だつた。

「そろそろ戻るつか?」

「うん」

各自飲み干した私たちは立ち上がり、ゴリラの箱に缶を捨ててから部屋に戻る。

明日も楽しく口に出来たらいいな。

そんな、淡い期待を抱いていた。

* * * * *

「なんか偉く普通な話だな」

京谷は奏の話を聞いて率直な感想を言いつ。

「それは、どんなことにも起承転結は要るから。私が話したのはまだ起

奏はしつつと受け流す。真剣に話を聞いていたのはたちは、

「そうなんだ . . .」

「続き気になるね . . .」

「色恋とかあるのかな?」

等と、非常に关心を抱いて聞いていた。

「京谷もこれくらい素直な感じですの . . .」

スノウが京谷の態度を見て、やれやれと言った表情で嘆息していた。
うん、それは同感する。

「で、続きがあるんだろ」「うん、だから続けるね……」

奏は一呼吸置いて、また話し始めた。

* * * * *

そして次の日。ロックの要求通り、バッティングセンターに来ていた。

「魅音、今度こそ負けねえからな」「アンタこそへマやらかさないようにね

二人がなにを張り合つてゐるのかと言つと、ホームラン競争である。私たち御用達のバッティングセンターは通常用と実践用、そしてひたすらかつ飛ばすホームラン競争用である。

ご丁寧にパノラマなので、より臨場感ある打撃が出来る。さらにはこここの常連内では一人の対決はちょっととした見物になつていた。

「嬢ちゃん頑張れよ！」「そつちの君も打ちまくれよ……」

皆の声援を受けながら一人はバッターボックスに入り、構える。どちらも無駄の無いフォームだ。

カキイイイン
キンシ

打撃もどちらも譲らない。そんな熾烈な争いを余所に私たち野球は
べつにい組はのんびりスマッシュピンポンをしていた。

「やうこやさい」

私はバックスマッシュを決めながらパートナーであるガーネットに
問い合わせる。

「なに？」「

ガーネットもまた、動きに無駄のないスマッシュを決めていく。

「なんかつ、変な魔物が観測世界に出回つてゐるらしい」

「あー、聞いた聞いたつ。行方不明者も出たらしいね」

今、管理局では不可思議な事件が起きていた。

観測世界に出現する謎の魔物。特に危害を加えてくるわけではない
が、一部に被害が出だしたために管理局では少し警戒されている。
あっけらかんと話しているのはプレイしながらなので仕方ない。

「もしかしたら私達にも出向命令出るかもね」

最後の球を見事にスマッシュし、最後のゾーンに落とす。まさかの全面ストライクに私は驚いた。

「そうだね……本当ならるのが一番だけど」

「あはは……」

「お、終わつたつスか?」

私たちが打っている間、座つて待つていた貴輔が出迎えてくれる。その貴輔の手にはノートPCが抱えられていた。

「今度は何してるの?」

「いや、アタシの新しい魔法の術式考えていただけつスよ」

そう言つて貴輔はパソコンを開け、プログラムファイルをオープンした。

「まつたくわからん

ガーネットは一発でサジを投げた。うん、私にもさつぱりだ。

「そつスねえ……奏サンの為の技ですよ」

「私の?」

「はい、まあ……昔の文献から引っ張ってきたのを奏サン用に改編するだけですが……。奏サンは天使の血が流れているでしょう?」

「まあ流れはしているけれど」

そうなんです、私は某天使ちゃんよろしく天使の血が流れています。なんせ天界の人間ですから。そしてなぜ私の術式なんだろう?

「これは天界の上級階級にいる戦士が扱える身体強化術です。これを使いこなせば奏サンはアタシたちより強くなれますね」

あつたりと貴輔は断言した。

「実感沸かないけどね・・・」

「あはは・・・」

ガーネットは愛想笑いを浮かべる。私もそれにつられてつい笑ってしまった。

その刹那、私は一瞬だが異常なさつきを感じた。

「ツー?」

「ん? ビツしたんスか?」

不思議そうに貴輔が聞いてくる。ガーネットも「?」マークを頭に浮かべていた。

「いえ・・・よく分からぬけど、一瞬殺氣を・・・」

「殺氣? ああ、アレッスか?」

貴輔がのほほんと指差した先には。

『だらつしゃあ!!--』

『つおお!!--150メートル!?!』

『どつせえええい!!--』

『お嬢ちゃんは151メートルか!!--』

『ガキの癪にやるじやないか!!--』

『はつ・・・負けねえぞ魅音』

『あたしもだよ・・・!』

たしかに殺氣立つてはいるけど。

二人の殺氣なら普通にスルーできるレベルだ。人一倍感覚に敏感な私が感じ違えるはずはない。

「奏考えすぎだよ。疲れてるんじゃない?」

「でも . . .」

「まあまあ。何のための私達かな?」

ガーネットが胸をトン、と叩きながら言つ。

確かに私達S S Sランクが五人いるのだ。そういう意味ではなんどでもなりそうな気がする。

「だよね。私も考えすぎかな . . .」

私は情けなく笑つた。そして再び羽を伸ばしにガーネットとペニンポンやらなんやらを疲れない程度にやつていぐ。

私は . . . の判断を一生悔やむことになるなんて思いもしてなかつた。

市街を歩き回り、遊んだといひで夕食とした。

場所は地下市街にあるうどん店。手打ちでコシがあるから美味しい、といつのは貴輔の弁。

「いやあー、遊び倒したねえつ

魅音があつぱれあつぱれといった感じで言つ。

「アタシはしばらく勘弁してほしいですねえ . . . 」

「私も . . . 」

「なーにいつてんのよ貴輔に奏。一番出不精なのは貴方たちなんだからたまには外出するのー！」

「じゃとばかりに魅音はお姉さんふつた口調で演説する。

対する貴輔はなんとも形容しがたい嫌そうな顔をしてくる。

「えー . . . 」

「えーじゃなーつ。大体男がえーゆうても可愛くないわよ」

「解つてますよおそんな事」

「離してロック！一回シバきあげないと氣が済まないのー！」

これははいはい、お姉ちゃん解つたからもうこいよ的な感じのアレだ。貴輔も魅音の扱いに慣れてきている。

「も、もおー帰るわよーーー！」

顔を真っ赤にして店の外に向かつ魅音の後を連れだつて私たちは付いていく。そして地上へと続く階段を一番最初に登りきつた魅音は不意に立ち止まる。

「どうしたの？」

そのすぐ後ろにいたガーネットが肩口からひょっこり顔を出す。そして同じく固まる。

「「「」」」

私、ロック、貴輔は首をかしげる。そしてその後ろから様子を伺う。

「　　」

暫し硬直。

「あつはつはつ、まさかまさか？」

「そうそう、あんだけはしゃいでいる間に地上が何故か壊滅してて魔物がたくさんいて、それを知らずにノコノコ出てきた私達の前に待ち構えて今まさに殺そうなんて・・・」

『キシャアアアアア！…』

グシャツ

殺られるわけないじやないですかー。私達SSS戦隊ですよ？

ロックの魔力弾で魔物は爆散し、数瞬遅れて私達はバリアジャケットモードになる。

「・・・たく、洒落にならないわね。全員でどうあえず適当に潰して回るわよ」

「　　」「了解」「　　」

魅音の合図で全員が適度に広がってこの都市で一番大きい広場まで走り出す。

その間、魔力の波動を嗅ぎ付けて全方向から魔物が襲いかかってくる。

「邪魔だよ、アンタ達！！」「でやああー！」

魅音とガーネットが僅か1秒以内に計数百の魔力弾を形成し、撃ち出す。無論敵は全滅。

更にあれだけの魔力弾を形成しながら建物にそれ以上の僅かな破損を与えない正確すぎる誘導技術。

本当に頼もしい限りだ。

「さて・・・アタシも見てばかりじゃつまらないっスね」「だな」

貴輔とロックは何かを申し合わせると同時に瞬動をかけ、前方にいる敵の群れに突っ込む。

「カリーシュダイヴッ！！」「紅ノ爪」

蟻に対する巨像の一撃の如く、桁違いの破壊力を込めた一撃を叩き込んでいく。

「ひゅーつやるねえ」「まだまだっスよ」

そんな無駄口を叩きながらみるみる内に敵を潰してゆく。そしてあらかた倒したところで、私達は広場に着いた。

「ふうっ！大したことなかつたね」

「そろそろ管理局に連絡入れた方がいいんじゃないかな？」

ガーネットの言葉に応じ、私は端末を呼び出し本局に繋いだりする。

「あれ . . . ?」

「どうしたつスか?」

私の間抜けな声に貴輔が聞き返す。

「本局に通信が繋がらない . . .」

「うそお? 見せて」

半ば信じていない魅音が貴輔を押し退け私の端末を覗く。しばしそれを見つめてから、

「確かに繋がってないねえ . . .」

と、呟く。今の時代ならAIがそういうのを管理してくれるが、この時代は本当に魔力を行使するための媒体 . . . 例えるなら某子供魔法先生の指輪みたいな機能しか果たさないので。

昔の魔導師が反則気味に強いのには、自分自身がデバイス並の演算能力を備えている所以だ。

ちなみに、今のAI管制システムを確立したのはこれから10年先の貴輔である。

「どうしてやろ . . .」

などとあれこれ議論する。

私はちょっと焦るけれど、多分管制システムの異常か何かだらう。そんなのんきなことを考えていた私に、昼間のあのさつきを再び感じるのである。

「ツー！」

「か、奏！？」

「かなでっちゃん！？」

異様な冷たい殺氣にあてられ、私は昏倒しそうになる。

この前よりも殺気が近い。

しかも・・・近づいてきてる・・・！

これはヤバイ。危険だ。逃げさせなきや。

頭の中で警鐘がやかましく鳴り響く。しかし、声に出せない。周りのみんなは気づいていない。いや、”私にしかわからないよう”にしている”のかもしれない。

「まさか、五人とも居たなんてね。まあ、いいや。皆、消えてもうから」

はつきりと声が聞こえ、全員がそちらを向く。

そこには、私達と同じくらいの大きさの詰め襟を着た子供と、その従者であろう桁違いの魔力を持つ魔物が三体居た。よく見ると、少年の頬にはそれっぽい紋様が入っていた。こいつも魔物なんだろ？

「」

「一人は殺氣だけで立ち上がれないか・・・じゃあ、邪魔な方から」

そう言って、少年は右手の人差し指を私に向ける。その刹那、魅音が割つて入りシールドを開いた。

そのまた刹那、大きな爆発が巻き起こる。

「残念だつたね。見えてたよ」

魅音は口の橋を釣り上げて笑つた。
状況についていけなかつた他の三人もようやく我に帰り、デバイス
を構える。

「通信妨害してるのは君だね？」

「そんなことが気になるのかい？それより自分達の心配をするとい
い」

そして再び魔力弾。今度はロックが魔力弾で弾き、別の場所に落と
す。

「なんだ、大したことじやないな」

「落ちた場所を見るといい」

そう言つて少年が指差した先・・・魔力弾が落ちた場所が完全に石
化していた。

「これは・・・」

「確かに自分の心配をしなきゃいけませんね・・・」

ロックと貴輔は少し顔を引きつらせる。

「まあいいじゃない。とりあえずぶつ飛ばしましょ」

その自信はどこからくるんだか。その間になんとか和らいだ私は立
ち上がり、ハンドソニックを構える。

「いくよ、監」
「「「「つしゃあーーー。」」」

死闘が、始まる。

京谷「どうでもいいがなんかEXランクのやつにっぽこ出てこなかつたか……？」

作者「仕様です……ところのは[冗談で、す]まよ——
しだけ、ネタバレすると。京谷達を出すにあたってこの展開はすでに考えてました。ツバサ・クロニクル風に言つなら”干渉させたことで道筋が変わった”みたいな」

京谷「あ、ああー……なるほど」

作者「それでは読んでくれた方に無上の感謝を。では——！」

Rewrite:8 奏の記憶 後編(前書き)

作者「えー・・・泊まり仕事だったので更新できませんでした。日からは旅行なので、できる限り更新していきたいと思います。では、後半始まります」

戦闘開始から約一時間が経過した。お互に大きな口を叩きながら、かなり消耗していた。

「つーーー！」

魅音は少年の攻撃を大きく避け、魔力弾を数発撃ち込む。次いで、ザンバーをスカーレットに変え斬りかかる。

「 . . . つ」

少年は無言で受け止めるが、さすがに重いのか歯軋りしている。その膠着状態を破ったのは魅音だった。

「 . . . 何をしている？」

少年は魅音の行動に疑問を投げ掛ける。魅音は、少年の腹に手を当てていたからだ。

「なあに、すぐわかるよ」

その言葉を言い終わらない内に、少年の体に形容しがたい程の強烈な衝撃が走る。

「カハツ . . . !！」

少年は体をくの字に曲げながら絶息する。

「はあっ……」

さうに回し蹴りでふつ飛ばし、さらに背後に回り込んで待ち構える。

「エメト……アッシャー……」

そして砲撃。これは大ダメージを与える一撃だ。案の定、少年はボロボロの姿となる。

「……」

少年はたじろぐ。そして、右手に魔力を収束させ始めた。
魅音はスプリガンを構え直す。

「ブレイクバスター……シユート」

少年の砲撃。威力的には魅音のエメトアッシャー程度だろう。砲撃は真っ直ぐ魅音へ向かう。

「はっ、あたるはずないわよ……」

魅音は余裕を持つて、飛び上がって回避する。だが、少年は鼻で笑つた。

「避けたつもりかい」

そう言つて、手掌を魅音へ振る。すると、着弾した場所から小さな魔力弾が飛び出して魅音へ向かっていく。

「つ……？」

魅音は予想していなかつたのか、回避行動に僅かに遅れが出る。それでもなんとかかわしていく。しかしその内の一発が魅音のマントに触れ、マントが石化していく。

「なんの……」

だが、魅音は判断が速い。即座にマントを脱ぎ捨て、さらに残りの魔力弾に対する防御として使用した。

「なかなかやるね。さすがに僕も判断つかなかつたよ
「悪かったわね。けど……これで終わりだよ」

魅音はスプリガンを構え直し、ザンバー・モードにする。次いでザンバーをスカーレットに変え、瞬動で背後に回り込む。

「やあ……」

袈裟懸けに降り下ろす一撃。確実にヒットさせたが、少年の体は石のように碎ける。

「な……」

そう思つたときには、少年は背後から先程の魔力弾を形成して撃ち込もうとしていた。

「ガーデスキル、ソニックムーブ」

それを私がソニックムーブによる衝撃波で、すべて叩き落とす。さらに接近してのハイキック。

「奏ツ！..だめえ！..」

魅音が叫ぶ。私はその声に僅かに気を取られてしまった。

「甘いね」

「くつ！..」

魅音が私にタックルする。私は飛ばされ、私が居た場所には魅音が居た。しかし。

「自分から石になるなんてね . . .」

「あはは . . . だけど、奏つちゃんが石になるより私が石になったほうが都合がいいんだ」

「魅音つ！..」

魅音の体が少しづつ石に変わっていく。だけど魅音はたじろいだ様子がない。むしろ笑っているようだ

「ねえ、どうして私が冥界の女王って呼ばれているか知ってる？」
「君の技能である闇変換からだよ。それをこちらがわからないと？」
「分かつてないねえ」

魅音はため息をつきながら首を振る。同時に、顔の前に自分の手を翳した。

「私が冥界の女王と呼ばれてるのは . . .」

そして、その手をスッと降ろす。そこには、”魅音”はいなかつた。

「冥界の女王」ハーデス・クイーン

「冥界の女王の能力が有るからだよッー！」

魅音の全身に幾何学的な紋様が淡く浮かび上がる。そして魅音の体に憑依し、魔力が爆発的に上昇した。

「ばかな……」

少年はたじろいだ。無理もないだろ？、詰んだと思えばこれほどの隠し玉を持っていたのだから。

魅音の体を蝕んでいた石化は既に解け、石化した部分も元通りに戻つていた。

「はあ……」

魅音の横薙ぎの一撃。少年は紙一重でかわし、飛び上がる。

「つー？」

少年がもと居た場所を見ると、これでもかといつほど強烈な衝撃が打ち付けられたかの如く破壊されていた。

その爆煙の中から魅音がガンスレイヴを携えて飛び上がつてくる。

「奔れ！！」

魅音の合図で一斉にガンスレイヴが少年に襲いかかる。あるものは射撃、あるものはスパイクに、と変幻自在の攻撃で少年を苦しめていく。

しばらく猛攻が続き、やがてその一発が少年に当たり少年はバランスを崩した。

「貰つた！」

そこへすかさず踵落としを叩き込む。少年の後頭部に直撃し、少年は落下する。

だが、まだ魅音の猛攻は終わらない。魅音はガンスレイヴを纏める
と、魔力の収束を開始した。

「面倒だから消えて貰つわ。スレイヴランチャー・・・シユート」

ガンスレイヴの放つ魔力が臨界に達し、少年に向けて放たれる。
高濃度に圧縮された魔力は、少年を消すのにはあまりに強すぎた。
ほどなく着弾し、その衝撃波で周りの建物すら呑み込んでいったか
らだ。

少年を葬つた魅音は、私の元へ降り立つ。

「ちょっと強すぎたかな？」

未だ冥界の女王モードの魅音はあつはつはつ、と笑う。超然とした
威圧感を放つていながらとはいっても、あれから戦闘を呆然と眺めてい
た私はなんだかおかしくなつて笑つてしまつた。

「あ、そつちも終わつた？」

「勝ちましたよ」

「なんとかな」

「ちょっと無理したけど・・・」

他の三人も傷付きながら、携えていた魔物を葬つたようだ。しかし
通信は未だ繋がらないでいた。

「まだ繋がらない？」

「うん . . .」

「となると、外部操作ツスかねえ . . .」

貴輔は顎に拳をあてながら呟く。

いろいろ弄つてみたけれど、やはりどうにもならない。時間が経つか管理局が見つけてくれるのを待つしかないと思い始めた頃、今度は別の魔力の奔流が来るのを感じた。

「なつ、まだ来るのかよ！」

「知らないつスよ！？」

「 . . . 来る！…」

ガーネットが指差した先で、転移魔法が発動していた。やがて空が歪み、その中から夥しい数の魔物が現れる。

「こ . . . 」れは . . .

「なんなの . . . 」の数 . . .

私たちはその数に戦慄する。パッと見ただけでも万は軽く居るだろう。

「ど、どつするのよ！…さすがに消耗した状態じや . . . 」

「 . . . 魔法で逃げる」

「 「 「 !? 」 」

私の提案に全員が振り替える。全員が呆然としていたが、やがて我に帰ったガーネットが反論してきた。

「な、なに言つてるのよ！？通信が繋がらないのに……」

「魔法で入つてこれるなら、魔法で逃げられる筈。さすがに転送先が観測世界や管理世界になる可能性は高くないけれど、それ以外の世界でも休憩さえ取れれば跳躍できる」

自分でも驚くほどの饒舌で、作戦を伝える。みんな半ば信用していない目だったが、程無く真剣のそれと変わらなくなつた。

「成る程ね、確かにやる価値はある。けど五人同時の転送だと少し時間掛かるよ」

「それは私のガードスキルで防ぐ。転送魔法はたくさん魔力使うけど、五人の魔力があれば問題ない」

「……奏つちゃんがそういうならやりましょ。すぐに円陣と術式に」

「うんっ」

私は二、三歩離れるとハンドソニックをクロスさせ、魔法陣を展開させる。そして私の魔力が噴き上がり、やがて大きな竜巻へと変貌していく。

「ガードスキル……ファザーストーム」

私は解説を唱え、風の結界を展開した。これで2分は最低でも持つ筈だ。

「さて……行くよ」

時間は残つていない。結界の完成を確認すると、ガーネットを中心になつた。

「 」

ガーネットが転移の始動キーを唱え、私たちの魔法陣の周りに幾何学的な文字が浮かび上がった。そして、ガーネットの儀式は続く。

「魔力を込めて」

私はタイミングを見計らい、全員に指示を出して魔力を解放させる。ここまでよかつた。

「 . . . 嘘！？」

ガーネットが突然詠唱を中断した。

「どうしたの！？」
「全員を転送するだけの . . . 魔力がない . . .
「 「 「 なつー？」」「 」

なんといふことだ。私達の間に戦慄が走った。

「じ、じゃあどうすればっ
「誰か一人居なくなればなんとか . . . でもー！」

皆がそんな簡単に自分の仲間を見捨てられるものか。ガーネットはそう言いたいのだろう。だけど、結界が持たない以上早くしなければならない。

「 . . . 私が残る」

そんな中、均衡を破つたのは魅音だった。

「そんな無茶だよ！！」

「そうだよ、俺が残るから！..」

みんなが制止するも、魅音はまるで聞いていない。やがてふう、と息についてから口を開いた。

「なに言つてんの、こんなかじや私が一番強いでしょう
だからってそんな !」

「あー、はいはい

ガーネットの反論を軽く聞き流してから、私を見据えて魅音は言った。

「皆の事 . . . 賴んだよ。大丈夫、私は強いから心配しないで」

そう言つて魅音は魔法陣から離れた。と、同時に転移魔法が発動し、結界が綻び始めた。

「魅音！ 魅音！..」

私は涙を流しながら、彼女の名前を呼び続ける。そんな私の瞳に映る魅音は . . .

死ぬ覚悟を決めた英雄の眼差しをしていた。

「みお . . .」

私の呼ぶ声が終わらない内に、私達の体はこの世界から弾き出された。

「ん . . .」

あれからどれ程時間がたつたのだろうか。何も分からぬ。

「起きた . . . ?」

「ガーネット . . . ? 貴輔にロックも . . . つて! !」

私は起き上がりつて周りを見渡す。だが360°真っ暗闇。いや、こうして足を留めているということは、地面もある筈。ためしに軽く歩いたが、大理石の廊下を歩いているような感覚がした。

「ⅠⅠⅠは . . . ?」

「分からぬ。けど、少なくともⅠⅠⅠが私たちが飛ばされた場所みたい」

ガーネットもあたりを見回しながら答えた。しかし、最悪砂漠の世界や無法地帯を予想していたがまさか何もないとほ。

「アタシの技術で調べても、ⅠⅠⅠがなんたるかは分からなかつたつス」

貴輔もお手上げと言つた風だつた。

と、突然何かが壊れるよつた音がし、辺りにヒビが入り始める。

「くそつ、今度はなんだよ！？」

「世界の . . . 崩壊！？」

『違つよ』

ガーネットの言葉を誰かが否定した。ガーネットははつとしてあたりを見回す。

「どうしたの、ガーネットつ」

「いや、誰かの声が聞こえた気が . . . 」

『成程、ⅠⅠの世界にいるといつことは無理矢理脱出したらしい』

今度は私にも聞こえた。ⅠⅠのしゃべり方は . . . さつき魅音に倒された少年だ。恐らく相手にも話は伝わると思うので、ためしに台詞

を返してみた。

「貴方の仕業?」

『違うよ、あくまで僕は”もし、君たちがこの世界に来たときに導くための案内役”に過ぎない。主犯格は、色々な世界を股にかけた魔物の組織だよ』

「なるほど．．．ならば、アナタたちの目的は？」

貴輔の問いに少年は答える。なんだかんだで律儀な性格をしているみたいだ。

『さあ、僕は雇われた身だし君の仲間に倒されたのも僕の人形に過ぎない。僕はあくまでこの虚無の世界の管理人だ』

少年の口調はあくまで淡々としていた。続いてガーネットが質問をする。

「じゃあ、私たちを狙つたのは?」

『それも僕は知らないよ。少なくとも、残つた君たちの仲間に用があるみたいだ。まあ．．．何故かは興味がないところだけね。さて．．．流石に彼女も疲弊して囚われただろう。君たちも覚悟を決めなければならない』

「「「「つーーー」「」」

少年の言葉に、私たちは身構えた。これ以上何をする気なのだろうか。

『別に戦う訳じゃない。それに刃を向けても正体を見せない僕に刃は届かない。君達がこの世界から抜け出すための代価．．．つまり自らに科す呪いを決めなければならぬ。そうだね、君の仲間は二

度と成長しなくなるから、それと同等の呪いを受けて貰おう『ひがい』

「なつ・・・それはどういふの・・・」

『言い訳は聞かないよ』

そつ少年が告げた言葉を聞いて、私たちは再び意識を失うのだった。

* * * * *

「・・・と『ひがい』

「待て待て待て待て」

あ一終わつた終わつたと『ひがい』風に息をついて、話を終わらせようとしてする奏を京谷が制止する。

「食らつた呪いは？」

「ちやんと言つたよ、体の成長が止まる呪いつて」

「局長自身が言つてないでしょ？」「？」

「確かに話から想像できますわよ」

納得がいかない京谷の横でスノウがふむ、と頷く。

「分からなかつた？」

と、本氣で驚いた表情の奏。京谷は唖然としていたがやがて、
「・・・だいたい言いたい」とは解つた

と、身を引いた。しかし、直ぐに目付きを厳しくして問いかける。

「局長らの見た目に反した年齢については解った。それで、魅音はどういく向かつたんだ？」

京谷の問いに、奏に変わつて貴輔が答えた。

「恐らく、もう一度アタシたちが魔物にやられた世界に向かつたのではないでしようか」

「どういう事？」

セレナが口を挟む。貴輔は一つ頷いて続けた。

「そつス。魅音サン単体に成長などのストップをかけるのは非常に難しい。精密な対象座標の調整等がいる上に魅音サンの魔力耐性も異常ですから。ならばどうするか？『世界自体の凍結』です」

「「「え？」」「

余りに突飛な発想に全員が間抜けな声を出した。

「そ、そんなことが可能なの？」

なのはがおろおろしながら貴輔に聞いた。貴輔はもちろん、と頷いてから続けた。

「まあ、それはそれで莫大な魔力が必要っスけどね。今のアタシ達全員の魔力をフル稼働させてようやく、といったところス

「まさかとは思いますが……」

「大丈夫、一人では流石に天界の上位の者や神界の中位以上の者くらいの力がないと出来ない。もちろん、敵にいないと限らないけれど……」

「でも、それくらいこの力があれば単独で『元殺出来ますよ』ね

と、フロイト。

「じゃあ、敵には少なくとも秦さんや浦原さんクラスの奴が頭の
て」とか . . . 「

俺はそれまでの話を冷静に分析した。となると、結構準備がいるの
ではないか。

「まあ全員で突撃すりゃなんとかなるかもしけないけど、流石にそ
れは出払っている間に襲われちゃ話にならねえな。どうゆつか . . .

「あ、私付いてこつてええやろか

「はやてが？」

はやての言葉に俺は聞き返した。はやてはうそ、と額きながら言つ
た。

「よひ分からんけど、私行つた方がエエかもしれん。 . . . もしか
したら、”月詠の書”についてなんか分かるかも」

はやては手元に自身が回収した月詠の書を取り出した。

月詠の書は、どんなに調査しても創られた意図が分からない謎の書
物だ。もしかしたらなにがあるかも、といつも持ち歩いていると言
うのははやての弁。

「いや、それはないだろ」

「可能性は考えられるやん！？」

はやてが一所懸命反論する。

「まあどうせよ、分け方は考えなきゃならない。さて……どうするよ」

「俺に聞くかよ」

「お前に任せてみるのも面白そつだ」

お前隊長だらうが。

「まあいいや。取り合えず分割として……魅音を追いかける組は俺とはやてに京谷、カルト、命で後は居残り。どうよ?」

「ん、守護騎士はどうする」

「ラウンズの権限で連れてくことも出来るけど、ヴォルケンズはヴォルケンズで仕事あると思うからわざわざ引き抜かなくてもいいだろ」

「ああ、と言うわけだみんな。居ないやつには俺が連絡する。以上解散つ」

「「「了解つ」」

これである程度の方向性は決まり、一旦解散となる。少しアルルにヒーリングして貰おうかと思っていた時、後ろから奏に声を掛けられた。

「どうかしましたか?」

「私も付いていく」

「そんな、局長としての仕事もあるのに」

「大丈夫、それに私が居ないと座標に行けない」

「はあ……成程、分かりました。無理はしないでくださいね」

「……うん」

そつと微笑んだ奏は見た田うしむと壮年うしむを兼ね備えた雰囲気を醸し出していた。

* * * * *

- side ??? -

「どうやら、奴が還つてくるようです」

「ん、そうかい。二年探しよひやく見つけたと思つたら . . .」

「ここは、誰にも知られていない管理世界。いや、正しくは”棄てられた世界”だ。何らかの理由で管理する必要がなくなつた際に押されるEXWの刻印が世界の中心に浮かび上がつてているのが証だ。最も、それを刻印する理由はないに等しいのだが。

「まあいいか。君が『執心の”彼ら”も来るみたいだし一石二鳥だね』

集まりのボスであるらしい男はあくまで明るく喋る。付き人の壮年の魔物 . . . 人型だが . . . は一つ頷く。

「ええ、若の力を持つてすれば容易いかと」

「あはは、謙遜だよ。僕はあいつらと真つ正面から戦う力は流石にない。. . . ま、この”時間跳躍”があれば余裕だけどね。けど、君達が嫌だろう?だから、あいつらがここに来たら殺つちやつていから」

「「「「了解」」」

「ナイツオブラウンズ……がっかりさせないでくれよ。僕を楽し
ませてくれ」

そう言って、少年はニヤリと笑った。

Rewrite9：龍牙天斬

話が終わって、奏や京谷たちが本局に帰り、旅行組はこれからどうしようかと考えていた。

「……やっぱり旅行は中止だな」

「「「えー……」「」」

俺の決定に旅行組は非常に嫌そうな顔をする。無理もない、折角の旅行が訳の分からぬ魔物の襲撃で台無しにされたあげく旅行が打ち切りになつたのだから。

その悲しさや切なさは俺もよく分かる。だけど、

「こんだけめっこになつた大分の何処に観光できる場所があるんだよ……」

「確かに……」

フェイトが深く頷く。ヴォヌス亞種が湯布院をきれいさっぱり壊してしまつたから正直湯布院には行けない。

かといって他の場所にいくのも少しアレだなあ……とも思つ。

「そういうやまだ別府は大丈夫なのかな?」

と、なのは。

「いやいや、ヴォヌス亞種がめっこになつたでしょ……」

「そうだよね……」

みんなしてはあ……とため息をつく。

まあそればかりはな . . .

「一騎サン一騎サン」

と、後ろから貴輔に声をかけられた。

「ん? どうしたんですか?」

「今夜は大丈夫っスか?」

「まあ今夜くらいは . . .」

「それなら、アタシの店に来ませんか? モチロンみんなで」

「. . . は?」

「大丈夫っスよ、部屋はありますから。それに地下には運動施設や温泉もあります」

「「「温泉! ! ?」」」

貴輔のセリフに萎えていた全員が目の中の色を変える。どんだけ地獄耳なんだ。

「え! ?あの温泉だよね! ?」

「天然! ?天然なの! ?」

「はい、天然温泉つすよお」

「「「ひやつほーいつ! ! ?」」」

「じ、じゃあ! ! 電気風呂やサウナとか . . . ! ! ?」

「フルーツ牛乳! ! ?」

「あるつすよお」

「「「貴輔さんばんざーいつ! ! ?」」」

「 . . . これが俗に言うキャラ崩壊か . . . 。余程旅行中止と見せかけてのサプライズ温泉がよっぽど嬉しかったんだな。さっきまでの戦士の眼差しは何処へやら、みんなして少年少女の瞳に戻っていた。」

・・・うと、希来は愛想笑い浮かべてるな。

「で、皆さん温泉待ちつスよ」

「…………わかりましたよ、行きます」

「では、アタシの転送魔法でちょいちょいと

貴輔の言葉に呼応して、いつの間にか入ってきていた鉄斎、タツキ、雨音が術式に入っていた。すぐ手際がいいな・・・つて――

「あんた有無を言わさず連れていく気だつたろー?」

「え？ 何の話ですか？」

「シラを切るなって希来分かつてたろ!?」

一 確証はなかつたけれどね

「や、希来にはすべてお見通しだつたよ。まんまと嵌められた」といながら、俺達は浦原雑貨店に転送された。

View Serenai

いやあ、貴輔さん太つ腹だね。晩御飯だけでなく、お風呂もタダ提供だなんて。戦つた甲斐あつたわあ。

ちなみにここは地下の温泉室だ。男女別浴で、一騎らは隣の露天風呂を使用しているはずだ。といふか地下で露天つてなんなのよ。確かに地下の閉塞感を緩和するペイントがあるけどさ。

「でも疲れたよねえ」

なのはは服を脱ぎながらはあとため息をつぐ。一番活躍できていないのに何を言ひつか。

「あはは、私やなのはちやんの攻撃全然食らわんかったもん。なんや情けないなあ」

「戦う相手が悪かったよ。はやてやなのはのせこじやないよ」

「そりそり、お兄ちゃんや貴輔さんガやつとこ倒せぬくらいいだから非はないよ」

「・・・でも一騎は、はやてとランク一緒になんだよね・・・」

「ランクが同じでの攻撃力の差・・・萎えるわ」

一連の会話ではやてが一騎との差に意氣消沈したようだ。

でもそれは仕方ない部分がある。一騎とはやてじゃ基礎的な攻撃力はもちろん、一騎の武器はデバイスではなく魔力がある刀一本だから魔力攻撃オンリーのはやら魔導師が勝てるはずがない。ついでにいえば身体能力も一騎は圧倒的に高く、吸血鬼である命に追随する勢いだ。

「・・・京谷より一騎の方が化け物かも」「どうしたの、セレナ？」

私のため息を聞き付けて、命が近づいてくる。既に服を脱ぎ終えてるみたいで、脇には銭湯セットを抱えていた。まあ堂々としてるものだから、命の年齢に反したでかい胸がバツチリ見えていて、それをなのはが自分の胸を押さえながら羨ましそうに見ていた。

・・・実は私も羨ましい。

「命ちゃん胸おつきいよね・・・」

「ん? そう?」

「うん . . . まだ私小さいし」

「えー? 羨ましいかな? FAの私は正直邪魔くさいんだけどセレナ曰が怖いよ! ?」

氷漬けにするぞ即席ホルスタイン。

「セレナさん、私は気持ち分かりますから . . .」

必死に私を宥めようとする優希。

「お前もでかいだろ! があああーーー！」

「ああー? セレナキれないでー?」

「フェイトちゃん優希ちゃんを安全なところへーーー！」

「う、うんーーー」

「離して命ーーあの天然ボケにないやつの辛さ分からせてやるんだーーー！」

「だからそれがダメなのーーー！」

- view_kanzuki -

「 . . . なにやつてんだ?」

「ああ . . .」

俺と希来は隣の女性陣のどたばた騒ぎを耳にしながら、脱衣していく。まったく、元気な連中だな。

「あはは . . . 元気があるのは良い事だよ」

「限度つてのがあるだろ! が . . .」

「そりゃそうだね」

と、せらにヒートアップしたらしい喧騒を背に俺達は浴室に出る。露天風呂と言えば露天風呂だが、ここを地下だと思つと無駄に綺麗な空のペインントも台無しだ。

つか、殺風景すぎる。勉強部屋といつらじいが……いつたいなんの勉強なんだろ？

「ほら、早く入ろ？」

「ん、ああ」

希来に急かされて、いそいそと湯船に体を沈める。地下温泉らしく、僅かにぬるつとした感触が妙に心地よい。また、絶妙な湯温もグッドである。

ちなみに温泉を飲んではいけないのは弱アルカリ性だからと思ひ。実際は知らん。

「んー、いい湯だね」

「まったくだ」

一人してぼくぼくしながら湯船に肩まで湯をつける。今思えばおつさんみたいだな……俺達。

「あれ……？」

希来が抜けた声をあげる。

「どうした？」

「なんか魔力とか傷が回復してるんだけど」

「つて本当だ！？道理で痛くないと思つたら……」

「ほんとだー」

「つてアルル！！突然現れるな／＼／＼！心臓とかいろいろ悪いから／＼／＼！！」

「？」

「あはは・・・」

よりによつて大人モードかよ・・・たわわに実つた胸がアルルの存在感を強調し、つい目がいつてしまう。

「だつて私と一騎は一心同体だよ・・・一緒にいて当たり前」

「さすがに風呂まで一緒はないだろ！？」

「離れていたときに敵襲があつたら危険だし・・・

「いやいやいやいや・・・つかいくらコニゾンデバイスつつてもお前は女の子だろうが」

「・・・役得痛つたあああああ！！なんで蹴るの！？」

「アホか！！俺たちだから良いものの他の男達から舐めるように見られていいのかよ！？」

何気なくいい体しているから余計にまずい。

「その時は・・・マスターが助けてくれるでしょ？」

アルルは大人びた顔らしくない可愛らしい笑顔を俺に向かた。普段のキリッとした顔を見慣れた俺はついドキッとしてしまう。

「どうしたの？顔が赤いよ？」

「うつせ。・・・まあいいか」

「一騎優しいね」

「そつか？」

希来の言葉に俺は聞き返す。やつと言えば昨日の朝あいつらからも俺は優しいと言わされた気がする。・・・正直、ピンと来ないのが実情だ。

「朝にも言っていた、って？」

「覚えていたのか・・・」

「まあね。自分でも気づいていないかもしけないけど、一騎は女の子が喜ぶこと自然に出来るんだよ」

「それが全くピンと来ないんだが」

れつやのよつに命やセレナーラがボケたときはキレツツ「ミだし、たまに手が出る。まあ料理とかなんやうな京谷がなぜか俺に一任させてくれるからきっとそのせいだろつ。

「一騎らじいね」

そう言つて希来はアンニコイな表情を浮かべた。その間にアルルがすすす、と寄ってきて俺の腕を取る。
ちよつと待て、胸が当たつてゐる。

「この温泉つて疲れ凄く取れるね」

「やうだね、成分何で出来るんだろう・・・」

「じりじり、胸を押し当てるな」

「別に構わないじゃない、私はユービンデバイスだし」

・・・放置するか。頭のキレじやアルルには勝てない。

「んー・・・」

そしてじばりく俺は考え込む。

それはもちろん龍牙天斬の事だ。たぶんあの斬撃を自在に撃てなければこれから先、戦つていけないかもしれない。

「一騎、一騎！」

「ぬあつ！？」

アルルの呼ぶ声で我に返る。どうやら結構な時間考え込んでいたみたいだ。

「もう、何度呼んでも返事しないんだから。早く出るよ」

「あ、ああ」

そうして、アルルに連れられ風呂を出るのだった。

それから食事も終え、なのはらはタツキ、雨音を交えて再びスマップ大会に花を咲かせていたところ、俺は雑貨店の屋根の上にいた。
．．．まあ貴輔に呼び出しを食らった所以だが。

「来ましたか」

その声がした方を、俺は見やる。すると、いつもの下駄帽子姿だ。

「他の皆サンは？」

「浦原の子供も交えてゲームしてるよ。昨日の続きだらうな

昨日はわざと負けてさつさと寝たからどんな試合だったかは知らないが、かなり盛り上がったらしい。

湯布院に向かう列車の中で命らがテンション高く語っていたから、余程楽しかったことが想像できる。

「そうですか……迷惑かけますね」

「命らからしたらしい力モ見つけたって感じだらうけど」

「はい?」

『だーッ!! また負けた!!』

『あははつタツキくん弱いねー』

『くつそ姉ちゃん無茶苦茶上手いじゃないか!!』

『そらあ勤務時間もゲームしてるくらいやからなあ . . .』

『ギクッ』

『あはは . . .』

. . .

「 . . . 大丈夫なんスか? ナイツオブラウンズともあろう者がサボ
りつて . . . 」

「 . . . あんなど、やる」とはやるから京谷も文句言わないんだ

命はなんだかんだで頭がいい。なので要領よく物事を進める力を持つているが、それがいい方向に使われた試ではない。
ゲームが強いのはそのためだ。

「それで . . . どうして俺を呼んだんだ?」

「ああ、忘れてました」

そう言つて、貴輔は自分の武器 . . . 剣先が斜めに折つたような切
つ先をしている刀を取り出した。

「アタシが呼び出したのは、龍牙天斬についてつス

それは俺もどうにかしなきゃと思つていていたところだ。貴輔は続ける。

「一騎サン、アナタの戦闘能力はS+を遥かに凌駕しています。同ランク・・・まあカルトサンやスノウサンは兎も角、高町サンやフエイトサン程度なら圧勝も可能でしょう。ですが、それはあくまで魔導師間での話」

?話が少しずれていくような気もある。だが、一応聞くことに徹した。

「今回戦つてみて分かったと思いますが、アナタの竜王刃は通用しなかった。一撃目がダメージを与えるまでになつたのは奇跡です。これからアナタ達が相手する敵はそういう集まりです。だからこそ、ある剣は必ず自らの意思で撃てるようにしなければならない。 . . なにか分かりますか?」

「 . . 龍牙天斬」

「(明察)

貴輔は何処からともなく扇子を取り出し、広げた。それで自らて扇ぎながら話を続けた。

「アタシが見たところ、アナタは龍牙天斬を自らの意思で撃てているようには見えない。そうですね、必要以上の恐怖や怯え等はアナタからは感じませんし . . なにか心の意思がトリガーになつているとアタシは見ました。ですので、その時の気持ちを思い出してもらおうかと。思い出せますか?」

「いやまったく」

「 . . まあそりゃあそつですょねえ」

貴輔は分かつていたかのような素振りを見せ、空を見上げる。しばらくして、顔を再び俺に向けた。

「では、龍牙天斬を意のままに撃てる練習をしましょう。さすがにここではマズイので、上空で。アタシが先に行きますから、一騎サンはバリアジャケットに着替えてから来てくださいね」

貴輔は自らの刀を持ち直すと、慣れた動きで飛翔した。

俺は、セットアップの後白龍を取り出してから貴輔の後に続く。ある程度飛び上ると、上で貴輔が待ち構えているのが見えた。下を見やると、どうやら上空1300メートルくらいだろうか。ヴォヌス亜種が暴れた場所や、俺達が戦った場所が小さく全体に渡つて見える。むしろ、大分全域が軽く見渡せそうだ。

「どおです？ 高いでしょ？」

「ああ・・・全体が見渡せるとはな」

「でしょ？ アレとか見えますよ」

貴輔が指差した方角をつられて見る。その先には噴煙を元気よくあげる山が見えた。

「あれは？」

「阿蘇山っスね。九州じゃ有名な活火山っス。ヴォヌス亜種が出てきたのはそつから東に5キロの地点っス」

そこから軽く視点を移すと、そこには大きなクレーターのようなものが形成されていた。さすが巨大生物、残す傷痕も半端ではないな。

「さて・・・では、始めましょ？ 一騎サン、その時の斬撃のイ

「メッセージをしながら回遊するにはやがておもいでだれこ」

そう言われて、俺はその時の龍牙天斬を撃つた時のイメージを思い出す。たしか . . . 刀を右に突き出したはずだ。そして多分魔力込めた。えーと . . . こんくらいか。これで . . . !

「龍牙、天斬ツ！！！」

掛け声と共に瞬動で一気に貴輔の近くまで迫る。すでに貴輔はシールドを張っていた。僅かなテイクバックで一気に踏み込み、突きを繰り出す。

100

確かにそれっぽいのは出た。それっぽいのは。だが、そのそれっぽいのは。・・猫だった。

その猫は、でこでこと貴輔のシールドを歩いていく。頭が触れる
か否かくらいで……

四百九

可愛らしい効果音と共に爆発。猫が消えて数秒の後、貴輔のシールドが粉々に砕けた。

「 」

「一騎サン、座り込んでさめざめと泣かないでください」

非常に情けなくて仕方がなかつた。あんなものが龍牙天斬だと知れたら爆笑ものだ。

「一騎サン、一騎サンはあの技を擊つときどんな事を考えていましたか？」

唐突な貴輔の質問。一瞬意味の理解ができなかつた。どういう事だ？

「分かりやすく言いましょうか。新しい力に目覚めるとき、使用者には必ず明確な意思があるものなんス。例えば、敵をこの手で確實に討ちたい、大切な人たちを守りたいとか」

その言葉を聞いた瞬間、俺の胸で何かがざわつき始める。それは少しづつ大きくなり、やがてひとつになにかに変わつた。

「 . . . 分かりましたか？」

「悪い、浦原。巧く避けてくれよ」

「はい？」

「多分、手加減できない」

貴輔の言葉で、ひとつ確信が出来た。俺はそれを確かめるために、貴輔に警告し直ぐに刀を右へ突き出した。

イメージは . . . 龍が牙を剥いて敵と対峙する。魔力を限界まで練り、そして込めた。すると、夕方に放つた龍が同じように淡く形成

された。

「ツー！」

貴輔はヤバイと感じたか、すかさずシールドを開いた。

形成し終わると、俺が再び貴輔に突貫し始めたのはほぼ同時。さつきと同じく、僅かなテイクバックで一気に踏み込み、突きを繰り出す。

そして、”龍”が撃ち出される。龍は咆哮を上げ、貴輔のシールドに衝突する。が、数瞬して少しづつヒビが入り始めた。

「ツー！」

シールドが破られる方が先だと判断した貴輔は、刀を握った手を引き、魔力を装填する。

そしてシールドが破れた瞬間に、右足を踏み込み刀を振り抜く。そこから緋色の剣撃が撃ち出され、龍となんとか相殺させた。

「さすがっスね……アレだけでコツを掴むとは……」

「……」

正直なところ、まだ実感は沸かない。が、使うイメージはしつかり掴めた。

「龍牙天斬……咆哮を上げる龍のイメージ……か。やれやれ、殺意がトリガーとはな」

俺としてはちょっと大人げない気もするが……まあ僅かな時間で

『ジンを掴めたのは大きい。

「一騎サン……アナタは恐ろしい子供だ。後5、6年もすれば或いは京谷サンと渡り合えるかも知れませんね」

「なんか言つたか？」

「いいえ、老いぼれの戯れ言つスよ」

「というか20代前半の身なりで52歳つてどうなんだ……」

「アタシは変身魔法使つてるつス。こっちの姿の方が割と便利なんスよ。他は見た目通りつスよ、あのままで成長が止まつてる」

貴輔にもなにか思い入れがあるらしい。それを語る顔は殊勝めいていた。

「さ、用は終わりましたからとひとと降りましょ。皆さんが心配です」

「それは言えてるな。……鉄斎が見てるんじゃないのか？」

「鉄斎は早寝つスから……」

「マジか……」

あらかた降りてみると、雑貨店の屋根が見えてくる。すると、なにやらリビングにあたる場所から喧騒が聞こえてくる。

『アホーッ――！　ラゼル打たんかーいッ――！』

『しゃあ――！　越智が抑えたぞ！――！』

『あわわわ……はやてちゃんのテンションがああ……』

『はやてつ！　大丈夫、新井が打つよ――！』

『せやな、ジャイアンツなんか即KOのや！――！』

『ああ！？　ジャイアンツのほうが強いんだよ――！』

『落ちちゅいてぐだひやあい……』

『――――――！』

訳の分からぬトークに一人して絶句する。

「これはこれは . . .」「早く行つた方がいいな . . .」

妙な不安を抱えながら足早に着地、通常形態にしてから直ぐ様中に掛け上がる。声がする方へダッシュで向かい、一番やかましいと思われる部屋を思いつきり開けた。そこには . . .

「しゃあ！－阪神のサヨナラ勝ちい－－」「いやつほーつアニキサイコー－－！」

再び甘酒とつまみ . . . もきいかやらなんやら . . . を片手に阪神のタオルを首に掛けなぜか上半身ブラのみ、下はタンクトップというどこのぞの姉御みたいなはやて & amp ; 命と。

「クルーン－－！」

と、近所迷惑よろしく雄叫びを上げるタツキ。

「はやてちゃん落ち着いてえ－」

「一人とも服を着てください－後タツキくんも静かに－！」

と、テンションが上がる二人を宥めて回る希来とフエイト。

「ううう . . . 私の立ち位置に . . .」「お酒足りないよお－！」

と、甘酒でバツチリ酔つてしまい悪態をつくキャラ崩壊したなのは
とミキヤラとしての自分の立ち位置にさめざめと泣く優希。

「すう」 . . . 「すう」 . . . 「」

- 1 -

そして、我関せずで寝ている雨音とこれ幸いと黙々とつまみやらぬ菓子やらを食べるセレナがいた。

セレナ

一 おがえり

この状況を簡潔に説明してくれ

「スマフ」にしてたら、たまたま優希カリモニン蹴ってチャンネル変わつてさ。そのチャンネルが阪神対巨人戦だったから一転して野球観戦に変わったんだよ」

「」の大量のお菓子とつまみ、んで甘酒の説明は？」

「あー……どうでその辺がかつぱりないなあと思えば……」

貴輔は納得したような表情を浮かべた。あの間にチヨックしてしまったとは伊達に店をやつていた訳じやないらしい。

さらにテンションが上がったのか命とはやは六項おろしを歌い出す。タツキは〇・△な状態だ。

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

「一騎つ見てるへりこなら止めてよー?」

「あ、ああっ」

希来の声にはつと我に返り、制止作業に入った。
酔っぱらいの癖に無駄にすばしつこく、ようやく全員を完全に眠らせたのは午前一時を回った頃だった。

翌朝。

激闘の湯布院防衛戦・・・まあ湯布院は壊滅したが・・・夜には俺は龍牙天斬の会得、それ以外は野球観戦とスマブラに明け暮れた昨日を思い出しながら俺は目を覚ます。

体を起こし、回りを見渡すとどうやら俺が一番最後らしく部屋には俺一人だけだった。携帯を見てもすでに10:00を回つており、ちょうどいい時間である。

「あ、起きた？」

ちゅうどなのはが俺を起こしに来た。さりげなく口許にじはん粒がついているといふことは皆は朝飯だらうか。

「ああ、おせん」

「うん、おはよ。みんなご飯食べてるね。」

わがよたすく行く

面倒なので、寝巻きのまま向かうことにする。そしてなのはと二人並んで廊下を歩いていく。程なくなのはが話しかけてきた。

「ごめんねえ、昨日手を煩わせて……」「

開口一番謝つてへる。おそれらへ昨日の騒ぎの事だ。

「すごい騒いでいたんだよね……恥ずかしいなあ……」

恥ずかしそうな表情をするのは。あれは仕事に不満があるサラリーマンよろしくだった。魔王ネタや”少し・・・頭冷やそつか”等あらゆるネタに使われるエースも悩むべきことがあるのでな、と思つ。

「とこりかみんな起きたときに起りこしてくれば良かつたの」「やつしても良かつたんだけど、お詫びも兼ねてゆつくり寝かせてあげよつて命ちゃんが」

なるほど、命の差し金か。命の癖に氣を使つのだな。

「まあ皆がいるといなら一騎くんもキレないよねーってはやでちやんと一人で話してたけど」

前言撤回。後でぶつじばす。

そんな感じの会話をしながら歩いていると、昨日秦が昔話を語つた大部屋につく。襖を開けると食事を摂り終えた旅行組と貴輔達、そして魅音を追いかける組である京谷、カルト、奏がいた。

「つて俺の飯は」

「作つてないよ。代わりに朝ご飯用の弁当入れたんだよ」

俺の問いにセレナが答えた。俺はなるほどと答え、京谷達の方を見た。

「おはようわざ。ちゃんと覚えられたのか?」は龍牙天斬の事だらう。

「ああ

京谷の言ひ“ちゃんと覚えられたのか?”は龍牙天斬の事だらう。

「よし、じゃあいいじゃないな。はやて、命、カルト、局長」

そう言って京谷は立ち上がり、呼ばれた全員も立り上がった。それに続いて俺も立ち上がる。

「ねえ京谷くん。私たちは？」

と、なのは。

「あー・・・そつか。空港もこの醜いお祭りだらうなあ・・・」

京谷はそれを考慮してなかつたようだ。じばし考え込む。

「それなら、私達が行く前に私が転送せれる

「局長が？」

「うん、私の転送魔法は管理局直通の術式を組んだからそんなに魔力を食わない」

奏がこっちに来たときは、次元に縦の裂け目を加えてこっちに来ていた。それはそれで、次元の狭間に落としてしまわなこような制御が必要なため、精神的にしんどい気もするのだが。

「じゃあ局長、頼みました」

「うん、頼まれた」

握り拳をグッと握り、決意を固める奏。

これだけを見ると、年頃の少女らしいなと思つ。中身は凶悪な魔導師だが。

「そんじゃ、地下に降りましちゃう

貴輔の号令で、店の店主席の置を開けると現れる勉強部屋への階段から、地下の勉強部屋に向かう。全員が降り立つと、そこには鉄斎が居り、なにやら転移するための魔法を組むための準備をしていた。

「てつやーい、準備はどんな感じっスか?」

「はい、現在でだいたい90%程です。後10分もあれば準備は完了です」

「10分・・・奏サンが帰宅組全員を転送すればちょうど良い時間じゃないですか?」

貴輔は奏に確認をとる。それを聞いた奏はこくりと頷いた。

「うん。じゃあのは、フェイト、優希、希来、セレナ」

奏は帰宅組の名前を呼び、一ヶ所に集める。

「じゃあ転送するからここに居て」

奏は胸ポケットから自らのデバイスの待機モードであるマグライトを取り出ると、セットアップを唱えた。

すると、局長正装から程なく自分の武器”ハンドソニック”を両腕に取り付け、40年前の最強のエースの証”SSS”的紋様が入った制服姿に変わった。奏曰く、”学生ブレザーの方が動きやすかった”とのこと。ちなみに貴輔が古くさい服に身を包んで戦闘するのも同様の理由らしい。

「

奏は天使の翼を広げると、術式に入った。すると、なのはらの周り

に風の渦が生じ、その正面ではメスでスッと切り傷を入れたかのように縦に次元の裂け目が生じた。

「局長」

「なに？」

術式の途中の奏に京谷が話しかける。

「転送先は大丈夫なのか？」

「うん、ガーネット呼んでるから」

「そうか・・・」

それつきり会話が終わる。なんの意味があつたのだろう。

「大丈夫、入つて」

奏の声で、一人ずつ裂け目の中に入つて行く。やがて最後の一人であるフェイトが入り、裂け目は再び閉じた。

「うん、これで転送は終わり」

やれやれといった表情を浮かべながら、奏は語る。それを見届けた貴輔は鉄斎の方を見た。

あちらもちよど終わったようで、鉄斎は立ち上がりつくりと頷いた。

「魔法陣の固定、完了しました」

「ん、了解。じゃあ皆さん集まつてください。アタシと奏サンから緒注意があります」

貴輔は全員を集めた。そして奏が前に出る。

「じゃあアタシから説明しますね。これからアナタ達が転送される先は第6元管理世界”ジエネシス”つス」「元管理世界？」

聞きなれない単語にはやてが聞き返す。

「どうしようもねえ理由で管理が不可能になつたとき、管理局が管理を放棄した・・・つまり”棄てられた”世界の事だ。俗にエクスワールドとか呼ばれてンじやねえか」

それに対し、カルトが口を挟む。伊達にラウンズ最高の頭脳をしているわけではない。

「そつス。この場合は時間の凍結が理由つスね。（まあ管理局が世界を捨てるなんてあり得ないつスから、魅音サンを使えなくするために世界ひとつダメにしたようなもんつスねえ）」

「なんか言つたか？」

「いえ、何も。それで本題ですが、そういうた棄てられた世界は一般的に悪の組織や魔物、あるいは犯罪者の隠れ場になりやすいものつス。それはつまり、”非常に高ランクの魔物”がいる可能性もあります」

その言葉に、はやて、命は息を飲む。

「つつても一度目を通した世界なら、高ランク魔物が出たら一応チエックされるだろ」

と、京谷。

「ええ。ですが、この場合はその限りではありません。ジエネシスは時が止まっていますから」

「なるほど……置き去りにされた、つてことか

京谷は納得した表情を浮かべた。続いて貴輔に代わり、奏が喋り始める。

「要約すると、ジエネシスの敵は強い。下手したら痛手を負うかもしれない。だから、これはあくまで深追いはしない。私が京谷が不可能と判断した時点で私の転送魔法で管理局に戻る

「ほな、不可能やなかつたらどないするんですか？」

「それでも、この戦力じゃきっと倒せないから多分キリがいいところで引き上げる

「了解や」

とつあえず、目的は簡単に理解した。一つは戦力の調査。一つは魅音の追跡。

「よし、行くぞ」

「おおっ！」

京谷を筆頭に魔法陣に全員が入る。

「じゃあ発動させるつスよ」

貴輔は印を結び、魔法陣が淡く光を帯びる。

そこから魔力の奔流が走り、俺達を風が包み込む。

「気を付けてくださいね……ラウンズの皆さん……」

貴輔の身を案じる言葉を背に、俺達は魅音らの終わりの世界、ジエネ시스へ転送された。

「着いたよ」

奏の言葉を聞いて、全員が目を開ける。

そこには別段何かあつた様子もなく、何気ない日常を過ごす小さな村が広がっていた。

が、それはあくまで生活だけで満月が中天から欠片も動く気配がない。むしろ、ほとんどの自然現象が停止しているようだつた。

「これは . . . 」

「この辺りは効果が少し薄いの。魔法陣の中心付近まで行けば入ら止まつてるよ」

「こここの奴等は気付いているのか？」

「ううん、この人達は後で全員記憶を改竄されているから . . . 」

「うなればここに住んでいる人間はNPCじつて事」

「NPC . . . 」

京谷は奏の言葉を反芻する。奏の言葉を要約すると、この世界の生物は定められた行動パターンに従つて動いているという事だ。

「それやつたらまるで . . . 人形と同じやん . . . 」

「 . . . そうだな」

「それじゃあ、行こ？」

「了解だ」

「ああ」

「はいっ」

「オウ」

「うん . . .」

五者五様の返事を返して、俺達は奏を先頭に魔力反応が強い点 . . . つまり奏たちが戦闘した都市へ向かつて飛ぶ。夜らしく風も強いため、僅かに寒い。

しばらくして、俺の隣を飛んでいた命が話しかけてきた。

「そういえば夜だねえ」

「それがどうかしたのかよ」

「ほら、私吸血鬼でしょ？だからいつもより魔力が強くなるんだ」

命が少しだけうきうきしながら話す。思えばこいつは吸血鬼の亞種だったな。月が満月になると、吸血鬼は魔力が膨れ上がるらしい。逆に新月になると魔力が薄れてくる。

紫苑のように圧倒的な強さになつたらそこまで意識されないが、命の力はまだ発展途上。なので、力の増減の量は非常に幅がある。ちなみに、命の魔力ランクは新月時のもので判定されているので、敵からは最低の実力を見ていことになる。

「ふふふ、久しぶりにアレが使えるかな . . .」

「あまり乱用するなよ？アレは特に桜の制御が . . .」

「何の話だ？」

そこへ京谷が口を挟む。

「うん、私の新しい技 . . . というか本当の必殺技が使えそうでね」

「ラスオブツウェイじゃなくてか？」

「アレは本家の紛い物だよ。新月の日でもそれなりのワッショウが出来るよ！」改良したんだよ」

「なるほど……つか命の技は竜剣やラスオブツウェイくらいしか見てないな……」

「なにいつてンだ京谷ア。俺と月城が仕合った時にストリーム使ってたじやねえか

「そうだっけか？」

ストリームは命が自らの体に風の魔力を乗せ、機動力を上げて戦う身体強化系の技だ。身体強化を嫌う命自身は突攻時にしか使っていないため、ストリームという魔法自体が命の竜技名として成り立つている。

「妙などこで記憶力が悪いねえ、京谷くんは

「悪い悪い、お詫びになんか教えてやるから

「…」

「むっちゃ嫌そだな」

「チートキャラになるのが嫌なんじゃね？」

「さつすが一騎！分かつてるじやん」

「テメエ！」

「まあまあ京谷くん。お詫びに私達の入浴写真上げるから

「え？マジでってはやって蹴るな！！なんか異様に痛いから……つかはやて目が据わってるぞー？」

「京谷がいいよにやられてる……」

今までの顛末を見て、ぽつりと奏が感想を漏らす。

「姉御肌の奴には敵わないんだよ、京谷は

「一騎は . . . 大人しいけど、」——一番で大胆な子に弱い
「そりかあ？」

奏の言葉に俺は疑念を抱く。

「うん。私はちゃんと見ていた」

ちゃんと見てた。ますます意味がわからない。それを聞き返そうとしたとき、

「散開ッ！！」

カルトの怒声で霧散した。全員がハツとしたように各自の方向に散開した。その直後、幾条の光の矢が飛んでくる。

「魔物か . . . 」

京谷が呟く。そして京谷は体内からフィオネを呼び出す。

「つて京谷くん連れてきとつたん！？」

「そりやあ京谷は私のマスターなんだからついてくるでしょ？」

フィオネはさも当然のように言つた。

「まあそれはいいからフィオネ、あいつらの能力を看破してくれ」

「了解、我が主（イエス、マイロード）」

フィオネはすぐさまライブラを展開して敵の能力を看破し、データを構築して全員のデータベースに転送した。ちなみにその間2・5秒。

「ガーゴイル……ちょっと厄介」

奏はそつと呟いた。石化を操る敵だからこそその見解だらう。だが京谷は。

「よし、焼き払つか

「「「な！？」」

あまりの大仰な発言に全員が京谷の方を向く。

「な、なにゅうてんのん！？京谷くんの力でもアレは……！」

「まかせとけって。ほら、下がりな」

京谷は全員を安全圏まで下げると、ガーゴイルの軍勢の前に向き合つた。そして印を結び、術式を唱え始めた。

「ゴッドテイル デストラクション マギステル。契約に従い 我に従え炎の霸王。来れ浄化の炎 燃え盛る大剣」

京谷が詠唱を始めると、京谷が自前で組んだという魔法陣が現れ、魔力の奔流が走る。この言霊は……。

「全員もつと下がれ……」いつは“燃える天空”だ……」

いち早くそれに気づいた俺は全員をもつと後ろに下げる。ガーゴイルの軍勢はその間も近づいてくる。

「ほじばしれよソドムを焼きし、火と硫黄 罪ありし者を死の塵に

！…」

そこまで言い切り、京谷はガーゴイル達の元へ飛翔する。そのまま流れるように、開いた右手をガーゴイル達の前に突きだした。

“燃える天空”ツ…

唱えられた瞬間、ガーゴイル達に一条の光が走る。数瞬遅れ、先頭のガーゴイルを爆心地として巨大な爆発を巻き起した。

「ひやつー？」

「おつと」

俺は気を抜いて飛ばされそうになつたはやてを受け止めた。

「あ、ありがとな…」

「しかし…見れば見るほど反則だよなあ」

「全くだね」

魔力の残滓の残る爆発跡を見ながらの咳きにフイオネが大きく賛同する。

“燃える天空”。

燃える天空。炎属性の魔法ではほぼ最上級といつていゝ魔法だ。さらに京谷の場合は反則的な量の魔力を体に蓄えているため、従来のそれより遥かに効果範囲は大きく、かつ破壊力がある。

そんなわけできれいをぱりガーゴイル達は消え去つていた。

「ちょっと強すぎたか？」

一瞬で片付いたため、余裕の笑みを浮かべる京谷。

「京谷・・・少しは自重して」

「なんでだよ?」

「ほり、あんな目立つの撃つたから番人が気づいた」

奏が指差す方向を俺達は見る。すると、そこには一匹の竜種がいた。

「ミラーフォースかよ・・・厄介だな」

ミラーフォースドラゴン。アーマードラゴン正確には竜種ではなく、機巧龍にカテーテリーされる。主に飼われた龍が命を失う前に機巧化される場合が常で、量産型や自然発生は物理学的に有り得ない。

その中でミラーフォースドラゴンは幼龍を改造されたため大きさこそ2~3倍程だが、強さは破格である。京谷以外ならスノウやカルトでも苦戦するだろう。

「よし、もう一発俺の『私がやるよ』なつ!?」

意気込んで向かおうとした京谷を制止して、命が名乗り出す。

「お前の魔力でなんとかなるのか?」

「ふつふつふつ、京谷くんアレを見たまえ」

命は上機嫌で中点の満月を指差す。

「満月がどうかしたのか?」

「分かつてないねえ。一騎、答えは?」

俺に振るな。

「吸血鬼は満月の時に魔力が強くなる」

「と、ゆー事」

「だけどAA程度で・・・」

「京谷、月城のAAの魔力は新月ン時だ」

「マジかよ！？」

お一つと命さん京谷に秘密にしていたようだ。

「まあそういうわけだから私に任せて」

「だが・・・」

「んなら、俺がついていってやる。なら文句ねえだろ京谷」

「・・・ああ」

カルトが付いていくといふことで京谷も納得したようだ。

「じゃあ私達は先に行こ？」

奏が口を挟む。それを聞いて頷いた京谷は俺達を呼んだ。

「先に行くぞ」

「ああ」

「せやけど・・・」

はやてはいまいち心配なようで後ろをチラチラ見る。

「大丈夫だ、一人に任せときな」

「騎くんがそう言うなら・・・」

そんなわけで、俺達は命らを残して先に進むこととなつた。

- view mikoto -

さて、先に行かせたはいいけど。

「さてどうやるかなあ・・・」

「策無しかよ」

カルトさんからの厳しい突つ込みが入る。私は言い返せない。

「まあ・・・ねえ。けど今の魔力なら力押しでもなんとかなりそうかな？」

「そうか・・・俺ア死にそうになるまでは手え出さねえからな」

「うん、分かったよ」

そう言葉を切り、私はミラーフォースの元に降り立った。それに気付いたミラーフォースは咆哮をあげ、直ぐ様突進してきた。

「やあああ！！」

私は瞬動をかけて一気に迫る。そしてすり抜け様に腹に一撃を加える。

「ガアア！！」

敵は吼えるが、まるで効いているわけではない。さらに私はオベリスクを構え直し、身体強化”ストリーム”を掛けた。これは私の十八番だ。再び瞬動を掛け、オベリスクで縦に斬り伏せる。しかしこ

れは右腕の大剣で止められてしまった。

だが、それは予想の範疇。私は直ぐ様左手に風の魔力弾を形成し、敵の腹に撃ち込む。

私の魔力は満月に強まり、新月に弱くなる。だが、それを私は考慮して魔力ランクは新月時に取るようにしている。なので、普段から魔力ランク以上の活躍をすることが出来る。逆に言えば敵からは侮つてみられやすいということだ。さらに満月時の魔力量は単純計算でもSSSは裕に行く。

そのSSランクの一撃を至近距離で叩き込んでいたくないはずがない。私はミラーフォースを思いきり吹き飛ばすことに成功した。

吹き飛ばされたミラーフォースはそのまま後ろの廃墟ビルに突っ込み、上から支えを失いバランスを崩したビルが音を立ててミラーフォースに降り注ぐ。

私の稀少技能”風変換”では殺傷能力に非常にバラツキがあるが、こういった間合い取りや戦闘では鳥族や空を飛ぶものに対し非常に有利だ。しかし。

「まあそんなに効いちゃいないよね・・・」

私はぽつりと毒づく。大きな山になつた瓦礫を押し退け、中からそこそこ汚れたミラーフォースが姿を見せた。外傷はほとんど見てとれない辺り、非常に硬いということだろうか。

私はゆっくりとオベリスクを構え直し、カートリッジをひとつ撃ち込む。

「風雷逆巻け、風蓮”かざつれ”」

すると、オベリスクの刃の部分を中心に竜巻が巻き起こりだす。

私がミラーフォースに突撃したのとミラーフォースが起き上がったのは同時だ。私は竜巻によつて巻き込んだ小石を孕ませた一撃を左薙ぎに叩き込む。しかし、踏み込みが甘かつたのか決定打にはならなかつた。そして、ミラーフォースの縦の一閃を受け止める。

「ウゴア、ア、ア、！」

ミラーフォースが吼え、剣に炎が纏われていく。さすがに柄では受けきれないでの払いと瞬動を同時に使い、脱出する。が、かわした方向に炎の奔流が伸びてくる。

「くっ！」

が、払つた反動と風蓮があるため私は難なく振り払う。さらにその炎をも巻き込み、オベリスクに纏われた竜巻はさらに威力をあげる。

「でえやあああーー！」

そして瞬動で敵の胸元に迫り、インファイトに持ち込む。まあお互い長物だから私も不利だが、ここは炎を纏わせた斬撃を受けないようにするのが優先だ。

まずは顔を狙う一閃。しかしさすがアーマードドライコン、見事にかわした。そして飛び上がり敵の背後に着地、同時に逆手に一撃を加える。今度はしつかり当てた。私はまだ攻撃の手を緩めない。

私は反転して、オベリスクの切つ先を敵の背中にあてがい、解号を唱えた。

「風雷撫で巻けッー！」

実は風蓮はただ風の刃を纏わせ、あらゆるもの巻き込んで刃とするだけではなく、それを解放して敵に撃ち出すこともできる。むしろ、風を纏わせる”風雷逆巻け”から纏わせたモノを弾き出す”風雷撫で巻け”までの一連の行動こそが、風蓮という技の真髄だ。

そして、ミラーフォースは風の刃で身を裂かれ、巻き上げた瓦礫や炎に削がれて焼かれ、大きな痛手を受け悲痛の叫びをあげた。

「ツー？」

咆哮につられるように大地が割れ、隆起する。さらに私の立つていた場所が隆起したため、私はバランスを崩す。そしてその矢先に、再び炎の奔流が私に襲いかかった。

「風車ツー！」

カートリッジを撃ち込みつつすぐさま跳躍し、片手でオベリスクを回す。

風車は優希のクロスジャベリンを使つたバトン防御に似た、風の近接防衛魔法だ。それで何とか振り払い、事なきを得る。

私は後手に回らまいと、手頃な瓦礫を踏み台に瞬動を掛けた竜剣でミラーフォースの鎧を碎く。その与えたダメージは私の魔力に変わつたが、大したダメージではなく思つたほど癒えなかつた。しかし、そこで敵は僅かにぐらついた。

今だ！！

すぐに風を全身に纏わせ、私のいつもの突撃の体勢を作り、ラスオブツウェイを仕掛ける。風の5連突きは、さらに大きなダメージを

「与える。

しかし、最後の一撃を剣で止められた。

「！？」

「ヴガヴツー！」

そのまま、敵は思いつきり剣を振り払う。剣の腹で叩きつけられた私は私がミラー・フォースにしたのと同じように瓦礫に突っ込む。飛ばされつつ目の端で敵を捉えると、更に追撃をかけようとしていた。

「火這大蛇”ひばいだいじや”ツー！」

そこへカルトさんの援護。放たれた炎を纏うロンギヌスが地面に突き刺さり、炎が地中に撃ち込まれる。それは大地を這う大蛇のようにミラーフォースの元まで向かい、直下で火柱を上げた。

「いくら火属性でも、あれを食らえばしばらくは動けねェ」

そう言いながらカルトさんがロンギヌスを回収しに降りてくる。さすがラウンズ03、破格の戦闘能力だ。

「変われ、俺が殺る」

「……大丈夫です」

その願いを遮り、私は立ち上がる。

・・・痛た、肋やつちやつたかな。ちょっと痛い。

「怪我してんだろ」

「吸血鬼だから大丈夫です」

「……じゃあ、あいつを倒す隠し球でもあるのか」「……もちろん！」

そう言って、私はオベリスクを一回ししてカルトさんの前に出た。私の隠し球はひとつ。そう、今の魔力では満月の夜にしか出せない必殺兵器。

やがて火柱が收まり、ミラーフォースは先ほどのダメージを忘れて一目散に突撃してきた。

「来るぞ！－」

そんなカルトさんの檄を背に私は立王立ちする。そして、剣を降り下ろしたのと同時に、

「ガツ！？」

敵の背後に縮地で回り込んでいた。

縮地は高速歩術のひとつ、瞬動の上位種で極意は動きを悟らせない部分にある。

「ガウツ！－」

敵は振り返り、私がいた辺りを薙ぎ払う。無論、振り返った頃には再び背後を取つているわけだが。

「桜……？」

カルトさんがそこでようやく私の変化に気づく。そう、私が立ち上がり私が通過した場所には僅かずつ、桜の花びらが……正確には

私の魔力で生成された桜色の魔力の集合体だが……舞っていたのだ。

そして私が今いる場所では、桜がより多く、ひらひらと舞い落ちている。

「私はや、まだまだ未熟だから満月の時は自分の力を制御できないの。だからこうして余剰魔力を桜の花弁にして舞わせてるのよね。……これなら、いくらがさつな私でもさ……綺麗になれるでしょ？」

私はそんなどうでもよい事を理性を持たないミラー・フォースに語っていた。無論……カルトさんの存在など頭から飛んでいた。

「少しでもしおらしく……儂く見えるようにした結果が、この技。……でも、私には儂さは似合わないみたいでさ……」

私の体の周りで、桜が吹雪く。やがて、それは次第に殺傷能力を持ち出し、辺りの地面や瓦礫を切り始める。

「……おうかくのこざき桜華狂咲」

すぐさま瞬動をかけ、背後を取る。オベリスクを振りかざすと、その軌跡に追随して数多の桜の刃がミラー・フォースの身を裂いていく。さらに敵の左足を斬りつけながら、その後ろへ回り込みつつ片手でオベリスクを逆回しし縦に体を斬つた。そこから敵の鮮血が勢いよく吹き出し、敵は咆哮する。私はその返り血を浴びながらも、攻撃の勢いは加速、さりに纏う桜も次第に増えしていく。

「おいおい……暴走じやねえのか」

そんなカルトさんの嘆息も聞こえない。むしろ意のままに操れ過ぎるのが怖い。これは目の前の敵に集中できているからだろうか。

「しつ……」

今度は敵に刃ではない方を向け、そのまま顎へ向け突き上げる。クリーンヒットしたようで、思いきり仰け反った。

次いでその勢いをそのままに敵の腹を踏み台に瞬動で飛び上がり、再び刃を敵に向けた。同時にそれまで私の周りを舞っていた桜を全てオベリスクに纏わせた。

狙いは . . . 心臓”コア”。

私は狙いを定めた。

「いっけえええええッ！！」

そしてそのまま投擲した。14歳の私でも、吸血鬼真祖の亞種だとしても、身体能力は成人男性の数倍に匹敵する。更に桜の刃を纏わせた状態だ。無論、ダメージが蓄積した敵が避けられるはずもなく、放たれた槍はコアを貫通した。

Rewrite11・時の進まない世界2

- View kazuki -

命とカルトが残り命が死闘を繰り広げている頃、俺達は魔法陣の中心近くのビルに来ていた。

奏田ぐ、”魔法陣の中心には誰もそのままいけない”らしい。なのでこの近くのビルにある洞窟を使うそうだ。

「どうかなぜその事を？」

「昔、みんなで一回来たことあったから……」

「みんなで？」

「うん、貴輔やロック、ガーネットで休みの時にね。かなりボロボロにされた挙げ句に何も手がかりはなし」

「ええ！？局長が！？」

はやてがたじろぐ。やはりあれ程の術式が使える人がコテンパンにされるのは、俺でも想像付きにくい。

「でも事実だよ。敵組織の幹部に当たる人は非常に強いから……」

「マジか」

「うん、本当。私でも何回も痛手を受けた。けど……それでもあらかた倒してるから、昔ほどの敵はいないと信じたい」

そんな事を言いながら散策する俺たち。すると、はやてが地下への入り口らしき場所を見つける。

「あ、あれやない？」

「うし、じゃあ行ってみるか」

「待つて」

奏が駆け出そうとした京谷とはやてを制した。俺は直ぐ様入り口の先を見やる。

「 . . . 魔物！！」

見たところ数は四。タイプはアンデットだろうか。だが、アンデットにしては動きが機敏だ。

「 気をつける！！そいつあ人間だ！！」

「 な！？」

京谷の叫びにはっとする。よく見れば目は虚ろだし、包帯やら壊れかかつた鎧を着けているが確かに人間だ。

「 やりにくいな . . . アルル！！」

『うん！..』

来る前に予めユニゾンしていたため、普段よりは機敏に動ける。素早く黒龍を取り出し、敵の一撃を刀の腹で受けれる。

「 遅え！..」

それを払い、兜割りで切り捨てる。左右に別れた半身から、勢いよく鮮血が吹き出す。

「ひ . . . つ！」

本場の殺人を生で見たためか、はやは小さく悲鳴を上げる。対照

に京谷はかなり苛立たしくしている。

「なんで斬りやがった！？」

「はあ！？」

他の攻撃をいなしつつ、場違いな怒りを向ける京谷に俺はまともな答えを返せない。

その間にも、左右から穿つてくる一撃をかわして間合いを取り、剣に魔力を込める。

「破魔……竜王陣！！」

固まっていた箇所に範囲攻撃を撃ち込み、決着をつけた。敵の無力化を確認してから刀についた返り血や脂を振り払い、鞘に納めて振り返った瞬間。

パンツ

乾いた張り手の音が駆けした。

「テメエ……今自分がなにしたか分かつてんのか！？」

「見て分からぬのかよ」

「なにがって、お前は罪がない人間を殺したんだぞ！？」

そこでようやく意味を理解した。

京谷が怒りを露にした理由。それは、いくら刃を向けようと自らの真の意思でないなら殺めないという己の信条からだろ？

「罪があろうとなからうと、刃を握つて現れた以上はそれは等しく戦士だ！刃を握り、殺めようとして来る奴を斬つて何が悪いんだ！」

？

対照に俺は、”義一文字”を信条にしている。

これは、”自らが正しいと思ひ道を自らの戒めとせよ”という意味を持たせている。

なのでたまにみんなと意見が違える。

「だが……」

「そこまでよ

奏が京谷を制した。さすが局長、貫禄のある行動だ。

「京谷……確かにいきなり殺すのは少しあ芳しくないかも知れない。けれど、その不殺の信念は今回は捨てなさい。殺れるときに殺れる勇気がなければ、幾ら貴方でも死ぬ

「……分かりました」

渋々京谷も奏の言葉に従つた。恐らく、管理局の中で京谷を説得したり止められる上司は奏くらいであろう。その奏はふう、とため息をついてから俺の元に歩み寄る。

「まあお互に相反してる考え方だからぶつかるのは仕方ないけど、少し位は視野をね？」

「ああ……分かつてるよ、局長」

「うん。それじゃあ降りましょ」

「「「はいっ」「」」

そうして、俺が倒した屍を踏み越えて階段の前に立つ。軽く覗き込

んでみると、全く前が見えない。

「どんだけ続てるんだ・・・？」

「んー・・・」

奏は俺の疑問に唇に指を当てながら、考え込む仕草をする。数秒してから真面目な顔で、

「地下二階まで一直線」

と言った。

「「「・・・」「」」

それに対し、全員が黙り込む。理由は簡単。

「なんでそないに現実的な数字やねん・・・」「あまり長いと緊急事態に駆けつけるのがしんどいし、かといって短いと動きが分かられるから、この数字が一番いいんだって」「なぜその事を?」「倒した敵が雑学で・・・」

奏が倒した魔物はオッサンか。

「世の中には親切な魔物があるんやねー・・・」

「それは人間と同じで、優しい人もいれば酷い人もいる。結局は見た目程度の問題」

「まあ今回の敵は好戦的そうだがな」

「なはは・・・」

とまあ、軽い無駄口を叩きながらそこそこ長い階段を降りる。最後まで降りてくると、目の前には広い空間と三つの入り口があった。

「なんか……いかにもって感じだな」

「全くだな」

ふたりして同じ感想を述べる。しかし、そんなことよりも進み方をどうするかだ。

「局長はどうします?」

「ここの場合は、私と京谷と一騎がそれぞれ行くのは確定。問題ははやてをどうするか」

「私?」

奏の分析にはやはては目を丸くした。なぜ呼ばれたか分かつていらないらしい。

「確かにまあ……敵の強さが分からない以上、おいそれと連れていけんよな」

「ああ、詠唱しないとほとんどの攻撃が使えないはやはてを守りきるだけの戦力がいる」

「なんか酷い言われようつや……」

「一騎は?」

「俺あ無理だ。多分自分だけでいっぱいいいっぱい」

「そう……なら京谷がいいかな。私のハーモニクスはすごく魔力食うし、分身制御だけで一騎みたいにいっぱいいいっぱいかも……」

「それにフィオネの存在もでかいだろ?」

「だったら一騎もアルルが居るじゃないか」

『残念ながらフィオネほど私は強くない』

3人の作戦会議中に京谷のセリフにふと、アルルがフォローを入れる。

『やうかな？ やつたことないから分かんないけど……』
『……やりたいとは思わない』

同じくコニゾン状態のフィオネからアルルに念話で話しかけたが、アルルは正直やりたくないさそうだ。

「つか手数の豊富だから言えれば、京谷に任せるのが一番いいだろ」「ん……それでいいか？ はやて」

ショウがないな、と言わんばかりにはやてに聞く。

「ええ！ ？そ、そらあ……京谷くんがええなり……」

対するはやはわざかにどきどきしている。それを見た俺と奏は顔を見合わせて首をかしげる。

「ま、まあ……私と一騎が単独、京谷がはやて連れていいくので良いのよね？」

「ああ、行く扉は一騎と局長から決めろ」

「俺から？」

「私が！」

ふたりして疑問系で聞き返す。

「ほり、一応俺が一番強いからどん尻でな」
『……つまりただの自慢と（ボソッ』
「なんか言ったかフィオネ？」

『なんでもないよ。ホラ、一人とも早く』

フィオネに急かされたので、俺はどうしようか考える。早い話の穴選んだらいいかはさっぱりなので、勘で選ぶことにした。

「じゃあ俺左」

「私は右で・・・」

「じゃあ俺たちが真っ直ぐでいいのな」

これでどうするかが大体決まる。すると、奏がバリアジャケットのポケットを漁り出す。

「これを、みんなに」

そう言つて奏が手渡してきたものは、小さい懐中時計だった。

「こいつあ・・・カシオペアか」

「うん。これは昔の教訓を活かして私達が緊急脱出用に造つたもの。オリジナルじゃないから使い捨てだけれどね」

カシオペア。

それは時間を自由に行き来する事が出来る封印級の古代遺産である。しかし、単体使用には最低でも魔力ランクSSSの魔力を必要とするため、戦略的には使いづらいものだ。

奏はかつて、この古代遺産の回収任務の折に解析し、このような簡易タイプを貴輔が造つた。

さて、この簡易タイプは管理局の魔力充填施設により一回分の跳躍に必要な量を充填し、さらに行き先と跳躍時間を完全に設定させることで、簡単にしている。

さらに便利なことに、10人までの生体反応を記録することでき、その者を同時に跳躍させる機能も内包している。

「これを誰かがピンチになつたときに使えば、私達は強制的に管理局に飛ばされる……。だからどうしようもなくなつたときは起動させて」

「だがAMF敷かれてたらどうするんだ?」

「大丈夫……これに充填された魔力は少し特殊なものだから……」

「

特殊なものと言われても……と思つ。

「とにかく大丈夫だから安心して使つて?」

「ああ、了解だ。んじゃ……行つてくれる」

俺はそう告げると、左の通路を一直線に駆け出した。

-view mikoto -

「ん……」

「起きたか」

「なんとか……つて私氣を失つてたのね……」

少々情けないと想いながら、私は軽く体を動かして立ち上がる。

カルトさんの話によると、私は桜華狂咲を使った後着地に失敗して頭を強打、しばらく気絶していたそうだ。

ちよつと痛みは残るがたいした外傷もないし、吸血鬼ならではの治

癒能力もあるので私には問題はない。

「しつかしテメエもテメエだ。あんなえげつない技をよく思い付いたもんだ」

「なはは . . .

私はポリポリと頬を搔いた。さつきのはほとんど勢いで使っていたから所々記憶がない。

そしてしばらく無言の時間が続く。その均衡を破ったのはカルトさんだった。

「月城 . . . テメエは覚えていないかも知れねえが、桜華狂咲は”自らを偽く見せるための技”つってたよな」

「え . . . 私そんなことを？」

「やっぱり覚えちゃいねえか。とにかく、そう言つてことをテメエは言つた。それになんか理由はあンのか」

そう問われて、私はしばらく考え込む。そして、口を開いた。

「はい . . . 一応」

「そうか」

え、そんだけ？

「別に過去を聞きてえ訳じやねえよ。それにどうこう経緯でみんな危険な技を思い付いたのかもな」

カルトさんの言葉に私は黙り込む。それをよそに、カルトさんはまだ話を続けた。

「力を身に付けるつづるのは、それ相応の代価があることくらい分かる。月城がその技を使うに当たって”何を望んだのか”は知らねえが . . . 」

そこでカルトさんは立ち上がり、私にあわついと/orionギヌスを向けた。

「もう少し回りを見ろ。お前が思つてるほどあいつらは無関心じゃねえよ」

「 」

「今の桜井はともかく、京谷は異常に強い。強いからこそ脆い。あいつら一人とも、辛いことを抱え込んで俺達に見せようとしたしねえからな」

「 . . . なにが言いたいんですか？」

「要するに、気を向かせるんじゃなくて向けてやれってことだ。 . .

・追いかけんぞ」

「 . . . はいっ」

いつの間にかロンギヌスを担ぎ直し、京谷くん達が飛んでいった場所に歩いていくカルトさんの背中を追いかける。

「恋はまだ私には分からぬけど . . . ”槍使い”としての憧れは、カルトさんですよ?」

「やめろ、氣色悪い！」

「えー」

「セレナでも良いだろ?が

「短槍と長槍じゃまた扱いが . . . 」

「あー、はいはい」

そのカルトさんの背中を見ながら思つ。

私の目標は、”カルトさんを越えること”だつて。

- side ??? -

「あいつら三つに別れたな」壁に身を持たせかけて腕を組むマント姿の男は虚空に投影されたスクリーンを見ながら呟く。

「一見バカをしているよつには見えますが・・・」

「分かっている。あやつら・・・特に真ん中と右を行く者は非常に驚異だ」

「対策は？」

「左にはグンドラム、中にはスレイ、右には真夜がいる。スレイは兎も角も、左と右の輩は倒せるであろう」

男は少女二人の問いに答えた。少女の一人は少し不安そうな顔をしている。

「アサキム様の計画は完璧とは言え、やはり・・・」

「大丈夫だ、アサキム様を信じろ。それに迎撃だけなら・・・」

そこで言葉を切り、男は試験槽に漂う虚ろな瞳をした栗毛、長髪の少女を見ながら言った。

「黄昏の姫御子であるこの少女が居る限り、我らに敗けはない」

あれから3分くらいが経過した。走っても走っても同じ風景だから正直眠くなつてくる。ちなみに飛行魔法ではなく、自走だ。

「長いな . . .」

避難用の地下通路だからだろうか。

もうしばらく走ると視界が開け、急に大きなフロアに出た。

「いじは . . .」

辺りを見回す。巨大なホールになつているよつで200メートルほど先には、その先へ進む道があった。

「先に進むか . . .」

そう呟いて、歩を進めよつとしたその矢先。

「テメエが侵入者か?」

突然、後ろから異常な威圧感を感じた。今まで生きてきた中でもこれほどまでの威圧感は感じたことはない。

「返事なしか . . . んなら」

そして、何かを投げてきた。俺はハツと我に返り瞬動で一気に避けた。俺が離れた瞬間、俺が居た場所には戦斧”ハルバード”が突き

刺さっていた。

「 . . . ! !

俺は背中に悪寒が走るのを感じた。あと一呼吸遅れていいたら、間違
いなく俺は死んでいた。

体勢を建て直し、俺は投擲した男を見やる。

「な . . .

「顔の事なら黙つてな。この顔の感想なんぞとに聞き飽きた」

そう言つて、狼の顔をと風体をした大男は投げたハルバードを回収
しながら呟いた。さらにもう一方にはバトルアックスを握っている。
よもやあの一本を片手ずつで扱うとは尋常ではない腕力である。

「さあ、テメエがここに来たつづことは俺たちの田論見を潰すた
めだろ?」
「田論見?」

俺達の目的はあくまで敵戦力の調査と魅音の追跡だ。狼男は激しく
驚く。

「なにも知らずに来たのかよ! ?」
「いや、お前らが何かは知らねえし」
「じゃあテメエはなんでここに来た! ?」
「魅音の追跡だ」

一応目的だし、知られたといひでいいと言つわけでもないので真面
目に答えた。しかし、狼男は気になる一言を言つたな。

「つか田論見つてなんだよ」

「言つわけねえだろうが小僧が」

「じゃあお前に勝てば教えてくれるか?」

「俺にか? わはははは! -」のグンドラム様に勝とうとするなんてな!!」

なんか高飛車だなこいつ。グンドラムと名乗った狼男は、でかい声で笑う。そしてハルバードをひとつ回しすると、真面目な顔になった。

「小僧の馬鹿正直さに免じて、勝つたら俺様がいる組織について俺様が知らされている範囲で答えてやるよ。んなら、アサキムの野郎も文句はないはずだ」

また気になる単語を叫ぶ。聞くべき事がだんだん増えていくな。

「構えな、小僧」

「 . . . 無論だ」

俺は白龍、黒龍と共に具現し抜刀する。そしてユニゾン状態のアルルに話しかけた。

「アルル」

『なに?』

「念のためにアームドモードの安全装置外しといってくれ」ヤーフティ

『 . . . 使えるの?』

「もしかしたら使わないとマズイかもしねい」

『 . . . うん』

アルルはわずかに躊躇つたが、了承した。

「行くぞ、グンドラム」

「オウ」

「「「」」

お互いがしばらく沈黙し、目での牽制が続く。通路内に僅かのつむじ風が舞った刹那、俺とグンドラムは互いの元へ駆けた。

「「ツ！..」」

バトルアックスと白龍が火花を散らした。グンドラムはすぐさま弾くとハルバーを直下に振り下ろす。俺は瞬動で間合いを取り、白龍に魔力を溜めた。

バチイツ

そして閃魔・飛光撃。閃光はグンドラムの左腕に直撃するが、まるで聞いていないようだ。

「ハツ！ 痒いなオイ！？」

グンドラムは再びハルバーを投擲した。この大仰な攻撃だ、隙は大きい。最低限の回避でグンドラムの元に駆ける。

「おう！？」

「だああ！！」

黒龍のスキルである黒炎を纏わせての右払いの一閃。その炎はグンドラムの体をわずかにだが焼く。

「珍しい刀と思つていれば古代遺産の刀とはな。道理で一発一発が重いわけだ」

「やうやくどうも」

黒龍の黒炎を纏わせてしまつと、白龍を持つのが億劫になるので白龍は自らがいつ危険に晒されてもよいように、いつでも抜ける状態にセットしておいた。

「扱う奴も手練れなら良いんだがな」

「手練れかどうかは . . .」

俺は魔力の収束を開始した。収束中は特性上隙が出やすいものだが、俺は京谷との訓練で戦いつつでも収束する術を身に付けている。とはいえグンドラムのバトルアックスをいなしながらの収束は集中力を非常に使う。

ほどなく収束が完了した俺は、振り下ろしの一撃を加える。さすがにバトルアックスで圧し負けると思ったのか、グンドラムは瞬動で回避し距離を取つた。

「破魔 . . . 竜王陣 . . .」

かわした先にすかさず叩き込む。タイミングはバツチリだ。

「ふん！？」
「なー？」

だが、グンドラムの気合いの一閃は竜王陣を見事に止めてしまった。貴輔の言つた通りか . . . 斬魔術が効かない。いや、”今の俺の技量では届かない” という事だ。

「はっ、まだ甘いぞ」

「！？」

「気づけばすでに田の前。力任せの一撃をモロに受け止めてしまって、バランスを崩す。

「ハアツ！」

さうこ下段の回転斬り。こいつを食らえば致命傷だ。
まず白龍で止める。無論片腕で止められるなら苦労しない。圧され
つつ白龍の切つ先で土を掘むようなイメージで白龍を軽く押し込む。

「オウ！？」

グンドラムは驚きの声をあげる。それは驚くだらうな。基本的には
高速歩術である瞬動を腕を使って行ったのだから。

「ふん、スピードは超一流ですってか。だがグンドラム様に決定打
は叩き込めないようだな」

グンドラムの言う通りだ。基本的に斬魔術が俺の戦闘スタイルであ
るため、それが効かないとなるとかなり致命的だ。となると。

（新しい技を作るしかないのか・・・）

よもや実践の場で新しい技を作らねばならないとは。博打も甚だし
い。

（いや、いくつかは特に考えなしでも出来るな

俺はまず一つの技を思い付いた。」こつならまあ簡単に撃てそうだ。
俺は黒龍を上段に構え、気を集中させる。

「 . . . ?」

対するグンドラムもこちらの行動に怪訝を感じながらも攻撃に対応できるようにする。

その刹那に俺は駆けた。

「つーー？」

「雷・鳴・剣！！」

振り下ろしと共にグンドラムに落ちる極大の雷。バトルアックスに遮られたとはいえ威力は非常に高く、グンドラムに雷が直撃した瞬間土煙が巻き起こる。

「ガアーー！」

これは俺の稀少技能”雷変換”を利用した一撃だ。魔力だけの雷だと威力は落ちるが、この技はたぶん外で天候が悪ければさらに威力は上がるだろう。

叩き込んだ後、俺は間合いを取るために一旦離れる。しばらくして土煙が晴れ、その先には片膝を突いたグンドラムがいた。

「ハツーまさか稀少技能持ちはな」

「 . . . 正直なところ思い付きだがな」

「 . . . そうかい」

そう言ってグンドラムは立ち上がり、バトルアックスを捨てた。いや、獲物を”ハルバード”のみにした。

「バトルアックスは俺様にとつちやオマケに過ぎねえ。片手斧はじ
つくりこねえんだ」

そう言いながら、ハルバーを自在に回す。僅かにぶれて見える辺
り、その速度が伺える。

「まだ小僧には隠し球があるんだろ。俺様も本氣で戦つてやるつ」
「 . . . ふん」

この時の俺はたぶん笑っていたはずだ。そしてそれはたぶん勝利を
確信した笑みではない。例えるならなのはらが模擬戦してるときの
笑みだな。

俺は、戦いを楽しんでいた。

「オラツー！」

先程からグンドラムの猛攻が続く。大きく薙いだと思えば、流れる動作で持ち手を使つた突き。縦に振り下ろしたと思えば突き上げ、さらに突ききつた後からの体術など多彩な攻撃で苦しめてくる。魔力を持つてしなくても圧倒されると言つことは想像を絶する使い手といふことだろうか。

「オラビリした、怖じ氣ついたのか！？」

強烈なラッシュユをかましながらもべらべら喋るグンドラム。これだけ喋りながらも隙がないのはさすがとしか言いようがない。

「ハアー！」

「うーー？」

僅かな攻撃の隙を突いて竜王刃を叩き込む。グンドラムは繰り出しつけたハルバードを強引に引き戻し距離を取つた。

「くーーー！」

「当たればダメージを貰えられないわけではないみたいだな」

だが、どちらかといえば明白だ。斬魔術より新しい剣術を生み出さなければならぬ。

(雷鳴剣はさすがにファイニッシュユじやねえと不味いが……グンドラムの動きを見る限りじゃ支障があるわけではないみたいだ)

等と考えているとグンドラムがまた突撃してきたので右に左に受け流しながら思考を巡らせる。動きを鈍らせるのを第一とした一撃。

「がら空きだぞ！」

「つー？」

グンドラムの一撃を間一髪でかわす。危ない、後少しで真つ一つだつた。

・・・あ、これだ。

咄嗟に閃いた俺は、そのまま反転しつつ下段を薙ぐ。グンドラムはハルバードの柄で受け、次の動作に入った。

「つおー！？」

すぐさま瞬動をかけ、グンドラムの視界から消える。

「ビーンだー！？」

グンドラムは辺りを見回す。その俺はビーンこるかとこつと。

『『デラゴン・スレイヴ』

「上かー！？」

グンドラムの上空から遠距離斬撃の十八番、デラゴン・スレイヴを撃つ。今回はアルルの詠唱と黒龍の発火、さらに雷変換のおまけ付きだ。

そこからさらに虚空瞬動を使いグンドラムの背後に回つもつ一閃ドラゴン・スレイヴを撃つ。名付けてクロスサンダー。これなら……！」

「甘いぞ、小僧」

だがグンドラムの方が速かつた。今までに撃とつとした矢先に回り込まれたのだ。

「しまつ」

そう言おつとした刹那、背中を袈裟懸けに斬られた感じがした。そのままに強烈な痛みが走る。

バランスを崩した俺は振り返り、せめてもの抗いに撃とつしていたスレイヴを叩き込む。

しかし無理矢理振るう剣撃が当たるはずもない。

為す術なく、グンドラムの続く蹴りで叩き落とされた。

「悪いな、雷には耐性があるんだよ」

「……だが雷鳴剣は効いた筈だ」

「まあな。ハルバード云つて感電する分にゃ とすがに無理があるが」

「えられたのは偶然と言つことなのだろう。どうやら直接撃つのは厳しそうだ。となると雷鳴剣でダメージを

（・・・悔しいが、俺には何も出来やしねえな）

自分の非力を悔やむ。となると、やはり龍牙天斬に頼るしかないのか。

(いや、ここで使うよつじやまだだ。次の一手を . . .)

『一騎…!』

思考を巡らせる俺にアルルが話しかけてきた。

『どうした』

さすがに口は出せないので念話を選ぶ。視線はグンドラムに向いた
ままだ。

『傷を私に転移させて!!』

『 . . . 構わない。アルルは止血と鎮痛に専念してくれ』

『でも!!』

『大丈夫大丈夫』

そう言って、俺は立ち上がった。

「ほう . . . ? 結構深く抉つたつもりだったんだがな」

グンドラムの一撃は確かに致命傷になりえるものだった。下手をすれば体が動かなくなつたかもしれない。だが現にこうして立ち上がれている。

それはなぜか。

ぶつちやけ俺にも分からん。ただ”避けなれば”と全身で感じたことは覚えている。

「 . . . まだ隠し球がありそうな田だな」

俺の瞳を牽制しつつグンドラムが問う。

ああ、あるとも。俺にしか使えない一撃必殺の刃が。

「悪いが、見せてやれるのは一回だけだ」

「構わねえぞ。どうせテメはここで死ぬんだから」

「そうか、それは良かつた」

俺は黒龍を右に突き出して魔力を極限まで練り、刀に込めた。ありつけの魔力を込めるので、程無く許容限界を超えた刀は余剩魔力を噴出する。

「おお・・・

グンドラムですら簡単を上げるほどに濃い魔力。そしてそれはあの時の龍を作った。

”龍”は咆哮を上げ、田の前の敵を喰らう時を今か今かと待ち続けている。

「すげえじゃねえか

「これでもまだ・・・

黒龍を両手で握り、切つ先を前へ向けた。”龍”を作つて尚、余剰な魔力は噴き出し、俺の周りでつむじ風となり荒れ狂う。対するグンドラムも、ハルバードの切つ先を地につけた突撃の体制で構えている。

先に動いたのはグンドラムだ。巨体に似合わない機敏な動きで迫つてくる。しかし。

「遅え！..」

それより先に、俺は刀を突き出した。切つ先は至近距離まで迫つていたグンドラムの左脇腹を捉える。

「ぐおっ . . .」

「おおおおーーー！」

叫び声と共に、”龍”が撃ち出される。放たれた”龍”はグンドラムを喰らひ、そのまま引き摺るよつに翔ける。

「ぐおおおーーー！」

グンドラムは逃れよつともがくが、簡単に逃すはずがない。”龍”はグンドラムを喰らつたまま壁に思いきり突っ込んだ。

「がはつ . . . ! !

それでも尚”龍”は突き進もつとしたが、程無く魔力結合が解けて”龍”は消失した。

「やつたか . . . ?」

グンドラムを警戒しつつ、龍牙天斬の着弾点へ歩を進めた。土煙が晴れてくると、そこには左半身の一部を失い血まみれのグンドラムがいた。

「はつ . . . 強いじやないか」

「取り柄なんぞこんなものしかないがな」

余剰魔力を解きながら答える。しかし、やつていつやつてしまつたな。

腹を貫いていたら即死か . . . 。

「はっ . . . とりあえず約束だ。俺様が知る限りのこと語つてやるよ」

「それより傷は大丈夫なのか」

「心配すんな、この程度で死ぬほど俺様は弱くねえ。これでも左腕は三本目だ」

三本目。その言葉から、グンドラムも飽くなき精進を積んで強くなつたとこりとを証明するのに十分だつた。

「で . . . テメエは何を聞きたいんだ？」

「そうだな . . . お前達は何者か、つてのを聞こつか」

「俺様達か . . . 俺様が所属している組織の名は特にはねえ。下坂魅音の負の遺産とも、時の支配者とも呼ばれている」

「. . . それで？」

「んで、この組織 . . . あー仮にこの世界の名から取つてジェネシスとするべ。こいつは約40年くらい前に発足したらしい」

「なー?」

40年前。それはちょうど魅音達が活躍しており、さらに魅音達が携わつたあの事件と関連があるところなのだろうか。

「目的は？」

「知らね。秘密の悪の組織がやることと言えば世界征服じゃね」

そんな適当でいいのか。

「まあともあれ、その組織はなんらかの一環として下坂魅音の能力に手をつけた」

「闇変換か？それとも、”冥界の女王”か」

「たぶんどつちもじやねえか。闇変換すら、大概の魔界の連中は全体の三割も保有していねえ」

「そりなのか？」

これは意外なことを聞いた。魔力を自然界の力に変換する技能がそこそこ重宝される理由が分かる気がする。

「まあそれもなんだが、こっちの方が重要だ」

急にグンドラムは真剣な瞳を寄越した。その眼差しはしっかりと俺に向けられている。

「詳しいことは知らんが、アサキムの野郎が言つには下坂魅音の魔力は魔物を精製するのに必要な成分が含まれているらしい」

「確かアポカリップス……だつたか」

アポカリップス。

默示録という和訳が示す通り、禁断の成分を指す。この世界に於ける自然発生及び魔界の然るべき手段で精製された魔物には例外なくこの成分が含まれている。ちなみに効力は未だに分かつていない。魔界出身の管理局員も口を揃えて”我々も分かつてない”とのこと。

ただ試しにその魔界出身の管理局員が死んだ魔物から全てアポカリップスを抽出したところ、魔物の肉体結合が崩れ霧散したという実験結果から、一応魔物を構成する上で必需成分という事が立証されている。

それが立証された後、管理局は造られたアポカリップス抽出兵器によ

る掃討作戦を実行してしまったため、一度魔界と管理局で戦争がかつた。その折に、質量兵器と化学兵器の使用が禁止されたそうだ。

「意外と博識じゃねえか。そうだ、そのアポカリップスが下坂魅音が保有し、かつその純度がどの魔界の個体よりも高かった」

「つまりプラントの苗床にして、より強力な魔物を造つて自らの尖兵にしようとした．．．と。じゃあ40年前のジェネシスの作戦は成功したってことか？」

「ああ、成功した。それによつて数多の強力な魔物を産んだらしいぞ。例を上げるならヴォヌス、オズマ、アバドン、スタイルヴ．．．」

「

グンドラムは手当たり次第に魔物の名を上げていった。そしてそのどれもが、管理局で倒せば追加給金が出るような大物だった。

「．．．確か管理局の記録では魅音を捕らえていた組織は壊滅したはずだ」

「ああ、今の管理局局長を筆頭とした精銳舞台と協力者によつてな。だが、管理局は下坂魅音を見つけることは出来なかつた。その間も大量に造られたみたいだな。ある者は討たれ、ある者は未だ猛威を振るう。それらの繰り返しが」

「なるほど．．．じゃあ魅音が今自由に飛び回つているという事はなんらかの形で逃れられたのだな」

「ああ、2年前に自らの魔力を炸裂させて脱出したらしい。それから今に至るまであらゆる世界を飛び回り、自らの魔力で造られた魔物を潰して回つたんだと。だからこそ組織は再び捕らえようとしてやがる。．．．まあ今の組織にや今の下坂魅音を捕らえることは出来ないだろうな．．．」

グンドラムは遠くを見るような瞳を宙に向けた。その相貌には、僅

かに哀愁が漂つてゐるよつとも見える。

「俺が組織について知つてることはないのくらうだ。他に知りたいことはあるのか」

「……この組織のボスの名は」

「アサキム・ドーウイン。前組織の唯一の生き残りだ」

「……どうか」

そう言つて俺は立ち上がつた。傷はアルルの治癒魔法で既に癒えている。

「もう行くのか」

「どうやら立ち止まつていい余裕はないらしい」

「……そうかい。じゃあ最後に忠告だ。アサキムの能力、”時間跳躍”と”黄昏の姫御子”には気を付けな」

「なに?」

扉へ歩を進めていた俺はそう言われ、ふと足を止めた。声の主、グンドラムは既に意識を闇に沈めたようだつた。
俺は振り返り、再び扉の元へ歩を歩めた。

「……アルル」

『なに?』

「全部覚えたか?」

『うん。一騎も覚えてるんでしょ?』

「……ああ」

それきり会話は途切れ、廊下には歩いた音が響くばかりとなつた。

「グンドラムがやられたようだす

少女の報告にて、鎧無しの刀を携えた少女は僅かに目を見開いた。

「グンドラムはんが、あのシンシンの少年やりますなあ」

「他の部屋は？」

マントの男は、報告を寄越した少女に問いかけた。

「スレイは・・・見事に押されてますね。真夜の部屋はなんか凄いことになります」

「まあ他一人は手負いに出来れば良いほつか。んで、月詠。ミッドチルタ襲撃の準備は」

先ほどの刀を携えた少女・・・月詠は二刀一刀しながら答えた。

「はい、こつでも行けますえ。あの黄昏の姫御子の状態も良好みたいですわ」

「楽しそうで何よつだ、月詠さん」

その間に全員が振り返った。報告を寄越した少女は目を輝かせる。

「アサキム様！」

「ああ、ユカリさんもおつかれさま」

ユカリと呼ばれた少女を労いながら、アサキムはマントの男の元にて

歩み寄つた。

「君は行かないのかい？」

「あいつらだけでは不安だ」

「相違ない」

アサキムはあくまで冷静だ。それをマントの男は微妙に感じている。姿形だけは一、三歳くらいでありながらそこそこ良い顔しているだけあって少しもつたいないと感じている部分もある。ちなみにアサキムを呼び捨てにするのはこのマントの男だけだ。

「アサキムはどうするつもりだ」

「僕かい？ 僕は . . . 」

アサキムはモニタを見ながら言つて。

「そうだね、僕はあいつらを止めるとするよ」

「了解した。では用詠、ゴカリ、フー、アスナ」

「 . . . はいっ . . . 」

ちなみに黄昏の姫御子 . . . アスナは無言だった。

「ミッドチルタ襲撃作戦 . . . 開始だ」

- s i d e m i d c i r u t a -

「暇ですわね . . . 」

「隊長がいないと仕事が回りませんから」

ミッドチルタにある時空管理局本局は昼下がりの休憩時。

ある意味管理局の最大戦力の一員であるスノウとシオンはゆつたりティータイムと洒落込んでいた。ちなみに一人ともダージリンティーだ。

「そう言えば新人の星川姉妹は仕事に慣れましたの？」

「そこそこかな。さすがに10歳だし、難しい仕事は回せないし」「アレでも壊すことにはそちらの魔導師にひけを取らないのが恐ろしいですわ」

「じゃあスノウは化け物ね」

「わたくしが化け物なら京谷はなんなのですの・・・」「んー・・・」

シオンはしばらくながら考へ込んでからポツリと漏らす。

「・・・神帝？」

「それは今の彼の二つ名ですわ」

スノウは呆れながら紅茶を啜つた。

実はシオンは本局執務官でありスノウは自身の補佐である執務官補佐。管理局では雪の名前を持ちながら炎の技を操るスノウ、無口のまま辺りを氷漬けにして回るシオンの戦闘スタイルから”対極の雪女”等と揶揄されたこともあった。しかし、9月付けでスノウもうやく執務官となるため、スノウのラウンジ入り時から長らく自らの補佐としながら面倒を見てきたシオンとしては気持ち寂しいを持つていた。

「で、その星川姉妹は今何処に・・・」

「セレナやアリス、紫苑達と買い物に行くって言つてた。今頃5人も昼食かな」

「紫苑が？珍しいですわね。休みの日はいつも弓を引むか訓練かですのに」

スノウは半ばビックリしたよつに座く。シオンからすれば、カルトか自分としか余暇を過ごしていなやうな気がしてならない。

「……なんですか？その”かく”あなたもカルトか私としか過ごしていないよね”的な視線は」

「……………あなたも、読視術を？」

「お約束みたいなものですわ」

そう言って、スノウは紅茶を飲み干した。そして左肘をついて頬を乗せてスノウとしては珍しい姿勢を見せる。カルトにすら見せないやる気なしモードだ。

「あれ、スノウさんにシオンさんじゃないですか」

「どうかしたの、希来？」

「き、希来！？」

突然の希来の登場に冷静に対応するシオンに対し、スイッチオフになっていたスノウは半ば飛び上がるよつな間抜けな声をあげた。

「ど……どうしたんですかスノウさん」

そんな驚かれ方をされた希来はショックを受けながら聞き返した。

「な、何でもありませんわ」

慌てて平静を装うスノウ。一人の様子を見て、シオンは微笑ましく

なる。

「な、何を笑っているんですのーー?」

「なんか微笑ましくてつい . . .」

と、そこへシオンの端末に着信が入る。

「メールですか?」

「エマージェンシー音ですよ、シオンさんの端末の」

「何故にディープバー・ブルなんですか . . .」

そんな呆れ顔のスノウを他所に、対応するシオンの眼差しは仕事の
それだ。

「うん、私たちもすぐに準備するわ。大丈夫、ラウンズの権限で使
える人材は出来るだけ迎撃に当たらせる。じゃあようじく」

そう言つてからシオンは端末を閉じ、立ち上がる。

「どうしました?」

「緊急事態。謎の組織所属とおぼしき魔物が出たそよ。連絡は私
が行きながら回すから、一人とも付いてきて」

「オールライト

「了解」

- s i d e m i d s c i t y · e a s t -

ここはミッドチルタの首都東部。紫苑たちは星川姉妹との休暇の憩
いにこの場所を選んでいた。が、この場所で謎の組織 . . . ジェネ

シスだがまだそれとは紫苑たちは知らない……が目撃されたということで急遽仕事となつた。

「しかし突然仕事があ……」

アリスは残念そうな声を上げた。それを見ながらセレナは確かにとつなづく。

「じゃが、手練れで今回の事件の鍵を握る敵。儂らが出のうて誰が出てる」

紫苑はジョワイユーズを持て余しながら呟く。それを聞いて二人は改めて気を引き閉めた。

「大丈夫? 一人とも」

アリスは少しだけ不安そつなきらり、さらりを見て優しく話しかけた。

「はい」

「なんとか……」

「そつか」

アリスは一人の頭を軽く撫でてから立ち上がる。

『エネミー確認! 場所はミッド首都東部、第三地区! 数は00を越えてます!! 尚、同地点に魔力反応が2!!』

「だ、誰じゃ!?」

『映像、出ます!!』

モニターに投影された、一人の少女。全員が見たことある、馴染みの顔だった。

「優希．．．それとなの？」

「なんで二人があそこに．．．」

「今はそんなことを言つている場合ではない。ゆくぞ」

「「「はいっ！」」「」

- s i d e m i d s c i t y • e a s t 3 -

「でえやあ！-！」

「ディバイイン、バスター！-！」

なのはのディバイインバスター、優希のクロススレイヴが敵“動く石像”を捉える。

二人はこの近郊で簡単な体術の練習をしていたところを襲われた。救援信号は既に送つてある。

「ルナ、数は分かる！？」

『確認されているだけでも数は500を越えています』

「500．．．」

なのはが特に驚くでもなく、へえ．．．と呟く。これがstt時代のなのはならたぶん狼狽えていたはずだ。

「とにかく、手当たり次第に潰すしかないね」

「そだね」

二人は示し合わせると、一気に飛翔する。ある程度距離を取つたところで、一人は反転してカートリッジを撃ち込んだ。

「クロススレイヴ！！」

「クラスターストーム…シユート…！」

クラスターストーム。

サークレットクラスターの派生技でこちらよりも誘導性に劣る分、破壊力と弾数に秀てる今作限りのオリジナル魔法だ。対する優希も、湯布院戦で見せたよりも巨大なクロススレイヴを見せ、向かってきた敵を蹴散らした。

「まだまだあ…！」

さらにもう一発、今度は密集地点に飛び込み再びクラスターを撃ち込み、辺りを焼き払う。

「すごいですね、なのはさん」

「ま、管理局工ースは伊達じゃないよ」

そんなことを言つてはいるが、上から急降下してくる敵を捉える。なのははとつさに構えるが、不意に動きを止めたかと思うと敵は真っ二つに裂かれた。

「ふう、間に合つたかの」

「紫苑さん…？」

攻撃の主は紫苑だった。手にはある程度鎖を伸ばし、雷の刃を纏わ

せて固定したジヨワライユーズが握られている。

「速いですね」

「このスピードが、ナイトオブラウンズの売りじゅかりの。他にアリスやセレナ、もつ暫くすればスノウ達も来る」

それを聞いてなのはは思つ。ナイトオブラウンズは化け物かと。そして不意に、なのははフュイトの存在を思い出す。

「もう言えればフュイトちゃんは！？」

「む？ 今日は一緒じゃなかつたのか？」

「はい、今日はフュイトちゃん用事がある ・・・つて！..」

会話しながらも、やられない程度には迎撃する。それは紫苑や優希も同じである。

「用事？」

「はい、”魔法無効化能力”でしたつけ？その事を」

「 ・・・つ

その単語を聞いた途端、紫苑の血相が僅かに変わる。

「 ・・・まずは田の前の敵じや。後でその事を教えてほしい」

「はい！」

「私はフェイエトちゃん探しときまつ」

「待てい」

「ひゃん！？」

一目散に疾り出したなのはを紫苑は念動力で縛り上げた。

「何するんですか！？」

「阿呆、行方が心配なら端末で呼び出せばよこではないか」

「や、そうですね・・・」

いそいそと戻ってきたなのは通信端末でフュイトを呼び出す。何コールかの後、フュイトが応対した。

「フュイトちゃん！」

『なのはー…ビラしたの？』

「うん、さつき襲撃があつてね。フュイトちゃんのところにこいつてないか心配で・・・」

『あー・・・残念、もう来たみたい』

『えええええ！？』

なのはは驚愕の声をあげた。

「む、襲撃がそちらにも？」

『はい、神月一佐。私もすぐ出ねばなりません』

『ふむ、分かった。ならスノウ達はそちらへ向かわせよつ』

『分かりました』

そうして、フュイトの通信は切れる。

「では、儂らは敵を片付けるとするかの」

『はい』

全員がそれなりの距離に散開しようとしたその時、空から一條の光が紫苑たちの元へ降り注ぐ。

「ぐうー！？」

紫苑はジョワイユーズを振り回し、その光を打ち消した。すかさず、先端のアンカーを光の発生源へと投擲した。

「むつ」

攻撃の主、マントの男は予想外の射程にたじろぎながらも難なく弾く。

「遅いわー！」

さらに紫苑は接近しながら他端の錘を投げつける。マントの男はそれをかわし、魔力をまとわせた右腕を突き出した。

紫苑はわずかの動作で回避してから、ジョワイユーズをスサノオモード・・・先程の一定量伸ばした鎖に通電させ、殺傷能力を持たせた雷刃とさせた状態・・・にし、一刀両断にかかった。しかし、それは左腕で阻まれた。

「ぬつ・・・」

「血の気が多いな、真祖。そう焦るな・・・」

「貴様・・・なぜ私の素性を・・・」

マントの男は左腕を振り払い、紫苑を飛ばす。

「くつー！？」

「敵の戦力を調べることは戦略を練る上で大事なことだ」

「紫苑さんー！」

「来るなー！」

駆け寄りついた優希を紫苑は一喝して制した。

「二人は周りの雑魚を片してくれ。儂がこやつを倒す」

「倒す……か。構うまい、我の他にも味方はいるからな。有害な戦力は足止めできるに越したことはない」

「つー? 貴様……なんと……」

「我等ジエネシスは本時刻を持つてミッドチルタを襲撃する」

「な! ? ジヤあ京谷は……！」

「奴か。奴等は今頃アサキムが相手しておるかもな」

それを聞き終わるや否や、紫苑はジョワイユーズを右難きに振り払う。その一閃は、マントの男のマントを綺麗に両断した。

「む……なかなかやりある」

「貴様……引っ捕らえた曉には洗いざらい吐いて貰うぞ……」

紫苑はジョワイユーズを上段打突に構えた。

- side serena -

「つー?」

敵の斬撃が右肩を掠める。

セレナはすかさずジークフリードを向けるが既に敵は脇腹を狙っていた。

「しまつ

「パンツアーフィストオー! 」

アリスの一撃が敵に当たり、辛くも退ける。

「ありがと、アリス」

「例には及ばないわ。それより . . . 」

アリスは敵を見やる。敵は既に体勢を整え、次の攻撃にいつでも入るようになっていた。

「せっかく来たんやし、楽しませてもらわな困りますなあ」

鍔なしの刀の少女、月詠はセレナの攻撃の鋭さを楽しみにしているといった瞳だ。

「そこ私の一発入れた君、十分離れときんせー」

「なつ！？アンタ何言って」

「でないと、首。ハネてまいますよ？」

「 ッ！？」

アリスは本能的に、月詠はヤバイと感じた。僅かに躊躇つた後、距離を取つた。

「 」

「では、始めまじょか。 . . . 死の決闘を」

そう言つた月詠の瞳はあくまで純情無垢であった。

Rewrite13・//ツドチルダ攻防戦

- s i d e s n o w -

さて、ここはフェイトがいた国立図書館上空。フェイト、スノウ、シオンは襲撃してきたあらかたの敵を片付け、周囲を警戒していた。

「いやあ . . . スノウ達が来ると一瞬だね . . .」

「フェイトがトロいだけですわ」

「あつ . . .」

スノウの言葉に容赦と言つ言葉はない。優しさにも恋にも厳しさこ
も。

「それで . . . 何を調べていたんですの？」

「そうそう . . . これだよ」

フェイトはスノウの問いに、端末を開きつつ答えた。端末を立ち上げると、”魔法無効化能力”についての文献のデータが立ち上げられた。

「これは . . . 魔法無効化能力？」

「うん、湯布院から帰ってきたときにガーネットさんがちょっと話してくれたでしょ？だから気になつてさ」

「魔法無効化能力といえば . . . それはもう稀少技能の最上級の能
力ですわ。ちなみに所持者は今のところ確認されてない . . . 何故
それを調べようど？」

スノウの疑問に、フェイトは答える。

「ガーネットさんは魅音さんならいくつ数が多くても必ず倒すと、そう言つていました。それが本当なら、魅音さんを無力化する手立てが必要です」

「それで……魔法無効化能力なのですか」

フェイ特はこくりと頷いた。そこへシオンが口を挟む。

「でもどうして魔法無効化能力だけ？他にも魔法を無効化させるにかはたくさんあるように思います」

「うん、例えばヴォヌスとかね。貴輔さんの話じゃ 本来魅音さんを無力化するために造られた魔物だしね」

「けれど、先日の戦闘を見る限りでは大した効果を上げられなかつた……」

スノウも分析に加わる。しかし、それでも周りへの警戒の糸が切れないのでラウンズならではだ。

「ええ、AMFだと弱体化は出来ても魅音さんが動きを鈍らせるようには思いません。ですから、確実な方法を突き詰めると魔法無効化能力が濃厚に思います」

フェイ特の説明に、二人してつい感心してしまう。

「ようやく執務官としての責務が果たせるよつになりましたのね」「つづ……バカにしてる」

「していませんわ、素直に感心します……みんな散開なさい！」

「「……」「

スノウの檄にフェイントとシオンは一気に散らばる。その僅かな時間の後、一条の光が走った。

「あそー」――

フェイントが指差した先を、シオンは口に出すより先に氷の射撃魔法”ソードブレイカー”を数十発形成し撃ち込んだ。

「ちりー！」

攻撃先にいた三つの点は、舌打ちをしながら散開する。その内のひとつが突っ込んでくる。

「くつ！」

「私が受けますわ！！」

スノウは日本刀型アームドデバイス”村雨”を握り、ひとつ突っ込んでくる敵を受けんと立ちふさがる。

(目が虚ろ・・・?)

スノウは田の前の栗毛の少女の生氣のない瞳を見て僅かに怪訝を感じる。しかし、それはすぐに霧散した。

「つー！」

少女が振り下ろした大剣をスノウは華麗に避け、魔力弾を数発放つ。さらに回し蹴りを叩き込んだ。

ガツ

「……無傷！？」

煙から足を伸ばし、スノウの回し蹴りを相殺した少女は全くの無傷。そのまま距離を取ると、大剣を構え直し斬りかかってきた。

（戦いのプロと言つわけではなさそうですわね……）

スノウは村雨を炎で強化し、大剣を受けた。

だが村雨が大剣に触れた瞬間、村雨を纏っていた炎は焼き消された。

（呑まれた！？）

スノウは驚愕しながら、虚空瞬動で距離を取る。

「火龍咆哮波！！」

スノウは遠距離斬撃、火龍咆哮波で生まれた炎は辺りを焼き払わんと少女を飲み込む。

しかし、それさえも少女の周りでは何事もなかつたかのように阻まれている。

「本当に……やりますわね、フェイト……！」

スノウは、フェイトの見解の正確さに心底驚愕しながらも魔法が通用しない、目の前の少女の対峙に少なからず恐怖を感じていた。

スノウが栗毛の少女を相手にしていたころ、シオンとフェイトもま

た、別の二人の少女を相手にしていた。

「ソードブレイカー、ショートツ」

シオンは再びソードブレイカーをばらまく。シオンが対峙する黒毛ショートの少女・・・ユカリは氷の短剣を器用にかわしながら距離をつめてくる。

「ハーケンセイバー！！」

「ちい、また！！」

フェイトの至近距離からのハーケンセイバーを再びかわし、距離を取り取った。

「今よフー！！」

「わかった」

ユカリの掛け声に山吹色の髪に茶褐色の肌を持つ少女、フーは長い鞭をしならせて叩きつけようとする。

「ディレイリース、フリーズドライ」

だが、シオンはそれさえも読む。振り返り様に遅延ディレイによつて溜めていた氷の直射砲撃魔法フリーズドライを撃つた。

その青白い砲撃はフーの長い鞭を氷漬けにする。

「な・・・」

「私の得意とするのは手数と基本・・・。遅延魔法くらい造作もな
い」

等と言いながらも既に四つの魔法陣との20倍およびぶソーデブレイカーを形成している。

フェイトもユカリに対し、互角以上の戦いを開拓してくる。

「残念ですが、私達の勝ちです」

「はあ？」

フーの宣言にてシオンは間抜けな声を出してしまつ。だが、その瞳と振る舞いはハツタリを言つてゐるようではなかつた。

「気づきませんか？あなた達の周りの空間に・・・」

フーにそう言われ、シオンは周りを見渡す。すると、シオンとフートが居た空間は無限に広がる不思議空間と化していた。

「んなー！？」

シオンにしては間抜けな声だ。

「ひええ！？」

フェイトも驚愕な声をあげる。ユカリとフーは合流すると勝ち説いた顔をしながら言った。

「ふふふ・・・私の十八番、”無限抱擁”です。ここに閉じ込められたが最後、対象者の脱出は不可能です

「くつ・・・」

歯軋りするフートにあくまで冷静なシオン。ユカリはシオンの態

度が少しこれ好かない。

「 . . . もう少したじろしてもよくないですか？」
「別に、子の手の事はよくありますから . . .」
「あるの! ?」

何故かフェイトの方が驚いた。

「 じょうがないですね . . . 聞き分けのない子には . . . お仕置き
です」

シオンがパチンッと指を鳴らす。しかしながら起きない。

「 な、何がしたいの . . .」
「 気づきません? 自分のパンツがないの」
「 え . . . あれ、ウソ! ?」
「 . . . つ! ?」
「 ちなみに私の手中です」

シオンが手を開くと、少女には似合わなそうな黒いショーツが表
れる。しかし、一組だけだ。

「 そちらの茶肌の子は . . . 変態なの?」
「 ほつといてください! / / / ! !」

顔を真っ赤にして怒鳴るフー。無理もない、指パッチンで相方が下
着を奪われた上、自分がノーパンだとバレた日には激昂して当たり
前だ。

「 ぐぐーつ言わせておけば . . . 泣いて許しをいつても「ハーケン

セイバーー！」「無駄ですよ」

隙だらけのためにフェイトがハーケンセイバーを叩き込むが、攻撃はユカリをすり抜けた。

「ということは本体はもう居ないってことね . . .」

「そういうことでは、制圧が完了するまで貴女たちには大人しくしていて貰います」

そう言って、一人は消失した。残されたのはフェイトとシオン、そしてでかい長方形のオブジェがいくつも浮いているばかりだ。

「いやあ . . . 嵌められたね」

「. . . なんかいまいち深刻になれないのはなんですか」

してやられたりといった表情のシオンに対し、内心オロオロのフェイト。

「なにか策はあるんですか？」

「んー、特には」

「特にhattて . . . そう言えばさつきのパンツの転送魔法ってなんなんですか？」

フェイトはふと気になつたことをシオンに問う。

「ああー . . . フェイトは短期プログラムだったから知らないのかな。いや . . . 今の魔法学校じゃやらないか」

「. . . なんの話ですか？」

フェイトはわずかに怪訝を抱いた。シオンは愛想笑いを浮かべながら

ら返す。

「私も短期プログラムだつたんだけどね。教導官の人が凄く知識持つていてね。事ある毎に呼ばれては用途の分からぬ魔法を教えられたわ」

「それが . . . さつきの？」

「うん。さつきのは簡単な転送魔法の応用で、座標軸や空間認識能力を利用した”スチール窃盗”、だね。これは窃盗犯罪や銀行強盗の常套手段」

「ああー . . . よく聞きますね。他には？」

「他には私がさつき使つた”ディレイ・スペル遅延魔法”。これはフェイトも見たから分かると思うけど、魔法効果の発生のタイミングをずらすやつね。戦闘ではなかなか便利」

「へえー . . . 」

「 . . .まあ他には嫌いな先生のヅラをそつとずらす魔法や、ネジ巻き時計のネジを綺麗に巻く魔法とか実用するには馬鹿馬鹿しいものを . . . 」

シオンの苦労話を聞きながらフェイトは思つ。

エースになるのは大変なんだな、と。

さて、スノウが魔法無効化能力持ちの少女と戦い、シオンドフェイトが不思議空間に閉じ込められている頃、紫苑はマント男を相手に苦戦を強いられていた。

「雷穿蛇ツ！！」

紫苑の形成した幾つもの雷の鞭を、マント男は周囲に展開した黒い刃で綺麗にいなす。

さらに、魔法陣を使いゴーレムを召喚しては優希となのはの援護を妨害する。

「ふんっ！！」

黒い刃の幾つかを紫苑に向けて放つ。紫苑はジヨワイヤーズを引き戻すと、アンカーを振り回しすべて撃ち落とす。

「ほう・・・さすが吸血鬼の真祖。かの”闇の福音”にも劣らない力だ」
「ふん、妾をあの化け物と一緒ににするでないつ」

周囲は紫苑の儀式魔法によつて、天候が悪くなつている。それを利用して、紫苑はアンカーを空高く射出した。

「穿て稻妻！！」

紫苑が叫ぶと、アンカーに向けて雷が落ちる。それがアンカーに直

撃した瞬間に、紫苑はそのまま振り回してマント男田掛けて打ち込んだ。

「ぬおつー？」

マント男は驚愕するが、すんなりアンカーは止まってしまった。

（やはり遠いと多重の魔法障壁で止められてしまう。あやつらの援護はやはり欲しいが、ゴーレムの対応に追われる以上、期待が出来ない）

紫苑はどうすれば良いか、必死に頭を働かせる。

せめて隙を作る」ことが出来れば。

「……しかたあるまい」

そつ言つと、紫苑は一人に念話を飛ばす。

『なのは、優希』

『はいっ』

『……少し、手伝つてくれんかの』

『めつゝ厳しいんですけど』

『そこは妾がなんとかする。妾が援護に入る隙を作るから、二人には全力の攻撃を撃ち込んでほしい』

『……取れる時間は？』

『ざつと10秒じゃな』

『分かりました、やります。優希けやんも行けるよね？』

『はいっ！』

「何を考えておるかは知らんが、攻撃されても文句は言えまい」

そつ言つて、マント男は黒い刃を全弾紫苑目掛けて撃ち込んだ。紫苑は口を僅かに吊り上げると、左手をマント男目掛けて翳す。すると、紫苑目掛け飛んできた黒い刃が全て逸れる。

「なつ！？」

「驚くのはまだ早いッ！！」

さらじにて紫苑はなのはや優希の周りに居たゴーレム群をひと睨みするとい、両手をそれぞれに翳して握った。

それに合わせて、それらのゴーレムがひしゃげて爆散する。

「今じゃ……」

紫苑の叫びで、なのはと優希が構えた。

「エクセリオンモード、ドライブ！！カートリッジロード……」

「フュイス、ドライブ！！」

なのははカートリッジを一発撃ち込み、優希は自らの補助魔法フェイスをかけて突撃の準備をする。

「やらせるものか……」

「妾が相手じゃ……」

それらの妨害に入り立つとするマント男に行動させまこと、紫苑はインファイトを持ち込む。

かなり危険だが、マント男は意識は直すと紫苑に集中せざるを得なくなる。

しかし、紫苑は一騎やスノウブーツとはいえ近接戦闘は超エース

級。遅れをとる」とはあまり考えられない。

「ぬう！」

「はあつ！」

紫苑のスサノオモードのジョワイユーズが、マント男のマントを僅かに裂く。

「なんの！」

だがそれぐらいで出すむりのワカヤではない。マント男はすかで魔コボシ成、二十把玉が世の國田舎ナ一壁うごもうとする。

しかし、紫苑の先程の掌握による謎の攻撃によつて防がれてしまう。

flexelion buster
flexible buster

なのは達のチャージも終了したようだ。それを感じ取った紫苑はマント男のガードを突き崩した。

「ぐおつ ． ． ！ ！」

紫苑は距離を取りながら怒鳴る。それを聞いたなのはと優希はマント男を捉え、マント男の元へ突撃した。

「ハアアアアア！」

しつかり準備していただけあって、突撃のスピードも普段のそれを遥かに越える。

マント男はなんとか体勢を建て直す。それと同時に、なのはのレイジングハート・エクセリオンと優希のルナティックの初撃がマント男の魔力障壁に衝突する。

「ツー！」

「ぐうー！」

しかし、紫苑ですら厄介に感じる多重障壁。紫苑に劣るなのはたちがどうにか出来るようなものではない。

だがそれは、あくまで戦闘ならばだ。

今回のようにただ一発を叩き込むことだけに専念した全力攻撃なら、戦闘中における紫苑の攻撃よりも遙かに攻撃力がある。

さらには、なのはの必殺魔法のひとつ、エクセリオンバスターや優希の必殺剣フリンジングラッシュによる攻撃力は、管理局最強が集うラウンズ内では兎も角も管理局全体で言えばトップクラスの破壊力を秘め、さらには結界・シールド破壊の効果も持つ。紫苑はその二つの能力に賭けたのだ。

優希は2撃目、3撃目を叩き込んでいき、なのははカートリッジをつぎ込めるだけつぎ込んで行く。

すると、マント男の最後の障壁に僅かに亀裂が入った。それと、二人のファニーフィッシュが重なる。

「エクセリオン……バスター……ツー！」

「フリンジング……シユ……ツトー！」

なのはたちに出せる最高の一撃が、マント男の最後の障壁を碎く。それを見た紫苑は、再びジョワイコードに雷撃を纏わせる。

「よくやった……あとは妾に任せておけ……」

紫苑は直ぐ様虚空瞬動によつて、再び魔力障壁が覆つ前に攻撃を仕掛けた。

「だがつ……」

マント男も簡単に引き下がるはずがない。強烈な攻撃のために硬直してしまつたなのはと優希を払いのけ、迎撃体勢に入った。

「遅いわ……」

だが、紫苑の方が速い。速度も落とさず、懐を取つた紫苑は雷撃を纏わせたジョワイコードをマント男の体に巻き付け完全に動きを奪う。

「なんと……？」

「まだ終わらんよッ……！」

紫苑はチーンバインドでさらにきつく拘束する。そしてジョワイコードの柄（持ち手）を握つたまま飛び上がり、右手を高く翳した。すると、その中天に20型ブラウン管テレビくらいの大きさの雷球が形成された。

（いいまでやるかー）

マント男は短時間であそこまで考えた紫苑の戦術に感服する。

その間にも紫苑はチャージを完成させた。

「いっけえええええ！」

紫苑の雷球は身動きが出来ないマント男に向かつて一直線に落ちる。マント男はかわすことが出来る筈もなく、直撃を受けることとなつた。

- s i d e s n o w -

「ハツ . . . ハツ . . .」

あれからしばらく切り結んでは付かず離れずの繰り返しだ。魔力が飛翔にしか使われない分、魔力の消費は非常に押さえられているがその分体力は普段以上に使つていた。

(なるほど . . . 私に決定打を与えるまではなくともいなしきるだけの技術はあると言つことですか . . . といつかあの子のツレとウチのツレは何処に?)

少しだけシオンとフロイドの心配をするスノウ。まさか今ごろ栗毛の少女のツレに不思議空間に閉じ込められ、あいづことか談笑で盛り上がつているとは思いもしないはずだ。

「ああ、仕切り直しと行きますか

スノウは村雨の切つ先を栗毛の少女に向けた。

「あなた . . . 名前は？」

「 . . . アスナ」

そこで栗毛の少女、アスナはよつやく口を開く。

「アスナ . . . あなたのその力はなんですか？」

「 . . . 魔法無効化能力 . . . と、みんなは言っている。とても強力だつて」

あくまでアスナは淡々と言つて述べる。

どうやらフェイトの見解はビンゴだったようだ。

「 そうですの . . . 。では40年前、貴女は下坂魅音を無力化する作戦にいましたの？」

「 . . . 私はまだ10歳。たぶん、別の人」

アスナはそう言つが、スノウにはにわかに信じられない。しかし、アスナにわざわざ嘘を言わせる理由はないと思つたので信用することにした。

「わかりました。では勝負の続きと行きましょう」

スノウは村雨を構え直す。しかし、アスナは信じられない一言を吐く。

「 . . . 貴女は、私には勝てない」

「 . . . なんですか？」

その言葉に僅かにスノウの頭に青筋が走る。それに対し、アスナは両手に何かを纏わせ両手を近づけた。

「 ッ！？」

スノウはただならぬ力の奔流に驚愕する。

淡いオレンジの膜に全身を包んだアスナは虚空に突き刺していた大剣をひと回しして握り直すと、先程よりも遙かに速いスピードでスノウに迫る。

(迅い！)

アスナの右薙ぎの一撃をなんとか弾き、ブーストをかけ距離を取る。しかしそれを遙かに凌ぐ速度でアスナは猛追してきた。

ガキンッ

村雨と大剣が火花を散らす。

先に動いたのはスノウだ。アスナの力を巧く受け流し、その勢いを殺さないまま突きを繰り出す。
だがアスナも負けない。それを紙一重にかわし、インファイトを仕掛けれる。

(そこまで！？)

それをなんとか避け、スノウは腹にパンチを入れようとする。

「ガハッ」

だが、アスナのドロップキックの方が早かつた。スノウは思いきり図書館に突っ込む。

感掛け法。

それがアスナの使った技法だ。

右手に魔力、左手に気（特に決まりはないため、纏わせやすい方にそれぞれを纏わせるのが基本とされる）を形成し、合成することで通常の何倍もの身体能力と魔力耐性を得る”究極技法”のひとつだ。まうだろ？

今スノウが相手しているのはそういう相手だ。

「ぐつ・・・」

なんとか立ち上がり、村雨を構え直すスノウ。

魔力が効かない、身体能力は相手が上。

スノウは果たしてある意味最強の少女を倒すことが出来るのだろうか。

Rewrite13：「ドナルダ攻防戦（後書き）

作者「・・・こ」まで一氣投下となりまして申し訳ありません。このまでのまえがきあとがきは後日追加しておきます」

一騎「いいのか。。。？」

作者「仕方ないじゃない・・・更新できなくて読者さんを待たせるわけにはいかないから、一応のストック分を投下したのよ」

一騎「じゃあ何から話せ?」

「このからの話は途中だから結構とびとびになるかな……。
読者のみなさん申し訳ありません」

一騎「で、次回予告は」

作者「いまのところスノウがぼくぼくにやられてるからいい」の救済と、シオンドフハイトの件。そろそろ京谷のところに視点を戻そつかなつて」

一騎「そろそろ起承転結の転に差し掛かつてきたな」

「どうだね。」
「いいださー」

命「次回もまた見てくださいね！リリカルマジカル頑張ります！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751z/>

魔法少女リリカルなのは Rewrite

2011年12月25日17時59分発行